

複雑系の学問としての本草学

KAWASAKI, Eiko / 川崎, 瑛子

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

162

(発行年 / Year)

2014-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第328号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2014-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010260>

法政大学審査学位論文

複雑系の学問としての本草学

川崎 瑛子

目次

序章

1. 本草学とはなにか
2. 論文の構成
3. 本論の方法

第1章 『新刊多識編』の世界

1. はじめに
2. 『新刊多識編』の目的と蒐集される「名」
3. 『新刊多識編』から見る本草学の知
 - 3.1 水部から見る名づけの判断
 - 3.2 日本へのまなざし
4. おわりに

第2章 『大和本草』がもたらした日本本草学

1. はじめに
2. 総論から読み解く『大和本草』の目的
 - 2.1 自序から読み解く益軒の目的意識
 - 2.2 定義された「博物ノ学」と手段の宣言
 - 2.3 物理の究明と拡大された思考の表明
3. 『大和本草』が目指した本草学
 - 3.1 『大和本草』の手段
 - 3.2 「標識」による蒐集と集合知
 - 3.3 民生日用の知
 - 3.4 浮上する日本像
 - 3.5 賞翫する精神と百出する花
 - 3.6 不思議な現象と異形の記述
4. おわりに

第3章 恕庵本草学の展開

1. はじめに
2. 本草学者を取り巻く環境と学問観
 - 2.1 恕庵本草学へのまなざし
 - 2.2 本草学をとりまく価値観
3. 『用薬須知』の解説からみる恕庵本草学の知の視点
 - 3.1 言葉とモノの同定
 - 3.2 産地の記述と優劣の判断
 - 3.3 薬効の記述とその目的
 - 3.4 利用手段と製法の知
4. おわりに

第4章 薬品会の登場

1. はじめに
2. 『文会録』が編集する知
 - 2.1 序文が語る薬品会の意義
 - 2.2 過去の知の更新
 - 2.3 観察と関係の考察
 - 2.4 記述される「衆評」
 - 2.5 『文会録』が編集しようとした知とその手段
3. 『楮鞭余録』が編集する知
 - 3.1 序文が記述する本草学
 - 3.2 記述される「土地」
 - 3.3 再編集される古典
 - 3.4 日本と世界へのまなざし
4. おわりに

第5章 『物類品隲』と薬品会

1. はじめに
2. 『物類品隲』による本草学の展開

- 2.1 薬品会の歴史と開催の目的
- 2.2 『物類品隲』の構成
- 2.3 『物類品隲』序文からみる薬品会の様子
- 3. 『物類品隲』に記述された薬品会の経験と知
 - 3.1 薔薇露から繋がるヨーロッパの知
 - 3.2 金剛石から広がる東西の知
 - 3.3 石髓から見えるマクロとミクロ
 - 3.4 モノから広がる関係の渦
 - 3.5 スランガステインを巡る人々
 - 3.6 芒硝から繋がる歴史
- 4. おわりに

第6章 開かれていく本草学の知

- 1. はじめに
- 2. 蒹葭堂の書斎
 - 2.1 蒹葭堂と本草学
 - 2.2 蒹葭堂の交流網
- 3. 大槻玄沢と蒹葭堂の関係からみる本草学の知の波及
 - 3.1 『一角纂考』と『六物新志』
 - 3.2 『六物新志』からみる蘭学の目的
 - 3.3 『六物新志』に記述される「出来事」と知の波及
 - 3.4 蘭学者と本草の知の関係
- 4. 『遡遊従之』からみる本草学の知の伝搬
 - 4.1 南畝の疑問点と好奇心
 - 4.2 南畝が要求する本草学の知
 - 4.3 注目された海外の情報と回答の手段
- 5. おわりに

終章

- 1. 各章の統括と本草学のその後

2. 本草学とは何か

序章

1. 本草学とは何か

本草学とは何か。これは非常に難しい問題である。

まず「本草」とは中国由来の言葉であり、植物を意味する。しかし中国史上の前漢末の頃までには、この言葉は医術や呪術に供される薬効を有した植物全体を示すものとなった。¹よって本草学とは「薬効を有し、薬物として利用することができる植物を吟味する学問」と定義づけることが可能である。

しかし西尾三郎は『文明のなかの博物学 西欧と日本』において「薬物としては、植物のほかに、動物や鉱物が使われることも少なくなかったので、正確には本草学は、医薬として利用される、あるいは薬効のある植物・動物。鉱物、すなわち自然物を研究する学問ということになろう」²としたうえで、「本草学は、このように、薬材という観点から自然物を研究するのが本来の姿だったが、やがて、とくにわが国において、時代がさがるとともに、必ずしも医薬ということにこだわらずに、ひろく自然物全般についてしらべ、その異同を明らかにして記述するという姿勢が顕著になっていった」³とする。日本の本草学は「薬物となる植物を吟味する学問」という枠組みには収まらないのである。

西村は「薬材という観点に拘束されない本草学は、西欧のナチュラル・ヒストリーとはもはや本質的な相違はないといってよい。つまり、本草学はこの時点で博物学に転じたといっても差しつかえないだろう。江戸時代中―後期はまさに、本草学から博物学への推移、そしてこの推移・転換を経たうえでのわが国独特の博物学の展開の時期にあたっていたのである」⁴と続ける。江戸時代において日本の本草学は薬物を学問するものから、西洋のナチュラル・ヒストリーこと博物学に近いものへと展開したという論である。

西村は博物学を「広く物についての情報を収集・記録し、それを分類・整理し、さらに場合によっては個物に関して明らかにされたそうした事実を説明し、そこに通底する理論や法則性まで探っていこうとする学問」であると定義する。⁵また博物学の基礎とは事物の命名と分類であり、世界の分節化であるとする。⁶西村はこの分節化を「それぞれの部族あるいは民族の物質ならびに精神生活と密接に関連していたはず」のものであるとしたうえで、「原初において、博物学は神話・信仰とも、また呪術・医術と

も一体だったのであり、言葉と技術を介して世界の事物とかかわる、人間の営みの重要な一部をなしていただろう」と結論づけている。⁷

博物学と本草学の関係について初めて言及したのは白井光太郎である。白井は『増訂日本博物学年表』で「博物学ノ如キハ常ニ医学ノ一部ヲナシ、専ラ藥物ヲ弁知シ、其気味能毒ヲ考明スルヲ以テ務トス。故ニ当時ノ博物学ハ医学ト其盛衰ヲ一ニセリ」⁸と記述しており、江戸時代を「応用博物学時代」に区分している。しかし博物学を「植物、動物、ならびに鉱物などの天産物を対象とする自然科学である」⁹とする上野益三は『日本博物学史』の中で、日本の博物学が自然科学としての形態を整えるようになったのは近世の江戸中期よりのちのことであるとする。そのうえで「医術に伴った本草学がすなわち博物学だという前提が成立せぬ限り」、白井のように「博物学ノ如キハ常ニ医学ノ一部ヲナシ」と断定することはできないと言い切る。¹⁰また上野は「本草、博物学の大きい流れに区切りをつけるのが無理である。十数世紀にわたる長い歴史をもち、高度に発達した中国本草を学んで育ったわが本草学が、そう簡単に衰退するとは考えられない」¹¹としたうえで、18世紀初頭に活躍した本草学者である貝原益軒の活動を「益軒がそう自覚していたといなかったとにかかわらず、その大部分が学問的興味による博物学であった」¹²とする。上野は江戸時代の本草学の発達を博物学という科学への前進と捉えている。

白井、上野、西村は本草学を博物学の言説の中で論じようとしている。しかし彼らの「本草学」と「博物学」の定義は各々異なり、その区別も「ナチュラル・ヒストリー」や「科学」や「医学」などの単語を用いながら非常に曖昧で、学者としての立場と主観に依存していると言わざるをえない。

これに対して杉本つとむは『江戸時代の博物学者たち』で「本草学はヨーロッパの博物学とは異なる。しからば何か。あえて比定するならば、〈文化人類学〉なのである。しかしこれほど日常生活と直結した学問も珍しく、文化人類学もまた同定に難ありとして、やはり〈本草学〉が妥当である」¹³とする。杉本はヨーロッパの博物学と日本の本草学は異なる学問であるという認識である。

杉本は本草学独自の用語として「物類」があることを提示する。¹⁴それは自然界のあらゆる物を意図する言葉であり、「人類」の対となる概念でもある。そのうえで杉本は本草学の一つの方法を「人類・物類と分けたままで本質的には人類と物類も一体としてとらえ、相関関係において自然のメカニズムを考えてみることである。この点も

ヨーロッパの自然科学などとは根本的に異なるところである」¹⁵とする。

よって従来の研究では「本草学」の定義は「博物学」という概念を巡りながら二分されていることが分かる。それは、本草学はヨーロッパの博物学との類似性と比較の中で語られるべきものであるという意見と、そのような自然科学とは根本から異なるものであるとする意見である。

しかし医術の一部である一方で薬効に拘ることなく広く物を知り、博物学から文化人類学などとの類似点を指摘される多面性を持った学問へと発展したのが江戸時代（特に18世紀）であるという点において、見解は一致している。

しかし「博物学」という言葉は江戸時代にはない。これは白井も「博物学者トシテノ貝原益軒」と題した講演で「先生（益軒のこと）ノ時代ニハ今日ノ所謂博物学ト云フモノハナカッタノデアリマス」¹⁶と語っている。つまり当時の本草学を「博物学」の言説の中で語ることは近代的な視点であり手段である。

よって当時の日本に存在しない「博物学」という言説の中で「本草学」を語ることが果たして適切といえるのかという疑問が生じる。「博物学」という言葉によって、医学の一部を為しながらも薬物としての観点を必ずしも持たない江戸時代の本草学を説明することができたとしても、研究者の立場によって意味を変える「博物学」の概念の枠組みでは本草学の本質を究明できるとは言い難い。

また日本の本草学の展開を追う研究は『日本博物学史』や『文明のなかの博物学 西欧と日本』などで常に行われてきた。これらは本草学の変遷を確かめるうえで非常に重要な見解と史料を提示してくれる研究である。しかしこの研究はあくまでも本草学の歴史の流れを追うものであり、各々の本草学書の中身は断片的に触れられるだけであつた。よって本草学の展開はダイジェストで捉えられるだけであり、本草学書の具体的な内容が追究されることはなかった。

17世紀から18世紀にかけて江戸時代が生み出した「本草学」はこれまでの本草学とは異なるとされている。それは雑学の寄せ集めではなく、集めた知識を体系づけることで新たな「知」の構造を作り上げたということである。しかし従来の研究では、その知の構造が明らかにされているとは言い難い。本草学が如何なる知識を求め、その知識をどう記述して編集しようとしたのか。知識を知としてどう構築し、その活動の中で何を読み取り、伝えようとしたのかを考察する研究は行われていないのである。

また江戸時代の本草学が対象にしたのは動植鉱物などの「物」だとされているが、

名だたる本草学書を見ると火や水などの自然現象も考察の対象となっており、記述の内容は日本の歴史や民俗にまで及んでいることが分かる。本草学とは動植鉱物の形状や性質を単純に論じる学問ではない。

独自の発展を遂げたとされ、博物学とも言い換えることができない江戸時代の本草学を、本論文では「江戸本草学」と称することにする。また本草学者たちが知の対象とした動植鉱物や自然現象を一括して表現するために「モノ」という言葉を使用する。

本論文は本草学を究めようとした江戸時代の人々が、動植鉱物のみならず自然現象まで含んだ「モノ」を如何に理解し、またどのような手段（書き方）で記録しているのかを考察することにより、江戸本草学の知の構造を究明するものである。

2. 論文の構成

本論文の本論は 6 章からなる。章ごとに中心となる本草学者と本草学書を定め、それぞれの活動や内容を具体的に考察しながら、徐々に時代を繰り上がっていく。これにより、従来の研究で独自の展開を遂げたとされる 17 世紀から 18 世紀の江戸本草学が、如何に発展を遂げていったのかを追うことが可能となる。以下に構成を示す。

第 1 章 林羅山『新刊多識編』 寛永 8 年 (1631 年)

林羅山（天正 11 年（1583 年）－明暦 3 年（1657 年））は徳川家に召し抱えられた最初の儒者である。この羅山が『本草綱目』を参考にしながら編集したものが『多識編』であり、それが多くの版を重ねた末に出来上がったものが『新刊多識編』である。

『新刊多識編』の本草学的意義について、杉本つとむは『本草綱目』の手引書であり、詳細な本草研究書とはいえないとしながらも、日本語の呼称のみならず南蛮にまでいたる外来語の呼称や民俗にまで踏み込んだ記述の内容を分析することにより「本格的に本草学が日本に展開する出発点、基礎工事を示すものとして、史的位置の高い労作とっていい」¹⁷とする。

また西村三郎は羅山が『本草綱目』のほかにも様々な本草学書や医書を読んでいたことを踏まえたうえで、「それは、あくまで読解するというだけで、みずから自然物を採集して、実物について調べるというのではなかった。彼の関心は、漢名の動・植・鉱物は邦産の何にあたるのか、またそれに対していかなる和名をあてるべきか」という点に集中していた」¹⁸とし、『新刊多識編』はこの観点から編まれた書物にほかな

らず、古文献に出てくる名称の実態を弁明することを目的とする名物学の分野であるとする。¹⁹ また西村は「羅山に限らず、わが国の本草—博物学には、この名物学の傾向がのちのちまで濃厚につきまとう」²⁰とし、「名物学との混交が強かったからこそ、本草—博物学がわが国で、プロの医師や本草家の範囲を超えて、一般知識人、さらには庶民のあいだにまで幅広く流布したのではないかとの可能性も、検討してみる価値が十分あるだろう」²¹とする。

これらの見解に共通するのは『新刊多識編』が日本の本草学にとって非常に大きな影響を与え、また基盤となっているということである。しかしこれまでの研究では名称を一致させる活動であったことが指摘されるだけで、『新刊多識編』の記述から名を中心とした本草学の知の構造や実態を解明するものはない。また『新刊多識編』は『本草綱目』を中心とした古文献を解読するだけではなく、日本人の生活や民俗の言及にもいたる。『新刊多識編』は中国の知識を「日本」のものへと知識を作り変えようとしていたことが分かる。よって第1章では『新刊多識編』の内容を吟味することにより、江戸本草学の知の基盤を構成することを目的とする。

第2章 貝原益軒『大和本草』 宝永7年（1709年）

羅山が『本草綱目』を参考にして『新刊多識編』を編集したのに対し、貝原益軒（寛永7年（1630年）—正徳4年（1714年））は『本草綱目』への批判精神に基づいて生み出した独自の分類方法によって『大和本草』の内容を編集した。『本草綱目』に依存しない思考の枠組みを作り上げたという点において『大和本草』は江戸本草学の研究において非常に重要な視点を提供してくれる本草学書であり、書名に「大和」を冠したことからも分かる通り、日本の知を追究した末の成果は江戸本草学の発展に大きな意義を持っている。

現代の研究でも上野益三は江戸時代の本草学を『大和本草』を中心に三期に分けて区別している。上野が『大和本草』を重く見る理由は「この書の編述の発想が『本草綱目』の読破と検討の結果によるとはいえ、篤信（益軒）が自ら各地で実物について得た具体的知識で、全篇を貫いていることである」²²とする。また西村も「それまでのわが江戸期の本草家・医師が『本草綱目』の権威にほとんど全幅的に追従していたのに対し、益軒のこの著作は、李時珍になお大きく拠っているとはいえ、それに盲従することなく、独自の視点、独自の分類法にもとづいて、日本固有の本草書をめざし

たという意味で、画期的なものだった」²³とし、その分類方法については「実用主義・便宜主義的色合いが強い」²⁴ものであるとしたうえで「人間中心的で実用本位の分類法であるがゆえに、一般民衆にとってきわめて納得のいく、わかりやすい体系だった」²⁵と評価している。また杉本も『大和本草』に「博物・民俗・生物・人類・物理・方言・変態・胎生・卵生」などの言葉が用いられていることから、益軒の学問体系が整っていることを指摘し²⁶、「彼は本草学を博物学、生態学、さらに文化人類学的な世界にまでたかめようとしたといってもいいかと思う」²⁷と論ずる。

『大和本草』は本草学という呼称に盛りきれない内容と記述を備えている。本草学という言葉に還元させることのできない「複雑さ」を『大和本草』は持っており、この「複雑さ」こそその後の江戸本草学の発展を促す要因の一つである。

よって第2章では『大和本草』を取り上げることにした。『大和本草』の記述を考察することは、蒐集された知識を体系づける手段を究明することにも繋がり、江戸本草学の特徴と実体を明らかにする糸口ともなる。

第3章 松岡恕庵『用薬須知』 享保11年(1726年)

松岡恕庵(寛文8年(1688年)－延享3年(1746年))は益軒とも交流のあった人物でもある。恕庵は自身の門人のために『本草綱目』を講義するだけではなく、動植物の品類を取り上げて各々編纂した『梅品』『桜品』『蘭品』『竹品』『苔品』『菌品』『介品』『石品』『広参品』などを遺した。この成果に対し上野は「書物から得た知識と、自らの観察結果との整理が十分ではなく、雑駁なのを免れない。またその挿図も粗雑幼稚なものが少なくない」²⁸としたうえで「玄達(恕庵)によって邦産動植物の知識は著しく増大したことは確かである」²⁹としている。恕庵の知識は後の本草学の発展の一翼を担ったという評価である。また太田由佳の研究によって恕庵が「格物」と「正名」の両語をもって本草学研究を「聖人の学問」たり得べきものとして意義付けていたことが指摘され、恕庵の本草学の特色と学問観が明らかとなった。³⁰

「名」と「モノ」を一致させる試みは第1章で取り上げる『新刊多識編』でも行われていた。しかし『新刊多識編』から90年近い年月の間に本草学が如何に変化したのかを考察することは非常に重要である。また前田綱紀³¹の侍医でもある小瀬復庵が遺した資料では恕庵の知見は「珍らしきこと」³²として評価されていることから、恕庵の知識や手段は非常に特徴的なものであったことが窺える。かつ恕庵は、幕府が設立

した和薬改会所で集められた本草の薬事検査をする役目を負っており、政治にも重要視される知識と実力であったことが分かる。よって恕庵が構築した本草学を考察することは江戸時代が欲した知識を知ることにも繋がる。

第3章では恕庵の生前に唯一上梓された『用薬須知』の内容を分析することによって、恕庵による本草学の知の体系を考察し、本草学の変化を明らかにする。

第4章 戸田旭山『文会録』宝暦10年(1760年)、豊田養慶『楮鞭余録』宝暦11年(1761年)

本草学の発展に伴い、全国から本草学を学ぶ人々がモノを持ち寄り質疑応答を行う薬品会という活動が始まった。これは江戸時代の本草学の新たな展開であるといえる。

田村藍水(享保3年(1718年)―安永5年(1776年))が宝暦7年(1757年)に江戸で初めて薬品会を開催してから大坂や京都、名古屋にまで開催場所は広がり、途中で幾度か開催されない時期はあったが、幕末まで続いた活動であった。³³現代でも富山や立山で行われた薬品会を通じて江戸本草学の受容と展開を考察する研究もおこなわれている。³⁴よって薬品会とは人間の好奇心と交流の広がりを考察するうえで非常に重要な情報を与えてくれる活動である。

西村は薬品会が開催された背景には本草学のみならず「複数の人間が自分の一品(必ずしも物でなくてもよく、作品でもよい)を持ち寄って示し合い、たがいに競い合って楽しむ。あるいは品評しあって研修するという趣向が全国的に広まっていた」³⁵ことを指摘したうえで、薬品会の開催も「平和な社会におけるなごやかな「社」ないし「連」的行動³⁶のひとつと考えてよいのではあるまいか」³⁷としている。薬品会の開催と発展は時代性を論じる上で非常に重要な視点を提供してくれるものでもある。

しかしこれまでの研究は全て薬品会が周囲に与えた影響を考察するものであり、薬品会を開催した人物たちが会に何を求め、会で得た知識を如何に知へと転換させたのかを考察するものはなかった。薬品会では開催後に会主による出品物の解説目録書が出版されているのだが、その記述の手段と内容に踏み込むことにより、薬品会の経験が如何に本草学の知の記述に変化を与えているかを考察するものはない。

よって第4章では薬品会の解説目録書として登場した戸田旭山(元禄9年(1696年)―明和6年(1769年))による『文会録』と豊田養慶(生没年不明)による『楮鞭余録』の内容を分析することにより、薬品会の経験者らが薬品会に何を求め、得た知識

をどう記述しているのかを考察する。

これまでの薬品会の研究でこの2冊が扱われることはなかったが、その記述と内容、知識への視点はこれまでの本草学書とは異なるものであり、見過ごすことはできない。この考察によって薬品会が本草学に与えた影響と、会を経験した人物たちの知的興奮や目的意識が如何に知へと昇華されたのかを明らかにする。

第5章 平賀源内『物類品隲』宝暦13年(1763年)

『物類品隲』は最大規模の薬品会である第五回東都薬品会の会主を務めた平賀源内(享保13年(1728年)－安永8年(1779年))が中心となって編集した薬品会の解説目録書である。全六巻のうち五巻は図譜であり、これもヨーロッパの明暗法を木版画によって試みるという新たな技法を導入している。また最後の巻は付録であり、人参耕作法や砂糖製造法などの技術を載せており、これまでの本草学書とは異なる独創的な構成になっている。オランダからの輸入品やオランダ語、オランダ人などの登場頻度はこれまでの本草学書に比べてはるかに高く、杉本は「いよいよ本草学が文字どおり学芸復興の波にのってグローバルな広がりをもってきたとはいえる」³⁸と評価する。『物類品隲』は最大規模の薬品会の実態を探るだけでなく、本草学の新たな展開を考察することが可能な本草学書であるといえる。

しかし『物類品隲』が薬品会の解説目録書ということを踏まえたうえで、源内らが薬品会の経験を従来の知識にどう反映させようとしていたのかという視点から論じた研究はこれまでなかった。

『物類品隲』にはオランダ人だけではなく、杉田玄白や吉雄耕牛など蘭学の勃興に関わる人物の他に鎮惣七のような農人まで個人名を伴って登場する。その為、『物類品隲』からは当時どのような人物らが本草学に興味を持ち、如何なる知識を携えて薬品会を経験したのかが分かる。

よって『物類品隲』を分析することは、薬品会の熱気を再現するに留まらない。どのような人々が本草学とどう関係していたのかを知ることにも繋がるのだ。そして源内らが薬品会に求めた目的のみならず、薬品会で何を「知り」、何を「見て」、その経験を如何に記述することで、経験を本草学の知へと展開させたのかを知ることにもなる。第5章では薬品会の経験が本草学に与えた影響だけではなく、本草学者たちの視点や求めていた価値観などを明らかにする。

第 6 章 木村兼葭堂、大槻玄沢 『六物新志』 寛政 8 年 (1796 年)、大田南畝『遡遊
従之』 享和 2 年 (1802 年)

薬品会によって本草学の知識を究め、好む人々の関係は大きく広げられた。その関係と影響を考察するために第 6 章は木村兼葭堂(元文元年(1736 年)－享和 2 年(1802 年))を中心にする。兼葭堂は旭山の薬品会にも出席した人物であり、幼年の頃から本草学を好む人物だった。書画を嗜み、漢詩の心得もある兼葭堂は珍しい書画や器物、古典籍などを蒐集し、それを広く一般に開放した。兼葭堂の書斎には雅俗を問わず人が集まり、現代の研究では兼葭堂を中心とした知的交流と交遊関係を考察する研究が多い。³⁹

第 6 章ではまず『兼葭堂雑録』から兼葭堂の本草学について考察する。これにより薬品会を経験し、知を好む多くの人々の交流の中心点でもあった兼葭堂の本草学に関する知の構造が明らかになる。

そして次に書斎に訪れた多くの人々の中でも、特に本草学方面の知識を求めた大槻玄沢(宝暦 7 年(1757 年)－文政 10 年(1827 年))と大田南畝(寛延 2 年(1749 年)－文政 6 年(1823 年))の活動を資料とする。大槻玄沢は兼葭堂の『一角纂考』を附する形で『六物新志』を出版した。『六物新志』は、蘭書の訳述による考察が主だが、『大和本草』や『用薬須知』などこれまでの本草学書からも多くの根拠を得ており、源内の名も登場する。よって『六物新志』を考察することは本草学のモノに対する知識が如何に蘭学に影響を与えたのかを知るものとなる。また兼葭堂の存在が如何に玄沢の活動に影響を与え、玄沢の知識が兼葭堂にどう作用したのかという、本草学を媒介にした知の相互作用を見出すものともなる。

次に大田南畝と兼葭堂の質疑応答を収録した『遡遊従之』を考察する。幕府の役人であり文人でもある南畝が兼葭堂のどのような知を欲し、また兼葭堂は如何なる回答を提供したのかを考察することは、本草学に精通した人物が時代に果たした役割を明らかにするだけではなく、江戸社会の中の本草学の意義を明らかにするものとなる。

以上が本論文の構成である。第 1 章から第 5 章は本草学者という本草学の「内部」の人々が掲げる目的意識と活動、本草学書の内容を考察する。それによって江戸本草学の展開と知の構造を明らかにする。そして第 6 章では本草学者と交流した「外部」

の人々による本草学の捉え方を分析することにより、江戸時代に本草学が果たした役割を考察する。本論文は江戸本草学を再構築するものである。

3. 本論の方法

近代から現代の研究で指摘されるように 17 世紀から 18 世紀にかけて江戸本草学は独自の展開を遂げている。そしてその実像は「博物学」や「文化人類学」など本草学以外の概念によって解説が試みられるほど、それまでの本草学からは逸脱し、予測されないものであった。その為、「博物学」などの言葉を用いることなく江戸時代の「本草学」を理解するためには、従来の研究とは異なる方法や言葉が必要となる。

本草学書の内容をみると、本草学は動植鉱物だけではなく水や火のような自然現象を知の対象としている。そして江戸本草学の記述は中国由来の古文献と実際のモノの照応だけではなく日本の民俗や歴史に言及し、薬品会が開催されたのちは本草学に関わる人々の活動にまでいたる。江戸本草学の特徴は、多岐に渡る内容と記述の幅広さゆえに生じる「複雑さ」にある。

江戸本草学では議論の中心点は定められていない。薬効を論じたと思えば言葉の由縁に触れ、生活上の利用手段を解説し始めるという「複雑な」展開をとるのである。

よって江戸本草学を理解し、再構成するために本論文では「複雑さ」（あるいは「複雑な」）という概念を使用する。この「複雑さ」とは「ごちゃごちゃした」を意味する「complicated」ではない。本論文で「複雑さ」という言葉を使用する場合、それは「複合の」という意味を同時に持つ形容詞としての「コンプレックス complex」であり、名詞ならば「複雑なもの」を意味する「コンプレキシティ complexity」を意図する。

「ごちゃごちゃした」を意味する「complicated」は「整理すれば理解することができる」ものを意図している。しかし江戸本草学の構造は対象となるモノの薬効や形状といった要素の単純な組み合わせではない。詳しくは本論内で論じるが、江戸本草学は要素に分解して理解することができる学問ではない。記述の「全体」で理解すべき学問なのである。よってこの江戸本草学の性質に対して、本論文は「複合の」というニュアンスを同時に含み、「複雑なもの」を意図する「コンプレックス complex」であり「コンプレキシティ complexity」でもある「複雑さ」という概念でアプローチする。

また「複雑さ」という概念で江戸本草学を捉え直すと、その知の構造は「複雑系」

であるということができる。「複雑系」とは現代の自然科学などの分野で、一つの要素に分解することで全体を理解しようとするような手段を用いることができないシステム（たとえば「生命」「知能」「思考」など）を理解するために注目されている「とらえ方」である。

複雑系の定義は、あるシステムを想定した場合に「システムを構成している要素は各自のルールに従って機能しており、局所的な相互作用によって全体の状態・振舞いが決定される。そしてそれらの全体的な振舞いをもとに個々の構成要素のルール・機能・関係性が変化していくシステム」⁴⁰である。本草学の知を動植鉱物の個々の記述に分解することで理解できるものではないとする本論文は、「生命」や「知能」「思考」などを追究する為の手段である「複雑系」という概念を用いながら分析する。よって本論文は概念に留まることなく本草学の「複雑さ」の実像を明らかにし、「複雑系」の知の構造を再構築することを試みるものである。

第1章『新刊多識編』の世界

1. はじめに

江戸時代における本草学の追究は慶長12年（1607年）に林羅山が長崎で『本草綱目』を手に入れ、徳川家康に献上したことから始まる。⁴¹

羅山は『本草綱目』を参考にして『多識編』を執筆し、寛永6年（1630年）に『多識編 一名、古今和名本草并異名』の書名で刊行した。そして寛永7年（1631年）には『新刊多識編』を出版する。これらは『本草綱目』から漢名を抜粋し、それに万葉仮名を記した著作である。

本草学は中国から渡ってきた学問である。その為、まずは中国語と日本語の関連を検討する必要があった。たとえば中国で「豚」というものが日本での「猪」に相当し、漢名の「土筆」が和名の「ツクシ」に対応するなど漢名に相当する和名を同定し、意味を吟味しなくてはならなかったのだ。その為、中国から輸入された漢籍を日本語に訳し、その本草書に書かれた内容を日本の同種同類のものに対応させることが求められた。『多識編』も漢名のモノが邦産の何に相当し、またそれに如何なる和名が適用さ

れるかという「モノ」と「ことば」の同定作業が中心に行われた。これは本草学を学問するというよりも『本草綱目』を研究するものであったといえる。⁴²しかし『多識編』は幾度も版を重ね、体裁を変えながら出版され続けていることから、非常に大きな反響を世に与え、広く受け入れられていたことが分かる。⁴³その末に『新刊多識編』が完成した。

本章は林羅山が吟味を重ね、版を重ねた先に完成した『新刊多識編』の内容を分析することにより、江戸時代の本草学の始点となり基盤となったとされる目的と知の構造を吟味するものである。

2. 『新刊多識編』の目的と蒐集される「名」

『新刊多識編』⁴⁴の著者である林羅山は徳川家に召し抱えられた最初の儒者として著名な人物であり、現代でも思想史の分野で大きく取り扱われることが多い存在である。羅山は家康に命じられて長崎に赴いた際に『本草綱目』を手に入れる。

『新刊多識編』の「多識」とは『論語』陽貨篇にある「多ク鳥獸草木ノ名ヲ識ルベシ」からとったものであるとされている。⁴⁵多くの「名」を知ることを求める一文からとられた書名にふさわしく、『新刊多識編』には多くの名称が登場する。そこに記述される名称と漢名を見出しにし、それに対応する和名のみならず、「異名」とされる別名や派生語にまで至る。その名称を持つ事物の実態に関する弁明や解説は殆どない。『新刊多識編』は名称が蒐集された書籍であるといえる。

『新刊多識編』は全五巻からなる三冊本である。その構成は『本草綱目』を参考にしているが、巻五の「支脉部第一・田制門第三」以降は『本草綱目』に合致しない。「田制門」の項目に入る直前には『農書』——「東晋、王禎撰、元朝人ナリ」と羅山自身の注釈がある。この『農書』が日本のものではなく王禎撰元朝の人である東晋によって著されたものであることを明確にしており、『本草綱目』以外の中国古典からも羅山は知を蒐集していることが分かる。⁴⁶

また『新刊多識編』では「今案」という言葉で羅山自身の説明が開始されることが多い。たとえば甘露では「甘露今案阿米乃豆油」⁴⁷とされている。漢名で甘露されるものは日本では「アメノツユ」であるという表記である。また「異名」は陰刻になっており、一目でそれと分かる表示になっている。鉛の項目では「鉛那末里^{異名}青金説文金公綱目」⁴⁸と記述されており、鉛が漢名であり、那末里ことナマリが和名である。

そして異名が青金と金公である。小文字で記述されている「説文」とは後漢の許慎が著した『説文解字』の略であり、「綱目」は『本草綱目』である。つまり青金という異名は『説文解字』を根拠としており、金公も同様に『本草綱目』に依るものであると出典を明確にしているのである。よってここからも『新刊多識編』は『本草綱目』を中心に他の古典籍からも多くの知を蒐集していることが分かる。且つ出典を明らかにすることで、これまでの本草学書の便覧や索引としての働きを『新刊多識編』は備えている。

しかしその「名」の参照は文献に留まらない。鯨魚の項目では「鯨魚綱目異名沙溝魚俗名沙鯧」⁴⁹とある。『本草綱目』にある鯨魚の「俗名」を沙溝魚としている。(鯨魚は現代では鮫の意味であり、沙溝魚はオコゼ、沙鯧はイワシである。しかし本章は『新刊多識編』の知識の正確性を議論することを目的とするものではない)。この「俗名」の出典は明らかではない。日本のものか、それとも中国の名称なのかも判然としない。しかし文献だけではなく、生活の中で人々が使用しているいわゆる「呼称」も「名」として『新刊多識編』は蒐集していることが分かる。

『本草綱目』には記述されていた薬効や主治などの知識を削除した『新刊多識編』とは、漢名を基点として同一のモノを示す名を古今東西の文献と方言から蒐集しようとする試みの結果である。⁵⁰『新刊多識編』の編纂において中心となっていた目的は、名の「蒐集」にあるといえよう。しかし名をいくら蒐集しても、一つひとつの名称を照応させていかななくてはならない。次章では『本草綱目』が蒐集した名をいかに関連付け、照応させているのかを考察する。

3. 『新刊多識編』から見る本草学の知

3.1 水部から見る名づけの判断

『新刊多識編』は水部から始まる。この水部は第一と第二に分かれており、第一は「天水」、第二は「地水」という見出しがつけられている。これは『本草綱目』を踏襲した構成である。水はたとえ化学的性質が同じであろうとも天に由来するか地に基づくかによって、異なる価値が与えられ、意味を求められようとしている。天地という環境とその変化の中でモノを究明しようとする本草学の知の一端が垣間見られる。

天水である水部第一は、雨水「下米今案阿未美雨」(アメ、イマアンズルニ、アマミヅ)、梅雨水「牟米乃阿米今案豆由」(ムメノアメ、イマアンズルニ、ツユ)、立春雨水

「今案ニ波留多豆比乃阿米」(イマアンズルニ、ハルタツヒノアメ)の三種類の雨から始まる⁵¹。

雨水はただの「雨の水」であるものと、梅雨の雨水であるもの、そして立春の雨水であるものは各々異なるものとして認識されていることが分かる。本草学では同じ「雨水」であっても季節との関係で名は変わり、意味が異なる全く別のものとして扱われるのである。そして各々の名の意味を『新刊多識編』は思考し、また日本におけるどの季節の雨を指す名であるかを吟味している。

そして霪雨、入梅、出梅、迎梅雨、送梅雨は「今案美多礼」(イマアンズルニ、ミダレ)とされている。⁵²これは五月雨のことである。霪雨、入梅、出梅、迎梅雨、送梅雨は「ミダレ」の言葉の中に収束されると同時に、「ミダレ」は霪雨や入梅といった多くの名の集合ともなる。この五種類の名称を全て「ミダレ」に集合させていることから、『新刊多識編』における「名づけ」の判断基準は「季節」であることが分かる。

また臘雪は「由幾今案志和須乃由岐」⁵³(ユキ、イマアンズルニ、シワスノユキ)である。雪は雪でも「臘雪」とは12月の雪をさす。12月の雪は固有の名を与えられ、他の時期の雪とは置換することのできない特別な雪となる。

ここから季節や時期の変化というのは、本草学を究めるにおいて見過ごすことのできない情報であり、その知を考察するための重要な要素であることが分かる。『新刊多識編』もその手段に従って名を蒐集し、判断を下している。

次に地水を収載した水部第二である。まず流水「那加礼美豆」(ナカレミヅ)、千里水(今案那加那加礼美豆)(イマアンズルニ、ナガキナガレミヅ)、東流水「比加志乃那加礼美豆」(ヒカシノナカレミヅ)がある。⁵⁴同じ流水でも長い距離を流れてきた水と東を流れる水には各々個別の名が与えられている。よって季節や時期のような天の運行だけではなく、地の距離や方向も本草学の知に大きな影響を及ぼす情報であり、知識を究めるための手段となっていることが分かる。(この場合の情報とは、対象の動作や反応の為に用いられる指令のことであり、また受け手において状況に対する知識をもたらしたり適切な判断を助けたりするもののことを指す)。

本草学の知とは天地との関係の中で構成されるものである。『新刊多識編』もそれを踏まえて知識を整理し、名を求めようとしている。

そして本草学の知に影響するのは天地の様態だけではない。この地水の項目には車轍中水「久留未乃和多知乃阿登乃美豆」(クルマノワタチノアトノミヅ)や洗手足水「堤

阿之能阿良比美豆又云提宇豆美豆)「テアシノアラヒミヅマタイウテウヅミズ)がある。⁵⁵車轍中水というのは車が走った後の轍に溜まった水をさし、洗手足水とは手足を洗う水のことをいう。器物や人体に接する水もまた個別の名を与えられ、他とは異なる価値を持った別個の水となる。本草学にとって器物や人体の介入もモノの意味を変える素材であり、知を究めるために必要な情報であることが分かる。

よって本草学とは化学的な性質を基準とした分類を行い、整然とした体系を作り上げようとする学問ではない。『新刊多識編』の水部からは、本草学とは天地の影響の中でモノを思考し、器物や人体など外部との関係の中でモノを吟味する学問であるということが分かる。

3.2 日本へのまなざし

『新刊多識編』は『本草綱目』を中心に蒐集した漢名から和名を同定するという作業が行われている。しかし名を対応させ、吟味するだけではない。石炭は「今案伊志乃阿良須美又云毛乃加記須美近江国栗本那掘地取玉加炭燃之代薪曰須久毛」⁵⁶とある。石炭はイシノアラスミでありケノカキスミであるという名の同定に終わることなく、近江国栗本という地で行われている石炭の扱いが記述されているのである。そこでは地を掘ることによって得た玉に炭を加えて薪の代わりに燃やしていると『新刊多識編』は記述する。これは近江国の栗本という日本の一地域で行われている生活の様子である。『新刊多識編』は石炭という言葉の吟味する中で日本の生活の一部を蒐集するに至った。また石脳油の項目でも「越後ノ国ニ石油有リ」という一文がある。⁵⁷

鯨については「久志良日本ノ海畔ニ處々取食共脂甚臭臊賤民燈油ニ代フ、土佐海上漁人蠟ノ如ニシテ、而ルニ 者ノヲ採リテ、曰ク是レ鯨鯢屎也ト云フ。国守因テ大樹ニ献ス。今南蛮薰丸阿牟倍良ト号ス者ノ射香鯨屎和合シテ為ス之ヲ売胡甚タ之ヲ珍ト云フ」⁵⁸と記述されている。訳すると「鯨とは日本の海畔ではこれを捕まえて食べており、その脂を賤民は燈油の代用品として用いている。また土佐の漁師は鯨の屎という蠟によく似たものを取り出し、これをこの国の最高位の者に献上している。また今、南蛮で薰丸というものは阿牟倍良というものと鯨の屎を混合して作るものであり、非常に珍重されている」となる。

これは地方の民の生活だけではなく、献上品や南蛮との取引の材料ともなる「物産」の記述である。『新刊多識編』は漢名に対する和名を同定させ、名を古典から蒐集した

だけの書籍ではない。和名を蒐集していく作業の中には日本の一地域の習俗や物産への関心もあったことが分かる。

『新刊多識編』は古典を再編集した書籍ではない。漢名に相当する和名を判じると同時に、中国とは異なる日本の土地や日本人の生活、そして日本特有の物産にまで関心を広げ、知を蒐集している。『新刊多識編』の作業とは中国の学問を日本の知へと転換させていくものであったといえよう。

4. おわりに

『新刊多識編』の「名づけ」を考察すると常にモノは天地の動向や人間との関係の中で意味づけられ、価値づけられようとしていることが分かる。よって本草学とはモノを単独で記述し、吟味する学問ではないことが分かる。

本草学とは吟味の対象となるモノを、天地や人間との関わりの中で考察し、その影響の内容と共に記述する学問である。そして本草学を究めるにおいて、天地間の変化や人間の活動は見逃すことのできない重要な情報である。その情報は本草学の知を構成する重要な要素でもあることが『新刊多識編』の「名づけ」の判断から分かる。

そして『新刊多識編』はただ古典を再編集した書籍ではなく、その価値は他の本草学書の便覧や索引には留まらない。名を蒐集する中で日本の環境を改めて吟味し、献上品となる物産のルーツも判明させるに至っている。『新刊多識編』は名の同定作業を進めながら、中国から渡ってきた本草学の知識を日本の環境に合致する知へと置き換えていこうとしているのである。その関心の方向は日本人の生活の実態にも切り込む「複雑な」ものであった。

本草学は決してモノを化学的性質や形態によって整然と分類する学問ではない。『新刊多識編』ではモノに影響を及ぼす環境との「関係」に基づいて名を定義し、名を持たされたモノはそれらに関わってきた歴史や人の生活などの情報を引き出す要因にもなる。よって本草学は複数の要素と情報がたえず相互に影響を及ぼす関係を思考し、その関係に伴って知識を記述していく学問であるといえる。本草学に「複雑さ」が生じる理由はモノが天地や人間との関係の中で吟味されているからではない。ありとあらゆる要素が相互作用する「有り様」が記述されるために生じるのである。

また『新刊多識編』は古今東西の古典から知を蒐集し、『本草綱目』を筆頭とした中国の本草学の構造を踏襲したうえで、日本の環境や日本人の生活に基づいた本草学を

構築しようとしている。以上のことから「知の日本化」という目的意識と手段こそ、江戸時代の本草学を構築する基盤となっていたという可能性が考えられる。

後章では「複雑な」記述と共に「知の日本化」を目指した江戸時代の本草学の実像と展開の様相を、名だたる本草学書や本草学に関わる活動が残した具体的な記述によって考察する。そこに各々の本草学者たちの目的意識を併せて論じることで、江戸時代における本草学の「複雑さ」の実態をその知の構造と共に明らかにするものとなる。

第2章『大和本草』がもたらした日本本草学

1. はじめに

『本草綱目』の輸入と『新刊多識編』による知識の普及によってありとあらゆる事物に対する関心が日本に広まった。⁵⁹その発展は17世紀中ごろから一般庶民向けの暦、辞書、農業書などが登場しており、知識は広範の層に行き届いていたことが分かる。

その中で『訓蒙図彙』のような、動物や植物のほかに天文や地理、人体、衣服などのありとあらゆる事物を絵入りで解説した百科事典が登場する。あらゆる事物を図解し、解説をつけるという「百科事典」の潮流は後の寺島良安によって正徳3年（1713年）に出版された『和漢三才図会』に受け継がれていく。

あらゆるものが調査と記述の対象になると同時に、農業技術の発展という時代の情勢に伴って農書の刊行も盛んになる。天和年間の『百姓伝記』は三河、近江地方の農作や経営について論じたものであり、貞享元年（1684年）には東北寒冷地方における農法を考案した『会津農書』などが登場する。農書の登場は時代の反映でありながら、その内容は日本の一地域の環境の独自性を理解する手段ともなる。元禄10年（1697年）に出版された『農業全書』のように地方を越えて全国へと流布していく農書が登場することで知識は広く伝搬し、共有されていった。17世紀の日本には天地人にまたがるあらゆる知識を事典として網羅し尽くす知と、実用に徹底した知識と技術を日本のあらゆる環境の中で体系づけた知が展開していた。

このような「事典」と「実用」の手段が模索される時代に本草学も影響を受けていく。高田玄柳は天和3年（1683年）に日常的に用いる薬物をいろは順に整理した『湯

液片玉本草』を出版し、さらにはいろは順に整理するだけでなく図を付した『図解本草』が下津元知によって貞享 2 年（1685 年）に登場する。より知識を引きやすく、より簡便に、そして日用に特化して実用に徹底した本草学書は版種も多く、広く一般に流通していた。これらは本草学書の中でも「能毒書」と呼ばれるものであり、知識は薬物の効能や毒性、調剤法という医学の知識を中心とし、医療の手段を模索するものである。

農書や能毒書の展開と受容と同時に「食物本草」の分野の発展が起こったことが指摘できる。食物本草とは、本草学の中でも特に薬物である本草を食物としてとらえる分野である。中国では古くから成立していた分野であり、日本では慶長 18 年（1613 年）に曲直瀬玄朔によって『日用食性』が登場した後に、寛文 11 年（1671 年）に名古屋玄医が『閩甫食物本草』を出版する。そして貞享元年（1684 年）に『庖厨備用倭名本草』が登場する。

この『庖厨備用倭名本草』は加賀藩主である前田綱紀に要望によって編集されたものである。本草学の知識は大名にも要求され、時代の流れと政治の影響を受けながら発展を遂げていることが分かる。『庖厨備用倭名本草』の凡例では「凡倭名ハ源氏倭名鈔ニ依テ之ヲ譯シ、林氏多識篇ヲ以テ之ヲ助ク」⁶⁰とあり、羅山の『多識編』が本草学の知識の読解に役立っていたことが分かる。また凡例には「凡書法、片假名字漢字ヲ雜ヘ書クハ庖厨人々讀ニ易シクヲ要ス。漢語和語俚語ヲ相雜ルハ人易カラシコトヲ知リ要ス」⁶¹とカタカナや漢字を交えて書くのは料理に携わる人々が読みやすいことを願ったからであり、漢語、和語、俗語などが交えてあるのは一般の人々にも理解しやすくするためであるとある。知識の実用化と啓蒙意識は知識を受容する層の拡大のみならず書籍の記述にも変化を及ぼしていることが分かる。

『庖厨備用倭名本草』の特徴は『本草綱目』や『和名抄』、『多識編』などを引用しながら元升の私見が記述されるところにある。たとえば秈米⁶²は「元升曰此註ヲミレハ秈米ハ西国ニ多キタイタウナルヘシ。タイタウゴメニ赤白二色アリ。其粒ホソク長シ味ウスクシテ乾キヤスク飯ニシテ子バリナク性カロクシテ澗シヤスシ」とまずは秈米の性質と飯にしたときの状態を論じる。ここは「食物」としての解説である。続いて「凡唐天竺其ノ外異国ヨリ来ル米ハナリ形気味トモニ日本ノタイタウゴメノ如シ。故二本草ニ云ク所々ノ米ハ滋養之功ナシ。恒ニ飢ニ充ルニヨシ南方ノ火稻ハ人ヲ補益ストイヘリ此一種タダ日本ノ白米ニ同カルベシ。日本ノ米ハ粒フトクミジカク味アツ

クカワキガタク飯ニシテ子バリアリテ性ヲモシ」と外国からの輸入品と日本産の秬米の比較を行っている。また馬の解説では「吾国日本ハ神代ヨリ六畜ヲ殺スコトヲ禁シム。是ヲ食スルモノハ神社ノ参詣ヲ堅ク禁ゼラル。是即神徳ノ禽獸ニ至リ人ヲシテ功ヲ賞シ徳ニ報ルノ礼ヲ行シメタマフ。特ニ汚穢ノミノ故ニハ非ズ」⁶³と日本の殺生に対する文化と意識を記述する。『庖厨備用倭名本草』の特徴は中国やインドなどの外国との比較の中で浮かび上がってくる日本という国の風土であり文化の独自性である。そして元禄 10 年(1697 年)には人見必大による『本朝食鑑』が登場する。これは加工品を含む日本産の食物が収載されている。中国の知識の翻訳と解説が中心となっていた本草学は、徐々に中国とは異なる日本の環境の中で、日本独自の知識を体系づけていく学問となりつつある。

ありとあらゆる事物に目を向けながら、実用的な知識を追究し、普及しやすく受容しやすい記述が模索される時代の流れの中で、本草学は中国からの古典や実際の輸入品を通じて「日本」を再発見し、再確認する学問にいたりつつある。

そして宝永 7 年(1709 年)に貝原益軒による『大和本草』が刊行された。本編 16 巻、付録 2 巻、諸品図 3 巻から成立するこの本草学書は書名の通り大和《日本》の本草学を目的としたものである。

『大和本草』は序文から「本草綱目ニ品類ヲ分ツニ疑フベキこと多シ」⁶⁴とあるように、中国の古典に追従することのない「日本」の本草学を樹立させ、発展させるきっかけを生んだ本草学書とされている。⁶⁵第 1 章で論じた『新刊多識編』でも既にその傾向は現れていたが、『大和本草』は名の同定と蒐集だけではなく、議論の対象であるモノの解説も豊富である。

益軒は本草学の専門家ではなく、羅山と同じく儒者である。しかし益軒は儒学的な著作のみならず多くの旅行記や紀行文を残しており、旅によって得た体験や知識を執筆し、編集する経験も豊富であった。旅と知の関係についての益軒自身の見解は『楽訓』に記されている。

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境ののぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすすぐ助となれり。是も亦我が徳をすすめ、知を広むるよすがしなるべし。又いひしらぬ畢境に行きて、見なれぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、其里人にあひて、其所の風土をとひ、あるは奥まりたる山ふと

ころに、岩根ふみて尋ねいり、もとより山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて帰ることを忘れぬ。(貝原,1973,p616)

益軒は他郷へ旅することで山や川などの佳境を直接臨むことこそ知を拡大させる手段であるとしている。また実際にその土地で生活し続けている里の人々の経験によって語られる生きた知識も重視していた。益軒にとって旅とは知の蒐集と探索である。そして求めた知とは古典の中でのみ展開される「言葉」のような記号化された知ではなく、旅や生活などの実際の経験によって裏付けられる知であった。

益軒の知や学問観に関する研究は儒者としての観点や著作から広く考察されている。⁶⁶また『花譜』や『菜譜』そして本稿で取り上げる『大和本草』などの自然物に関する著作によって、益軒自身の発想や取り組みの独創性や近代性、そして後世に与えた影響の大きさを評価する研究もある。⁶⁷

しかし本稿は益軒自身の学問観を論じるものではない。『大和本草』から益軒の知の構造を探るものでもない。本稿の目的は『大和本草』に収載された水や火、穀物に木、そして獣や魚などのモノがどのような論点から如何に記述されているのかという「手段」とその先にある「目的」を考察することにある。

『大和本草』の記述の手段や、その記述から論じられる学問観や目的意識は確かに著者である益軒自身のものである。しかしすでに『大和本草』が益軒単独の見識に基づくものではなく、向井元升や稻生若水、松岡恕庵といった本草学者たちとの交わりにも助けられているという指摘がある。⁶⁸

『大和本草』は益軒以外の本草学者らの視線や見解の影響も受けている。確かに得た見聞の取捨も手段の選択も益軒の主観によるものだが、日本本草学を生みだしたとされ、⁶⁹また江戸時代の本草学の転換点となった要因が『大和本草』には存在する。本章はその「要因」を見つけることを目的とするものでもある。それは古典を追究する学問から脱却しつつある日本の本草学が抱えていた学問意識を探ると同時に、江戸時代における本草学の意義へとも繋がるものともなる。

2. 総論から読み解く『大和本草』の目的

2.1 自序から読み解く益軒の目的意識

『大和本草』⁷⁰はモノの詳細な解説にさがけて、自序、目録、凡例、「本草ノ書ヲ

論ス」「物理ヲ論ス」「薬用論」といった総論から始まる。本節では掲げられた総論を分析することで、本文の記述を支えているであろう執筆の意図と目的を明らかにする。前節では益軒を主体にはしないと述べたが、まずは益軒自身の本草学に対する目的意識を明らかにすることから始める。

自序で益軒は「古人謂有宇宙ノ内ノコト皆吾儒分内ノことト。蓋シ經ハ以テ道ヲ戴セ、史ハ以テことヲ記ス。其ノ次ニ物ヲ集ムル之書亦無クンバアルベカラズ是レ本草及ビ諸載ノ籍之闕クベカラザル所以也」⁷¹と述べる。宇宙内の全ての事は儒教の範疇であるとする益軒は、経書が道を説き、史書は事を記したように、本草学書をモノを蒐集する書籍にしようとしている。益軒はモノの蒐集と解説によって宇宙を記述する為に本草学と関わろうとしている。そして本草学書は経書や史書と同様に儒学にとって不可欠な書であると考えている。

また「幼ヨリ多病、好ミテ本草ヲ読ミ、物理ノ学ニ志アリテ尚」⁷²という記述からは、益軒が本草と「物理ノ学」を結びつけていることが分かる。加えて自序の終わりには『大和本草』を「物理ノ学ノ万一ノ小補有ル」⁷³と記述されている。この「物理」とは現代の物理学とは異なる中国由来の言葉であり学問である。それは「物の理」を追究する学問であり、朱子学によって作り上げられていった理論でもある。

朱子学では宇宙の万物の根源は一つであるとし、天地に存在する一切のものは自然と動物の区別なく共通の法則に貫かれているとしている。また人間の道徳的規範である「道理」と自然法則である「物理」も本質を共有しあっているとする。つまり朱子学の教えの中では「物理」とは自然法則である一方で、その本質は人間の道徳的な規範ともなる。また『朱子語録』では「一草一木一昆虫ノ微ニ至ルマデ、各亦理有リ」と、どれだけ微小な存在からでも宇宙の根幹をなす法則、すなわち「理」を引き出すことができると語られている。儒者である益軒は宇宙内における万物の理を窮めるために本草学に関わり、「物理ノ学」を補う学問として本草学を位置づけようとしている。

7475

また『大和本草』の執筆は「姑ク見聞ノ及ブ所ニ随ヒテ其ノ端末ヲ記」⁷⁶したものであるとする。益軒は実際の見聞に基づいた知によって『大和本草』を編集しようとしていることが分かる。道や人倫のような観念や概念、また古典の中に記された思弁ではなく、天地の万物と実際に対峙し経験することによってモノの性質を掴み、理を解明するための手段を益軒は本草学に求めている。⁷⁷ 圧倒的な現実と何よりも具体的

なモノこそ益軒の「理」への糸口としたものであった。

しかし理の追究という儒学の目的でのみ益軒は本草学を利用しようとはしていない。自序には「本草之学ハ以テ民生日用ト切ナリトナス」⁷⁸ともある。前節で見たとおり、本草学を取り巻く時代は農書や能毒書、そして食物本草などのように実用を追究する学問が求めるものであった。そして益軒自身も学問とは常に「日用彝倫ノ平実切近ナル者」⁷⁹⁸⁰であると考えており、本草学も日常生活に役立つ実学としても展開させる必要があった。『大和本草』はこれまでの時代によって養われてきた目的意識と、知識の追究の中で立ち上がってきた問題提起の集合の上に成立しているといえよう。

自序からは、『大和本草』は天地に存在する万物から宇宙を一貫して貫く理を求める「物理ノ学」の助けとなることを目指しながら「民生日用」の書籍にもなるという、壮大かつ思弁的な世界観ときわめて日常的な実用性を追究する現実感が融合した目的意識の上に成立させられようとしていることが分かる。

2.2 定義された「博物ノ学」と手段の宣言

実用性を高めるという目的を果たすならば薬物の学として本草学を定義し、その知を構築していくことが最も効率的であると思われる。しかし益軒はその手段は用いなかった。薬効については卷之二の「薬用論」でまとめて触れられており、個々のモノの解説では殆ど省略されている。『大和本草』に収載されたモノの選択の基準は薬物であることはなく、中心となる論点も薬効ではない。『大和本草』では本草学は「物理ノ学」や「博学」「博物ノ学」と称されており、益軒の目指す本草学は薬学へは至らない。

『大和本草』では「薬用論」にさきかげて「本草ノ書」に関する論と「物理」に関する論が記載されている。「本草ノ書ヲ論ス」では『神農本草経』から始まる本草学書とその知の歴史の概略が解説されている。この「本草ノ書ヲ論ス」で注目すべきなのは「本草綱目ニ品類ヲ分ツニ疑フベキコト多シ」と『本草綱目』の分類法に異議を唱えていることである。その為、『大和本草』は『本草綱目』とは異なる独自の分類法によって構成されている。この分類法は後に詳しく論じるが、益軒はモノとその知を『本草綱目』が作り上げた体系の上で理解しようとはしていない。同時に『大和本草』は古典の知に盲従することのない独自の見解に基づいて構成され、執筆されようとしていることが分かる。

また「本草ノ書ヲ論ス」では「博物」や「博物ノ学」という言葉が登場する。これ

は益軒が好んで使用した言葉であり、益軒自身の儒者としてのアイデンティティを代替する単語ともなっていたとされる。⁸¹しかし本稿は益軒自身の学問観や人間像を探るものではない。『大和本草』の目的と手段を考察するものである。

『大和本草』の「本草ノ書ヲ論ズル」では「凡博物之学非有広覧強記之識以通洽干古今審問精思之勞以考驗衆物則不能究其品物其性理考其是非正其註誤分其真偽弁其異同而極広博致精密」⁸²とされている。つまり『大和本草』において「博物之学」とはまず「広覧強記ノ識」でもって古今に通じることであるとされている。そして何事にも疑問を抱え、思考を重ね続けたうえで「衆物」について実験し考察しなければならないと説く。そしてその衆物らの「性理」を窮め、「是非」を考え、正誤を正し、真偽や異同を分別し弁ずることこそ「精密」に到り、「広博」を極めることだとしている。

83

益軒が語る「博物ノ学」とは、緻密な観察と精密な検分によって「衆物」即ちありとあらゆる事物の理を窮めることで広い学識を獲得するものである。この学問には古今に渡る知識を蒐集するだけでなく、事物に対する鋭い洞察力と観察力に支えられた思考力と判断力が要求されている。また学識を広く究めるための手段として求められているのは、モノの性質と道理を理解することのほかに、モノの是非と正誤、そして真偽や異同の区別をつけることである。

『大和本草』は『本草綱目』を筆頭に、多くの古典を本論に入る前の段階でもって批判している。そのうえで「博物ノ学」という言葉を設定し、その目的と方法を定義している。これによって『大和本草』は、古典や薬物というカテゴリに拘ることなくモノを蒐集し、理を追究するための知を自由な手段で記述することが可能となる。

益軒にとって「博学」とは、理の為とはいえ儒学のような哲理の学問に比べれば通俗的ともいえる本草学を追究することに対して、自らの儒者としてのアイデンティティを保つ為に使用している言葉であったかもしれない。しかし古典を批判し、「博物ノ学」という概念と定義を明確にした『大和本草』は、本論に入る前に設けられた総論の段階で、本草学に新たな価値観と可能性がもたらされることを予感させるものである。「博学」とは一つの新しい学問領域を拓こうとする益軒自身の意気込みともなっている。その具体的な内容は後章で考察する。

「本草ノ書ヲ論ス」は『大和本草』の目的に対して選択された手段が宣言されている。それは「博物ノ学」という概念に基づいている。古典への盲信ではなく知識の裾

野を広げる為に古今の知は学ばれている。そして『大和本草』の本論の記述は、そのような広大な知に支えられたうえで行われた精密な実験による審議の結果であることが予想される。

2.3 物理の究明と拡大された思考の表明

モノの蒐集と解説によって宇宙を記述する為に本草学に関わろうとし、「物理ノ学」を助ける為の学問という立場を本草学に与えようとしている益軒は、『大和本草』の本論に先立って「物理ヲ論ス」という一節を改めて設けている。

この一節は「開闢ノ初ハ未人類アラズ、人生之初ハ形化無シ、氣化自生ズ、万物皆然リ氣化トハ天地ノ氣交テ自然ニ人物ヲ生スルヲ云」⁸⁴と人類と万物の発生という壮大な内容から始まる。人間を含めた万物の根源から『大和本草』の目的の一つでもある「物理」は展開されるのである。そしてこの気の理論を基盤としながら、生物は各々の発生条件から「四生」に分類されるに至る。人や獣のような腸から生まれる「胎生」、鳥類に代表される「卵生」、そして水気から生まれるとされた蚯蚓や魚は「湿生」とされ、子子（ぼうふら）などを気による自然発生を続ける「化生」とされている。

そして益軒は、目の違いによって四生を区別した葉世傑草木子の説を引用しながら、胎生は卵生よりも貴く、卵生は湿生よりも貴く、湿生は化生よりも貴いと、四生の階層を定義する。子子の自然発生など非科学的なところはあるが、益軒は発生の観点から動物を分類し体系づけていこうとしている。

そしてこの分類と体系は人間や子子のような動物だけではなく植物にも広げられる。挟して活くものは胎生、実を蒔くことで生じるものは卵生、荷芡（蓮など）は湿生、そして菌は化生に各々相当するとする。益軒は動物に対応させながら植物を分類し、その並行関係の中で植物界の秩序は理解される。そして動物との対応関係でもって植物を定義したうえで植物が皮を割けば枯れるのに対し、動物は内側を破れば死ぬとする。その理由は植物は外に「気」を持ち、動物は内側に「神」を宿しているからである。また動物の体が温かいのは天から呼吸気を与えられているからであり、植物が冷たいのは地から津を与えられているからだとする。

益軒はまず動物界と植物界の秩序の相同性を類似の枠組みの中で並行させて理解しようとしている。そのうえで動物と植物の相違点を理由と共に考察するに至る。大綱の中に類似と相違を見出し、各存在がその存在たりうる理由を見出している。その思

考は動物や植物、ひいてはそれらを含んだ天地といった全体への把握によって支えられている。「本草ノ書ヲ論ス」では「精思」や「精密」という言葉で緻密な思考と観察による知の達成を語る益軒だったが、それは決して部分に囚われることを要求するものではなかった。

そして儒家らしく陰陽の理によって四季や植物の変化を論じる。それは季節や生育条件による植物の変化と個性のほかに、動物の変態にまで及ぶ。しかしそれだけではなく「鳥ハ雄大ニ羽美ニタケシ只鷹ハ雄小ニ雌大ナリ獸ハ牝ハ牡ヨリタケシ人ノ男ハ剛ニ女ハ柔ナルニ異レリ」⁸⁵と鳥を基点とすることで獣や人間の個性を考察するに至る。益軒は対象を常に他のモノとの比較の中で考察し、対象を対象たらしめる理を見出している。思考は基点となる鳥から鷹との相違点へと及び、それは鳥類とは別の枠に分類されている筈の獣類との類似点をも見出す。そして人間との違いを明らかにするに到った。

また「蔓草ハ皆左旋ス天ノ左旋ニ順フ」⁸⁶と蔓草の巻き方と天道は常に左回りであることに益軒は気が付く。同時に茶臼が旋回する方向も左であることを見出す。蔓草の巻き方のような植物の現象のみならず茶臼のような器物の作りの中にも天の運行と同じ理を見出している。益軒の目的は多様なモデルの間に一貫する規則を見出し、その性質を形成する共通の仕組みを定義させることである。

前節で述べたとおり益軒は儒者としての立場から天地を一貫して貫く理を求めるために本草学に関わろうとしている。『大和本草』の知は、モノの内部にある天地の理を追究する視線によって成立したことがここからも分かる。

しかし植物や器物の中に天を見出し、天と植物の関係の中でのみ理を論じるわけではない。「橘柑金橘ハ寒畏ル……（中略）……京都モ寒土ナレハ橘柑マレナリ……（中略）……朝鮮ハ寒国ナル故橘柑ノ類及茶ナシト云」⁸⁷と金柑の生育条件を基点にすることで京都や朝鮮など各々の地域の気候を論じることに繋げていく。そして「北土奥州羽州ニハ畿内近江美濃ヨリ茶ヲ越前ノ敦賀ニツカハシ舟ニノセテ右ノ諸州ニ売ル」⁸⁸と北土である東北地方には、畿内や近江、美濃から茶が越前の敦賀に送られ、そこから改めて東北地方に舟で売られるという人間の生活の繋がりまで記述されている。

『大和本草』は人間を、嘗て気から生まれ、獣類と同じ胎生に分類された「人類」としてのみ解説し、追究しようとはしていない。『大和本草』はモノの流通から見えてくる当代を生きる人間の暮らしまで活写しようとしている。理の追究の他にも「民生

日用」という目的も掲げていた益軒が、人間の生活も本草学にとって必要な論点だと考えていたことがここからも分かる。

そして「今世民俗ノ時好ニヨツテ草木花容容態百出是皆人ノ愛賞スル処、人力ニヨツテ造化ノカヲ借ラザルナリ」⁸⁹とある。人間の生活の好みによって草木や花の容、変態などが百出しており、これらを愛賞するいわゆる好事家たちが当時は多かったことが分かる。そして益軒は、この草木や花の変容は人の力によるもので造化の力を借りたものではないとする。「理」や「性」を追究することを第一の目的とし、是非弁別を精詳に論じることを要求してきた益軒だったが、その一方で好事家たちの生活や心の機微がモノに与える影響にも注目している。益軒の思考は人間の心にまで及んでいくことが分かる。

以上のことから益軒には動物や植物の機序から天の運行まで見出そうとする天地全体を覆う壮大な視界と同時に、人間の心の機微にまで切り込む極小の視点がある。まず四生によって動物や植物を分類した益軒だったが、それは思考の制限を意味するものではない。

分類とはモノを整頓し体系づけることであるが、それは同時にその分類の枠の中におさめるべきモノの一般性を定義する為の指標となる。分類の枠とは羽の美しさや雌雄の違いを目盛とした一種のはかりとなっている。そのはかりの目盛同士の差によって分類の枠の中におさめられているモノがそのモノたりうる理由を読み解くことこそ、『大和本草』の記述を支える思考である。

『本草綱目』の分類法を否定し、新しい分類法によって成立している『大和本草』であるが、その本論内で行われている論究は、提示された分類の枠の外側へもいたる思考の拡大と、一つの枠の秩序から複数の別の枠の理を明らかにするという連続する知の追究によって成立しているものであることが予想できる。その知とは人間の心の機微にもいたる「複雑な」ものである。

『大和本草』は壮大な視点と体系づけられた枠組みによって「理」を追究する一方で、造化の力を借りることなく新たなモノを生み出す「人間の心」へと切り込む視点と思考の上にも成立しようとしている。

次節からは『大和本草』の本論へと踏み込むことにより、益軒が如何に知を体系づけているのかを考察することで、本草学の「複雑さ」の構造を具体的に解明していく。

3. 『大和本草』が目指した本草学

3.1 『大和本草』の手段

『大和本草』は天地を貫く一貫した理をモノから解明するという目的と同時に、人間の生活に役立つ実用書として成立させることを目標としながら執筆が進められたことが総論からは予測できた。本章ではそのような目的意識が『大和本草』の中で如何に展開されているのかを具体的な内容から考察する。それは『大和本草』の知の構造を解明するものでもあり、日本本草学を発展させるに至った要因の一端を解明するものともなる。その為に、まず『大和本草』はどのようにモノを見究めようとしたのかを明らかにし、知の体系の大枠を把握するところから始めたい。

益軒自身は「分類」という考えについて『大和本草』の自序に以下のように記述している。

『本草綱目』ニ品物ヲ分カツニ疑ウ可キこと多シ。菊・艾・茵陳・青蒿・黄花蒿ハ皆香気アレドモ芳草類ニ載セズシテ隰草ニノス。然レドモ此ノ草高燥ノ地ニ宜シ。殊ニ菊及ビ地黄ハ甚ダ隰土ヲ忌ム。隰草ト称スベカラズ。惡実・欵冬・地膚・蓼・茗荷ハ今世ノ俗皆ナ佳蔬ト為ス。良賤ノ賞スル所也。然ルニ菜類ニ之レヲ載セズ。葢菜・落葵・苦瓜ハ菜ト為ス可カラズ。然レドモ菜類ト為ス。蘆ハ水草也。涇草ノ類ニノス。連翹ハ蔓草ナリ、隰地ニ生セズ。然ルニ隰草ニノス。胡椒ハ蔓草ナリ。然ルニ諸モロノ木実ト同ジク味果類ニノス。故ニ人誤リ認メテ木実トス。常山ト莽草ハ木ナリ、草品ニ非ズ。之レヲ毒草ニ載ス。石龍芮・牛扁ハ本草ニ曰ク、毒無シ、ト。然ルニ毒草類ニ之ヲ載ス。羊蹄水草ニ非ズ。虎耳草・酸漿草・之レヲ植エテ石ニ伴ハ令ムレバ則チ可也。然レドモ石草ニ非ズ。水芹ハ芳香有リ。水草也、辛辣ノ物ニ非ズ。然ルニ葷辛菜トス。馬勃ハ芝栢ノ類ナリ。然ルニ苔類ニ載セタリ。水草類ニ海藻・海蘊・海带・昆布。石帆・水松等ノ海物ヲ載セタリ。淡水ニ生ズル草ト雜エ記ス。河海・淡鹹ノ別ナシ。苔類ニ、陟釐・乾苔ノ海物ヲ卷柏・玉柏・屋遊等山陸ノ産物ト雜エ記ス。水菜類ニ載スル所ハ皆ナ海藻ナリ。水草類ノ内、海藻以下数品ト同類ナリ。然ラバ則チ海草門一類ニシテノスベキニ然ラズ、海草門ナシ。是レ亦タ魚品ニ河・海ヲワカタザルガ如シ。『山海經』『爾雅』等ノ書、皆ナ竹ヲ以ッテ草ト為シ、又タ竹ヲ木ニ非ズ草ニ非ズトシ、別ニ一類ト為ル説アリ。然ルニ『綱目』ニ竹ヲ苞木類ニノセタリ。『綱目』載スル

所、魚類少クシテ且ツ略セリ。河魚ト海魚ノ別ナシ。混雜シテ弁別シ難シ。無鱗魚ノ中、海蛇、蝦、海馬ハ魚類ニ非ズ。皆ナ水虫ト為スベシ。秧雞ト鶉ハ水禽也。然ルニ原禽ト為ス。鶉ハ水禽ト為スベシ、山禽ニ非ズ。然ルニ山禽類ニ載セタリ。伏翼・ムササビ・寒号虫ハ禽類ニ非ズ。伏翼・寒号虫ハ羽虫ナリ。ムササビハ鼠類ナリ。皆禽類ニ載セタリ。

以上、『本草綱目』載スル所、分類此クノ如シ。鄙意未ダ解セザル所也。然ルニ唐宋本草ニ比スレバ、『綱目』ノ分類詳ナリ。李東壁ハ是レ博治ノ士、其ノ分カツ所、品目或イハ以有リ。吾儕、孤陋寡聞、輕ガルシク古人ノ為ル所ヲ議ス。狂妄不韙ト謂ウ可キ也。然シテ此レ亦タ講学ノ一端、避クルヲ得ザル所、姑ク疑ウ所ヲ記シテ以ッテ識者ノ指南ヲ待ツノミ。(貝原、『大和本草』,序論)

分類というのは認識の枠組みを構築することであり、思考を秩序付ける役割を果たすものである。分類といえは現代では、属・種の上位分類として、その下に綱・目を設けることで成立する階層的な分類体系を想像するだろう。しかしこの分類法はカール・フォン・リンネ (Carl von Linné、1707 年 5 月 23 日・1778 年 1 月 10 日) によって提唱された手段であり、『大和本草』以降の西洋で生まれた分類法である。

益軒が「分類」という言葉を使い、注目しているのは分類の対象となる生物や植物の生息している場所(湿地帯であるか、また海なのか河なのかなど)であり、またコウモリやムササビといった獣の種である。『大和本草』は生物が生息し植物が自生する環境や、生物の活動や形態などを合わせて考える生態学的な視点により知を整理し、認識の枠組みを形成しようとしている。

実際の『大和本草』の項目を見てみると、本文は水類から始まり、火類へと続いていく。『大和本草』で解説されるものは植物や動物のように有形のモノだけではなく「現象」も含まれている。しかしこれは『本草綱目』にもある項目であり、『大和本草』の際立った特徴ではない。

『本草綱目』でモノは水部、火部、土部、金石部、草部、穀部、葉部、果部、木部、服器部、蟲部、鱗部、介部、菌部、獸部、人部に分けられている。「本草」が嘗ては薬を意味する言葉であった通り、『本草綱目』もその本文内で薬物そのものの性質や特徴、産地や加工法などを整理し、簡潔に記述している。しかし服器物などが登場する分類

法は人々の周囲にあるモノを自然物や人工物に限らず徹底的に網羅することを目的にしている。その分類はモノそのものの形状や性質を判断基準とした客観的な認識に基づく分類である。

それに対して『大和本草』は水類、火類、金玉土石、穀類、造醸類、草（菜蔬類、薬類、民用草類、花草、園草、蓴類、蔓草、芳草、水草、海草、雑草、菌類）、竹類、木（四木類、果木類、薬木類、園木、花木、雑木）、魚（河魚、海魚）、蟲（水蟲、陸蟲）、介類、鳥（水鳥、山鳥、小鳥、家禽、雑禽、異邦禽）、獸、人類という項目を設けている。魚を河や海、蟲を水と陸で小分類するなど、『大和本草』も生息地でモノ进行分类している。しかし草の中では薬草と、下綿や煙草など人間生活に有益な民用木に分類し、木は果木、園木、花木など鑑賞用に栽培されることが主なものと、桑や茶、漆など産業に貢献している四木や薬木进行分类するなど、徹底的に人を中心にした視点でモノを区別している。これは人間を中心に添えた場合にモノとの間に生じる「関係」に基づいた視点であり、リンネの分類法とは異なる。

総論で民生日用となる書物という目的が掲げられている『大和本草』であるが、その分類法も人間の「生活」を中心に添えることで生じる関係と価値によってモノを理解、知を体系づけようとするものであることが分かる。

『大和本草』は水草から海草を分離させ、また魚は河魚と海魚を区別されている。このことから「海」という環境を『大和本草』を重視していることが分かる。これは『本草綱目』には欠けていた視点である。ここからも『大和本草』はその書名の通り、日本という環境と日本人の生活に密着した知を重点的に解説される土着の本草書として成立しようとしていることが分かる。『大和本草』の分類法の大枠は実用性と利便性が追究されたものであると同時に、「日本」という環境を強く意識したものであるといえる。

しかしこれは『大和本草』の総論から推測される知の枠組みであり、目的意識である。次節からは実際に記述されたモノたちの解説を考察していくことで、『大和本草』の知の構造を解明していく。

3.2 「標識」による蒐集と集合知

『大和本草』の解説は水類から始まる。この中には水、熱湯、湯、浴湯、温泉、火井、雹、苦潮、石腦油、地溲、塩胆水、塩がある。

最初の「水」⁹⁰は無根水の指摘から始まる。無根水とは『本草綱目』では「指所謂天上初降下不沾地的雨水」と解説されており、天から降ってきた雨水が地に落ちる前に受けたもののことを指す。『大和本草』ではこの無根水の無根の定義を名だたる中国古典の論を各々引用した後に、それらの定義が互いに異なっていることを指摘する。

次に「労水一名甘爛水」⁹¹と、労水の別名は甘爛水であると『大和本草』は記述する。そして労水とは「流水ヲ大盆ノ中ニヲキテ杓ヲ以高クアクルコト千萬遍スルヲ云。甘温ニシテ性柔ナリ」⁹²と、流水を大盆の中において、杓を何度も高くあげることによって完成するものであるという解説が続く。

次は臘雪水であり、「臘雪水五穀ノ種ヲヒタセバ虫食クハズ早ニイタマズ諸ノ果食ヲヒタセバ虫食ハズ目ノ赤ヲ洗フベシ又茶ヲニルニ宜シ夏月生魚ヲヒタセバ鹽ヲ加エズシテモ味變スルコトヲソシ」⁹³と記述される。雪から採れた水は五穀の虫食いや痛みを防ぐ効果があり、夏には生魚を浸すことで塩を加えることなく味の変質を防ぐことがあるという解説だ。この臘雪水とは雪解け水のことである。『本草綱目』に「冬至後第三戌為臘」とあるように、特に冬至の3日後に降った雪が溶けた水を差す。

『大和本草』は流水から「労水」という異なる価値を持った水への変化の条件を、杓を何度も高く上げるなど具体的な操作の内容と共に記述する。また臘雪水は、五穀を良質な状態で保存でき、夏場に塩を必要とすることなく生魚の味を保たせる効果があると解説する。

この内容は労水や臘雪水の定義を記述したものではない。生魚の味を持たせる方法などから分かる通り人間生活に対する実用性を追究した結果といえる解説である。実用性の追究は利用手段と結果がもたらす利潤のみならず「大寒ノ節中ニ放置ベシ口ノセバキ甕器ニ入口ヲヨクフサキテ氣ノモレザルヲヨシトス又樽ナル如桶ニ入モヨシ」⁹⁴と、大寒の季節は口の狭い甕に入れ、入り口を塞げというような保存方法にまで及んでいる。人間生活を主体にした知によって「臘雪水」は解説され、価値づけられている。

『大和本草』の解説とは、無根水や労水、臘雪水の各々の定義を記述するものではない。『大和本草』の知の焦点は「如何に各々の水を発生させ、利用するか」という手段と価値へと向けられている。

しかし明確な定義が記述されていないだけで、同じ水の化学的性質を持っているモノを状態や発生条件などによって、『大和本草』は「無根水」や「労水」、そして「臘

雪水」を区別している。これは『大和本草』だけではなく『本草綱目』にもある視点である。

『大和本草』では人間への有益性だけでモノの意味を判断し、実用性という基準でのみ価値づけることはない。仲秋に水が枯れる原因を、陳澧の説である「水ハ本気ノ為所、春夏氣至故長ス秋冬返ル故涸ル也」と⁹⁵引用したのちに、この「気」の理論ゆえに冬に水が枯れて井戸（水）が少ないのだと『大和本草』独自の見解が提示される。ついで「河水十月ヨリ甚スクナク二三月地上ニ常ノ如ク多ク流ルル川アリ是亦冬月水カカル故ナリ」と河川の水が十月から少なく、2、3月から水量が多くなるのは地上の常であるとする。

『大和本草』では季節が水に対して起こす影響を、河川の水量の増減という現象から論じる。季節の運行による水の変化のうちに「理」を見出そうとしている。その理は河川の水のみならず井戸の水へも適用される理である可能性を『大和本草』は古典の記述と実際の現象から思い至り、その先を更に考察する。

河川の水に対しては「河水ニ泡アリ處ニヨリテ泡ニフルレバ漆瘡ノ如ナル」と記述する。河川に発生した泡に触れれば湿疹を起こすこともあるというのだ。また「時雨降ルニ多器ヲ廣庭ノ中ニ置得所甘滑名ベカラズ。以テ茶ヲ潑シ薬ヲ煮ル皆美。而盆有庭ニ器ヲフキテ雨水ヲトリテ茶ヲ煮薬ヲ煎ス水ノ証ヨク味ヨシ天ヨリ下ル水ナレバナリ。臘雪尤ヨシ」⁹⁶と、時雨が降った時には庭に器を置き、そこに溜まった水によって煮られた茶や煎じられた薬は味がとても良いとしている。その理由は「天ヨリ下ル水」だからである。そして最も優れた味を提供してくれるものは臘雪であると『大和本草』は結論づけている。

『大和本草』で記述されているのは薬効や毒性のみならず、食品の保存など日常生活を更に快適にする知である。且つ川の水の増減という季節が水に与える影響と、触れれば湿疹を起こす水の泡など人体への被害である。『大和本草』は天とモノ、そして人の間に起こる関係を連続的に考察していることが分かる。『大和本草』は民生日用を目的としながら、物理を追究する書籍であると総論では宣言されていた。「水」はその方針に則って解説されている。

しかし解説される「水」とは単一の存在ではない。季節や環境などの複数の要因によって無根水や河沼水、そして時雨に区別されているが、そこから「水」の統一的な性質を見出そうとはしていない。本草学の知とは、地に落ちる前の雨水や、雪解け水

を「水」という主体に一元化させるものではない。無根水や時雨など個々の水は互いに並置されることによって、他対象との差異や類似点の中に自らを位置づけ、自身の個性を定義するに至る。しかしそれは「水」という定義とその枠組みに個々の対象が従属するという意味ではない。

本草学において水とは、化学的には同じ性質を持ちながらも、季節や時期によって状態を変える複数の状態の集合を指すものである。天の運行や人間の生活への影響によって各対象の個別性は保証されると同時に、「水」という集合知が外部との関係の中で形成されていくのである。

「水類」に蒐集されている対象は水以外に熱湯、湯、浴湯、温泉、火井、雹、苦潮、石腦油、地洩、塩胆水、塩がある。『大和本草』は、熱湯⁹⁷は『本草一名』や『本草綱目』に解説されている麻沸湯や百沸湯、生熟湯、陰陽水のことを指すとしている。「本草一名、麻沸湯又曰、太和湯、百沸湯宗爽陽氣助經路ヲ行ケル汪穎カ云熱湯百沸ヲ須ユル者佳シ……（中略）……感冒初テ發リ藥ナキニ熱湯ヲ一椀ノミ手ニテ腹ヲナデ腹心ヨクバ再ノミ再ナヅ」と古典の引用によって熱湯の有効性を論じる。そして「本草ニ生熟湯又・陰陽水ト云、新汲水ト百沸湯ト等分ニ一盞ニ合セテ和シ勻タルヲ云」とする。

『大和本草』は『本草一名』で解説された陽気を助けるとされる百沸湯の知を受け継ぎながら、新汲水と百沸湯を等分に合わせることで作られる生熟湯や陰陽水などの新たな熱湯の種類を『本草綱目』の知を引用して解説する。本草学が求める知とは百科事典のように対象の意味を定義づけるものではない。『本草綱目』で新汲水と百沸湯から陰陽水を作り出したように、蒐集された知を交配させることで新たな知を生み出すことを本草学は求めている。

そして生熟湯と陰陽水の製造方法のみならず「毒惡之物ヲ食ヒ宿食トナリ腹ハリテ霍乱トナラントスルニ塩ヲ加ヘテ多クノミ痰ト食トヲ吐盡シテ愈又・霍乱・嘔吐・食ト藥トヲ納ズ危症ニ陰陽水ヲ数口ノムベシ」と陰陽水の有効な利用方法にまで至る。熱湯の解説は『大和本草』の独自の見解ではなく古典の知の引用のみで成立している。その為、『大和本草』に解説される「熱湯」は歴史に集積された先人の知の集合であるといえる。

浴湯⁹⁸の項目で「我手テ自試テヨキカゲンノ湯ニ浴スヘシ」とあるように『大和本草』は益軒の実地検分に基づく知も多く記述されており、実見と実証を益軒が重視し

ていたことは明らかである。しかし『大和本草』の知とは益軒一人による私見の知だけで構成されていない。『大和本草』とはそれまでの時代に集積された見解の中から選択された知の集合体であるといえる。

その過去の知とは『本草綱目』や『本草一名』のような本草学書だけではない。白磐⁹⁹では「続日本紀文武天皇二年六月近江国白磐石献ス。又元明天皇和銅六年相模讃岐白磐石を献ス。美濃ヨリ青磐石出雲ヨリ黄磐石ヲ献ス。延喜式飛驒国白磐石ヲ貢其後日本ニアルコトヲシラサリシヤ」とあり、大麻では「日本紀舊事紀ニ麻ヲウヘシコトアリ日本ニ上代ヨリ之有」¹⁰⁰とある。『続日本紀』や『延喜式』『日本紀舊事紀』などの日本の歴史書にも及んでいる。

『大和本草』では過去の知と現代の自身の経験によって蒐集した知を集合させることによってこれまでのモノに対する知を更に詳細にし、増やそうとしている。しかしモノという対象についての知を更に増やし、集合させる為だけに古典の知を使い、季節という視点を用いているのではない。本草学の古典や歴史書から得た知は「日本ニアル事ヲシラサリシヤ」¹⁰¹のように日本の歴史を改めて振り返るものともなっている。

『大和本草』では解説の対象となるモノが季節や時間から与えられる影響とその変化のみならず、日本へのまなざしをも提供する。それはモノから与えられる影響である。

最後に菜蔬類にある葱¹⁰²についての解説から蒐集と集合の知を考察する。『大和本草』によれば日本には「大葱ワケギ、カリギ、アサツキ、ナリ」の四種があるとする。そして「此中大小冬夏之異アリ」と季節によって大きさが異なることをまず指摘する。

特に大葱は「五月ニ實ヲ負ウヘ八九月苗ヲ分栽フ冬春サカンナリ」と5月に実を植え、8、9月に苗を分ち、冬と春に収穫できるものであるとする。そのうえ「肥地ニフカクウヘテ漸ニ培ヘハ白根長大其味ヨシ是葱中ノ佳品ナリ」と同じ葱でも肥えた地に深く植えて栽培したものは白根が長く、大変味が良いものだと解説する。同じ大葱であっても栽培方法が変われば質が異なるものが出てくる。また「二月以後茎葉老テ枯ル然トモ茎ヲ刈リトレハ新葉常ニアリ」と、二月以降に茎や葉が枯れても茎を刈り取ればよいとする。『大和本草』では具体的な季節と時期を常に明確にしながら、大葱の変化を人為的な操作も含めて解説している。

一方で小葱¹⁰³とは二種あり、「根トモニ分テ取アリワケギト云是冬葱ナリ」とする。このワケギであり冬葱であるものは夏葱より味が勝るそうだ。そして「三月以後老テ

食ニ堪ズ。本草ニ凍葱夏枯ルト云是也」と、3月以降の葱で食べるにたえないものが『本草綱目』でいうところの「凍葱が夏に枯れたもの」であると記述する。3月を境に同じワケギであっても全く性質の異なるものとなり、「凍葱が夏に枯れたもの」という新たな状態のものへと変質することを『大和本草』は解説する。

そしてもう一つの小葱であるカリキは夏月に食べるものであり、『本草綱目』では「漢葱冬枯」とするものこそ夏月のカリキであるとする。またこのカリキは「五月葱」といい、「六月以後」は食に堪えないものであると解説する。小葱もワケギとカリキに区別されたのちに、各々季節によって変質した状態に新たな名称が改めて設定されている。そしてアサツキとは「葱中ノ最細ナル者」である。葉や根の形、そして味もワケギやカリキとは変わらず、太さだけが異なるものである。

『大和本草』で解説される葱とは、外見的な特徴と季節に伴って変質し、その品質に伴って名称も変えていく複数の「葱」の総体でもある。そしてその解説は「葱」の内的構成を書き出すには留まらない。葱という対象の中に潜む複数の「葱」（それは大葱であったりワケギであったりする）が各々如何なる条件によって出現するのかという、諸条件の記述でもある。大葱は「葱」ではあるが、カリキやアサツキではなく、またカリキは「葱」でありながらアサツキにはなりえない。そしてその大葱やカリキであっても、季節によって変質すれば異なる名称を与えられる。各々の葱の個別性を保証するものは外見的な特徴であり、味であり、そうした結果を引き起こすのは土の状態や季節という環境からの影響であることを『大和本草』は記述する。

『大和本草』が行うのは「影響」と「結果」の記述である。そして「水」や「葱」、「熱湯」といった項目を説明するものである全体の解説は、それらの枠組みを定義するものではない。「水」や「葱」が季節や時間などの諸規則の中で起こす変化を究明するものである。『大和本草』の記述は変化の記述であり、同時に季節などの気候の条件が対象に与える影響という現象を切り出すものともなっている。そして『大和本草』が解説する知とはモノの外的特徴のみならず、季節の巡りや土の性質などの天地との関係によって生じる影響にまでいたる集合知である。

『大和本草』では臘雪水や池沼水、大葱やワケギといった諸対象を「水」や「葱」といった総体の基底に関係づけて定めるのではない。そもそもそのような基底が『大和本草』にはなく、また「水」や「葱」といった総体を規定する基準を明確にする為に諸対象の変化を記述しているのでもない。『大和本草』はあらゆる諸条件（それは味

や形のような内的な要因であると同時に、季節であり、肥沃な大地であり、そして時間といった外的要因でもある）を標識にしながら対象を精査する。その時、対象の個別性を説明し、設定する標識は一つだけではない。たとえばカリキは小葱という形状で語られるものでもあれば、夏月に食べられるという時期でも説明ができるものでもあり、また『本草綱目』による「漢葱冬枯」という知で説明できるものでもある。

この多くの「標識」（これは対象を吟味する際の手段であり、認識の視点を示す指標であり符号としての意味を持たせる。そして思考の道筋を示すものともなる）による認識と理解の集合として「カリキ」は存在する。『大和本草』では標識となりうる条件によって多くの葱の状態を、意味を、そして価値の知を蒐集しているといえる。ゆえに『大和本草』の「葱」とは多くの条件（標識）から蒐集された葱らの集合体であり、「カリキ」もまた多くのカリキの集合体であるといえる。また、カリキは6月以降は食に堪えない、などの記述は、カリキの味から夏や6月といった認識を取り出すものともなる。認識の標識となるものは形状や環境といった外的要因だけではなく、対象であるモノもまた外的要因を理解させるための標識となっている。それも「カリキ」の知の一部である。

『大和本草』は標識と対象が互いに与えあう影響を記述によって明らかにし、解説によってその関係から蒐集された知を更に集合させていく。『大和本草』は歴史や現代での経験、そして環境や季節など複数の視点を同時に駆使し、標識とすることによって、知を蒐集し、増やそうとしている。標識の中に対象は蒐集されていくのである。

そのような『大和本草』において「水類」や「水」といった見出しは認識の枠組みというような制限ではなく、その中での無根水や陰陽水は「水」や「熱湯」が分解されたものでもない。それらは対象と標識が互いに影響を及ぼしあうことで生じる蒐集と集合の関係全体を示すものであるといえる。『大和本草』は、複数の標識によって蒐集された知の見解を、各々の関係の構造と共に記述することで成立する知の集合体であるといえる。

3.3 民生日用の知

『大和本草』の知は益軒自身の経験知だけではなく古典の知識も含まれている。その知識から『大和本草』は対象の新たな可能性を見出し、知を増やそうとしている。しかしその知は方向なく拡散され、増殖していくものではない。『大和本草』には民生

日用の為の知を編集しようとする意図があることが総論で明示されている。

温泉¹⁰⁴の項目では「気血不順・食気滯塞凡・虚寒ノ症ハ汗出ザルヤウニカロク浴スレハ害ナシ」など有効な入浴方法や、反対に入浴しない方がよい症状などについて解説する。「湯浴ノ間酒ヲ多クノムヘカラス」など温泉の利用するにあたっての注意点まで解説されており、温泉がいかに温泉たりうるかという解説はない。ここだけを読むと健康への意識をうながす養生書のような印象を受ける項目である。そして解説は「帰ラントスル日風雨アラバ静養シテ風雨ヤミテ帰ルヘシ風雨ヲシノキカヘル」と帰宅時への注意点へも及ぶ。『大和本草』の解説は人間主体である。『大和本草』の為に主に選択される知とは、人間を中心に添えたものである。それはモノの薬効を最大限に引出し、利用する手段の解説である。

そして『大和本草』には「薬」として利用する手段だけではなく、「食」に関する解説が非常に多い。総論である巻之二でも「用薬ヲ論ズ」という薬物の解説の後に「飲食ヲ節ス」という項目がある。そこでは「飲食ノ本ハ是レ人ヲ養フノ物、以テ人ヲ害スベカラズ」と飲食は人を「養う」ものであり、人を害するものではないとする。「治療」ではなく「養う」という視点で益軒は「食」を捉え、その価値観で『大和本草』の知は編集されていると考えられる。これは『庖厨備用倭名本草』や『本朝食鑑』から続く食物本草の系譜を受け継ぐものである。しかし『大和本草』が「食」を通じて提供する知識と構築する知は前時代の本草学書が目指した「養生」から更に発展する。

大豆¹⁰⁵では「凡五穀ノ内稲ニツギテ大豆最民用ノ利多シココヲ以農ノ多ク種ルこと稲ニツグリ」と稲に続けて大豆は「民用」として利点が多いことを解説する。特に「黄大豆秋熟ス豆ノ類ニテ第一民用ニ利アリ近江州ノ産最佳シ」と秋に熟する黄大豆で特に近江産のものが民用には最も良いとする。大豆の「民用」への有益性と影響度は非常に高いことを強調している。そして「黒大豆大小アリ性味最ヨシ味会ニ味ヨシ豆淋酒ノ本本草大豆ノ附方ニアリ中風及産後ニ用ヘシ性ヨシ」と黒大豆から作られる「豆淋酒」は中風や産後によく効くとする。これは薬効を期待するものであり、「薬物」としての大豆の利用方法である。しかしその次には大豆よりも大きく味は栗に良く似た「栗豆」は「醤油ニテ煮テ果トシ村人味醬トシ食ス味美シ」と醤油で煮ることで非常に美味しい食べ物になるということを「村人」の経験から明らかであると解説する。これは薬効と同時に、食を更に豊かにするための手段の解説であり、楽しみの追求でもあるといえる。

そして小麦¹⁰⁶では「農夫ハコレヲ麵トシテ餅トス尤ヨク飢ヲ助ケカヲ益ス故ニ農家殊ニ美穀トシ多ク作ル」とある。飢えをしのぎ、力を蓄えるための手段として小麦から餅への加工があることを解説する。そして「膿血ノ衣服ヲ汚シタルニ小麦稗ノ灰汁ヲ冷シ洗フヘシヨクヨツル温熱ナルハアシシ又婦人ノ服ノエリアカヲトスヘシ」とあり、飢饉や救荒の観点のみならず、衣服を洗濯するものとしても小麦は利用できることを明らかにし、その手段を解説する。

『大和本草』の「食」とは病身を治療するものでありながら楽しむものでもある。かつ飢餓をしのぐ力を蓄える手段であり、また飢饉を乗り越えるために前もって行う準備の手段でもある。そして「民用」の知とは「食」に関することだけではない。『大和本草』の目指す民用とは洗濯などの日常生活全般へと拡大されるものである。そしてモノは活用される為に加工され、その手段まで解説される。

『大和本草』ではモノは食され、加工されていくものである。粳飯¹⁰⁷では「稻飯ヲ炊ク三法有」としたのちに、「白米ヲ能洗テイカキニアゲ置薪多クタキ釜ニ熱湯ヲワカシテ米ヲ入フタヲシテ一沸シテ薪ヲ減シ火ヲヤワラカニタキ能熟シタル時フタヲ開ク」と薪の増減に伴う火の加減など詳細に記述しながら飯を炊く方法を解説する。そして「朝ノ飯ハ白米ヲ前夜ヨリ水ニヒタシ置テ明朝釜ニ水多ク入テ火ヲタキ沸トキ」に米を入れるとし、「晩ノ飯ハ朝飯過ヨリ米ヲ水ニヒタシ置ヘシ」とある。同じ粳米であっても朝と晩に分けている。ここでも第3章第2節で論じたように対象は時刻といった外的要因によって細分化され、そして改めてそれらを有効に利用させる手段が解説されている。そして「二度飯亦二法アリ一法ハタキホシノ冷飯ヲ用ユ先鍋ニ湯ヲワカシタギル時ニ飯ヲ入ヤカテ飯ヲ鍋ニ置ナカラ其湯ヲナヘノロヨリ悉クシタミ去テフタヲ掩ヒ薪ヲ去火ヲ少モヤシヤカテ熟ス或炭火ニテ熟ス此法飯ヨク熟シヤハラカニシテネバラスイクタビニテモシソンセズ」と冷飯を温かい飯にする手段も解説される。飯を保存しておき時間を置いた後に食べる場合、どのような方法をとればもっとも効率がよく、良質なものが食べられるかを『大和本草』は解説する。『大和本草』の記述する知とは「質」の向上と獲得を目指すものである。

そして陳倉米¹⁰⁸では「粳及秬ヲ用テ水ニ浸シ蒸晒之ヲ為トイヘリ臘月ノ水ニ一夜浸シ蒸テ飯ト為陰乾ニシ器中ニ納置テ年ヲ経タルヲ用ユ」とある。モノの製法と保存方法にまで解説はいたる。『大和本草』の民生日用の解説とは人間の「食」生活を、更に具体的な手段と技術の知を記述するものである。そしてそれは季節のみならず利用

する水の種類、火の強さにも左右されるものである。季節と環境、そして手段の相違によって一つのモノが別のモノへと形を変え、名を変え、そして質を向上させていく。

『大和本草』への「食」の知とは薬効を期待する治療行為だけではなく保存食や非常食の知識にもいたるものである。それは病を癒し、健康を増進するといった薬物への概念に基づく知のみを選択し「食」とするのではなく、純粋な「食」への視線をもってモノの知を編集しようとしている。

その知とは季節や水の性質がモノに与える影響まで見出すものとなる。モノとは独立した個体として存在するのではなく、常に外界との関係の中で成立している。そして『大和本草』はそれを如何に効率的に利用するかを考え続け、求め続けている。

その求める知は古典や村人の生活の中から蒐集され、編集されていく。『大和本草』が求める知とは生活の中で経験によって培われた技術の知であり、環境の中でモノを更に良質なものとする工夫の知であるといえる。『大和本草』には火の強さや必要な器の種類、そして行動すべき時期などが具体的に記述されている。また文体は漢文ではなく仮名を交えた平易な文体であり、『大和本草』は読み手が解説される知を即座に実行することができるように配慮されている。

『大和本草』が求めた民生日用とは環境の中で生きるための「知恵」のことである。それは生命にかかわる緊急時の救命を目指す知であると同時に、病気や飢饉に備える予防の知でもある。そして予防のみならず食の味を楽しみ、また快適な生活を享受し、その質を更に向上させるための「知恵」である。『大和本草』は蒐集した知を、実行力を伴った知恵にする手段を考察しているといえる。そしてその知恵を更に広範に普及させることを目指している。

しかし『大和本草』が持つ知の可能性は民生日用の視点に限定されるものではない。粳米の最後の解説には「国俗飯ヲ御臺ト云臺栄花物語増鏡ナト古キ草詞ニモ見エタリ貴人ノ飯ヲ臺上ニ置テ進ムル故ニ稱スト云臺トハ凡几案ノ類物ヲ置器ヲ国俗ニ臺ト稱ス」¹⁰⁹とある。『大和本草』は製法や効能などについて記述するだけではなく、粳米というモノを基点にし『栄花物語』や『増鏡』という日本の古典の時代から現在にまで続く日本の文化的な風俗を見出すにいたる。殮飯¹¹⁰でも『本草綱目』の見解を引用した後に、「日本ニテスイハント云名ハ古キコトハナリ源氏物語栄花物語ナト古ノ和文ニモミエタリ」と『源氏物語』や『栄花物語』などの古典から続く古い言葉でもって殮飯が存在していることが解説される。文学の中からも知を蒐集し、それ中国とは異な

る日本の歴史と風俗を同時に自覚し、見つけ出すものとなっている。

湯¹¹¹の解説では「中夏ノ湯ハ香味好き薬ヲ数品合せ細末ト為」とまず中国の夏の時代の知を解説している。そこで「日本ニコガシヲ服スルガ如然共中夏ノ湯ニハ、炒米ハ用イズ薬品ヲ用テ病ヲ治シ又気味ヲ假テ、雅趣ヲ助ク人ニ益アリ本邦ニモ合せ用ユベシ俗ニ、茶湯ト云ハ、茶ト湯ニ物ナリ今本邦ノ禅院ニ用ル湯ハコガシニ似タリ」とする。古代の中国では湯に薬を混ぜて服用しており、それは日本のコガシ（炒った裸麦を湯に混ぜた飲み物）に照応されている。『大和本草』は古代中国の知を日本へ置換させていく。そして湯に何かを加える知は日本の茶湯に触れるに至る。『大和本草』は湯への対応から中国と日本の文化の違いを明らかにするのみならず、日本独自の知を見出していく。そして中国とは異なる日本像が「湯」という対象から浮かび上がる。それは「湯」の記述である同時に「日本像」の提示でもある。

熱湯の解説は中国古典の記述から選択された知識の集合体であった。しかしこの湯の項目では中国の知とは異なる日本の文化から湯の記述を引き出している。『大和本草』の知とは中国由来のもののみならず、日本の「雅趣ヲ助ク人」¹¹²の文化からも蒐集されたものであった。

また温泉の項目では「諸州ニ多シ就中摂州有馬山和州ノ十津川上州ノ伊香保相州熱湯信州ノ草津豫州道後ハ名湯ナリ多ハ、硫黄気アリ」¹¹³とする。ここでは日本の細かな地名から解説が始まる。中国古典に記述されている温泉の定義でもなければ、中国の温泉地でもなく日本の地域と環境が注目されている。温泉という論点から「硫黄気」がある日本の地域が明らかになり、温泉地の共通点も分かる。『大和本草』はその題名の通り、日本に注目する書籍でもある。それは「日本」の文化や環境をモノの解説から見出し、客観的に理解する助けともなる。

『大和本草』の中でモノは人を中心とした外的な要因との関係と影響の中で解説されていく。そして『大和本草』の目的は「民生日用」の知を編集することであった。その為、季節や風土などによって左右される環境の中でモノを如何に利用し、生活を向上させるかを追究した実用的な知識が編集され、知恵が解説されている。そしてそれは「日本」の歴史や文化、風土や環境、そして人間の生活を見出していくものともなる。「民生日用」という目的は『源氏物語』や『栄花物語』の時代から続き、『本草綱目』を受け入れた日本という国土と歴史の中にいる「日本人」の生活を向上させる知を選択し、知恵を編集した。そして中国とは異なる環境や文化を持った「日本」を

可視化する知へと続いていくのである。

3.4 浮上する日本像

第3章第1節で「日本ニアル事ヲシラサリシヤ」という記述があることを述べた。総論で『本草綱目』の分類法に疑問を投げつけ、また「中華群書之載ズ所吾邦之在所愚カ之嘗親ミ觀民俗聽スル所祢品物ノ名称形状之亦粗之記シテ以稽考ヲ助ク」¹¹⁴と中国の典籍にあたるだけではなく実物に対して行われた具体的な経験が本書の知を支えているとする『大和本草』はその書名の通り「大和（日本）」の本草の知を蒐集している。

石脳油¹¹⁵では「本草ニアリ是、越後ニアル、臭水ナルベシ」と『本草綱目』での石脳油は越後での臭水と同一の物であることから解説が始まる。中国の知は日本の知へと転換する。そして「田澤ノ中ニアリ土ヨリ出ル油ナリ、水ニマシシリ又、山油ト云甚クサシ越後ニ所々ニ多シ賤民是ヲ酌テセンジ燈油トス又信濃越前佐渡ニモアリ」と「賤民」の生活の知へと解説は広がっていく。また塩胆水¹¹⁶でも「塩初テ熟スル時槽中ニ瀝ル墨汁ナリ大毒アリ民俗コレヲシホノニガミヅト云此水ニテ豆腐ヲ製ス」と「民俗」の中でのモノの呼び名や利用方法を言及している。『大和本草』の記述からは日本の民俗の一端も知ることができるのである。

石脳油の項目に戻る。「賤民」は「筑紫ニクジラ油ヲトモシ北地ニツノジノ油ヲトモスガゴトシ其價他油ヨリ甚イヤシ」と感じて、「山油出ル所ニワラヲヒタシテコレヲトモシテ家業ヲツトム」のだと解説する。『大和本草』は「雅趣ヲ助ク人」のような文化人が生み出した知のみならず、「賤民」の生活からも知を蒐集している。『大和本草』の視線は日本の一地域の生活へも切り込んでいく。それは筑紫の「クジラ油」や北地の「ツノジノ油」の発見にも繋がり、それらが各々価値づけられている現状を知るに至る。ここに記述されるのは臭水と呼ばれ、燈油となり、クジラ油などと比較された末に採用され、利用され続けている「石脳油」の実態である。それは「ワラヲヒタシテコレヲトモ」す日本の民俗を同時に見出すものとなる。石脳油の知を知ることには日本の現状を知ることへも繋がっていく。その現状とは実際に行われている人の生活であり、生活の中で育まれてきた知恵である。

また黒土¹¹⁷の項目では「山州山科ノ東牛尾山觀音堂ノ後ニ黒キ土アリ青色ヲヲネブハク細シ筆ニ浸シテ字ヲ書ヘシ僧是ヲ用テ仏教ヲ寫ス」というように僧侶の生活にも

知の視線は向けられている。『大和本草』が求める人の生活や民の生業とは決して衣食住に代表されるような土俗的なものだけではなかった。

また石脳油は「ヲランダヨリ土ノ油ト云モノワタル是ト一物ナリ」とオランダとの貿易品への言及にも及ぶ。そして「日本紀天智天皇七年越国燃土燃熱水献」と、天智天皇の時代の熱水が「クサウツナル」ものとし、燈油であるとする。『本草綱目』の石脳油は、越後の臭水となり信濃越前佐渡などの「賤民」が用いる山油の実態を知るだけではなく、オランダからの貿易品や天智天皇の時代にまで至る知識を開拓していく。

次に番椒¹¹⁸では「古書ニ見ヘス近代ノ書ニ出タリ」とあり、「昔ハ日本ニ之無」きと記述する。番椒が日本に伝来したきっかけは「秀吉公朝鮮ヲ伐時彼国ヨリ種子ヲ取来」たことである。また南瓜¹¹⁹では「本邦ニ来ル事慶長元和中ナルヘシ西瓜ヨリ早く来ル京都ニハ延寶天和年中ニ初テ種ヲウフ其前ハ之無」とある。『大和本草』においてモノは歴史を追うきっかけをもたらしている。また『大和本草』はモノを語ると同時にモノの伝来の中に日本の歴史を重ねている。モノとは歴史を知る指標であり、そして歴史の中の日本を見出す糸口の一つともなっている。

蕃薯¹²⁰は「今案ニ此物長崎ニ多シ菓子トシテ食ス味甚甘シ寒ヲソル故他邦ノ寒土ニウフレハ消ユ暖地ニウフヘシ甚繁茂ス」と解説されている。長崎では蕃薯は菓子として利用されている現状だけではなく、日本国内の寒暖の差とそれがモノに与える影響にも注目がいく記述である。

硫黄¹²¹の解説では「温泉アル所皆硫黄アリ信州浅間嶽中立山越後妙香山肥後阿蘇山日向霧島肥前島原スヘテ山ノヤケ熱湯出ルハ皆硫黄ナリ伊豆大島ノヤケタルモ硫黄ナリト云信濃草津ニ温泉アリ」と温泉があるところには必ず硫黄があることを実際の温泉地を挙げることで指摘している。また信濃草津にある薬師寺では鐘を10年に一度鋳り直す。それは「硫黄気ニテクサル」からだとして『大和本草』は記述する。ここから鐘を腐らせる硫黄の科学的な性質のみならず硫黄のある環境ならではの特殊な事情が明らかになる。

また「旅人ノ刀身ハサビス新身ハ黒サビ出ツ湯ノ穴ニ錢置ハ湯トナル是硫黄ノ気銅鋼ヲ腐ラカスナリ倭硫黄ヲ中華ニモ好品トセリ」と錢も溶かす日本の硫黄は中国のものよりも上質だと結論付けている。旅人の刀身や湯の穴に置かれた錢の結果など、具体的な例を交えた結論は非常に説得力のあるものである。

砒石¹²²は「中夏ノ信州ヨリ出ル故信石トモ云」とまずは中国由来の知が記述される。

そして「昔ハ日本ニワタル近年唐舟ニ持来ラス」と日本の知へと記述は転換され始める。「那須野ノ殺生石ハ砒石ナル摂州有馬ノ温泉ニ近キ山中ニ毒水アリ諸鳥此水飲メハ死スト云土人之ヲ稱為之地獄ト鳥越後ノ妙香山ニ池有諸鳥其水ヲノメハ忽死ス俱ニ砒石ノ毒アルカ越後ノ熊川ノ邊ニ石アリ鼠色也蠅又ハ猫鼠ノ類砒石ノマシレル飯ヲ食ヘハ立ドコロニ死ス故ニ名ツケテ鼠コロシト云又蠅コロシモ云高野山奥ノ院ニユク道ニ玉川トテ小流アリ此水毒アリト云其水上ニ砒石アルカ弘法ノ歌ニワスレテモ汲ヤシツラン旅人ノ高野ノヲクノ玉川ノ水之水毒アルヲ知ラシメント也」と砒石は一貫してその毒性で特徴づけられ解説されている。この毒性を記述するにあたり摂州有馬温泉の近辺にあり地域の「土人」たちの証言を引用している。実際にそこで暮らしている人たちの生の声が記述には反映され、論を支える知となっている。

また解説は摂州有馬温泉や高野山の奥にある院にいく為の道にある小流など、ローカルな地域の更に細部に踏み入っていく。『大和本草』の中では日本とは異なる環境と、同一のものであっても土地が変われば呼称も変わるという複数の方言が存在する場所の集合体となっている。そこに藩といった政治的な区分はなく、また国といった人為的な区別もない。「日本」は寒暖や言葉、そしてモノの有無などの視点で際限なく蒐集されていく土地となっている。

その中で「砒石」というモノの媒介によって越後や有馬など離れた地域の共通項が明らかとなる。それはモノの存在だけではなく鳥や獣を殺す水や石に特徴的な呼び名をつける感性の一致を発見するものともなる。そして『大和本草』の知は弘法の歌にまで及ぶ。砒石からみえてくるのは日本に古くから伝承され、継承され続けてきたモノに対する警告であり、人間の感情である。

『大和本草』の記述の基盤となる知は中国古典のみならず、日本の文化や環境、そして実際にモノを利用しながらモノと共に生活を営む人々の現状であった。そしてオランダとの貿易や天智天皇の時代から繋がる歴史からも知は蒐集されている。それは日本という国の環境や歴史と同時に「日本人」の生活や姿を活写し、知るものへとともなっていた。

『大和本草』ではモノを媒介にして環境や風土、方言や歴史など複数の「日本」が出現する。『大和本草』の記述する日本とは観念ではなく、また統一体でもない。『大和本草』で立ち上がろうとする「日本」とは、現代を実際に生きていて、モノを利用し、モノを呼び、モノと共に生活してきた人々の知恵によって成立する実体を備えた

「場所」であり、モノに多くの影響を与える環境と風土を備えた「土地」であり、そして歴史と文化を備えた「国」であるといえる。

3.5 賞翫する精神と百出する花

『大和本草』は『本草綱目』に代表されるような本草学書や歴史書のみならず古来に詠まれた歌からもモノの知を吟味する。『大和本草』の知の解説とはモノの形状や生育条件に限定されるものではなく、その弁別は「理」や「性」に留まるものではない。また飢餓や病など切迫した状況に備える為の知恵だけを蒐集し編集するものではなく、土俗的な生活にのみ目を向けてはいない。『大和本草』の記述は好事家たちの活動やその精神性にも切り込んでいく。

『大和本草』巻之七の花草類の節では冒頭に「凡草花最美賞スベキ」¹²³とあり、これまでの飢餓や病などの切迫した状況に備えるべき知恵や火を灯し豆腐を作る土俗的な経験とは異なる知が解説されようとしている兆しがみえる。

牡丹¹²⁴は「中華ニテ花王ト称シ花ノ富貴ナル者トス中華ニ洛陽ノ牡丹ヲ名産トス日本ニ上代ハイマタ牡丹ナカリシニヤ万葉古今集ニハ詠セス詞花集ニ新院（崇徳院）位ニヲハシマシイトキ牡丹ヲヨマセ給ヒケルニヨミハベリケル……（中略）……中華ニモ神農本草ニ牡丹ヲノセタリ上代ヨリアレトモ只薬ニ用ユ其花ヲ賞スル事唐ヨリ以前ハマレナリ」とある。中国で名産とされる牡丹の定義と日本では崇徳院によって初めて歌に詠まれたこと、中国でも唐以前には花が賞賛されることは稀であったと、『大和本草』は牡丹の賞賛の歴史を知ろうとしている。それは薬効のような実利的な知ではない。

そして「日本ニテ古代賞翫ナキコトムベナリ古代ニ牡丹アリトモ今ノ艶麗ナル花ハ未ダ有ラザルベシ牡丹芍薬躑躅山茶百合等人ノ好ミ盛ナルニヨッテ好花イデキテ変態百出スルハ近年ノ事也」と『大和本草』が求めるのは艶麗な花を賞玩する人々の精神史であり、愛好者たちの増加に伴う品種改良の結果である。それは人の心が草木や花の歴史に与える影響の分析でもある。天道の理とは異なるうえに造化の力が介入しない「人為」の考察であり、そして飢餓や病に対応する知恵でもない純粋な「楽しみ」の追究である。¹²⁵

そして芍薬¹²⁶では「其花牡丹ノ次ナリ故ニ花相ト云」と牡丹の次に賞翫される花であるとする（『大和本草』でも牡丹の次に項目がもうけられている）。『詩経』に記述さ

れた芍薬の外観や利用手段などを踏まえたうえで「中華ヨリ来ルハ其形カハレリ花園ニウフルハ中世中華ヨリ来レリナルヘシ」と中国から日本に伝来したものは古代の中国のものとは形が変わっているとする。そして中国の『芍薬譜』には34品の芍薬が記載されているが、現在の日本では「其数彌多クシテカソヘカタシ」とする。芍薬は日本に渡ったことで形を変え、そして数も格段に増えている。

また菊¹²⁷では「古歌ニハキクトヨメリ蘇我菊ト云ハ八雲抄ニ黄菊ナリトイヘリ上代ニハ未中夏ヨリワタラズ故ニ万葉集ノ歌ニハ菊ヲ詠セズ其後ワタリシユヘ古今集ニハスデニ詠ス」と歌集を調べることで菊の伝来の時期を推定しようとしている。

『大和本草』はモノの賞翫の歴史を歌集からひもときようとしている。それは牡丹や芍薬、菊などがいつから日本人の心に強い印象を与えるようになったのかを探る作業でもある。

『大和本草』は人の情感とモノの関係の歴史を解説しようとしている。その情感は藤天蓼¹²⁸の「好事ノ者葉ヲ去テ瓶ニ挟ム」や、エビネ¹²⁹の「好事ノ者盆ニウヘテ花ヲ賞ス」のように鑑賞の手段を増やした。また蘭¹³⁰では「盆ニウヘタルハ寒月ニ至リ屋下ノ暖処ニオクヘシ上ヲオホフヘシ平地ヲ高クウフルモヨシ地ニウヘタルハ冬春厚キコモヲ二重ニオホフヘシ三月上旬取出スヘシ」と気候に合わせた盆栽の手入れを解説する。また「盆ニウフルハ座間ノ清賞ノため也」と盆栽にする理由まで記述されている。『大和本草』の解説は好事家たちの賞翫の手段の変化や最高の状態を保つための栽培方法、そしてそれを行う理由にまで及んでいることが分かる。

『大和本草』の目指す民生日用の「民」とは「土人」や「賤民」と称した人々のみをさしてはおらず、また日用の「日」とは飢餓や病にさらされる土俗的な日常を意味するだけではない。花を植え、盆栽を嗜む好事家たちの楽しみを更に豊かなものにするための知が記述されている。

その賞翫の精神は鑑賞の手段を増やすだけではなく、牡丹のように多くの品種を生み出している。『大和本草』は人の情感が生み出す影響と結果を考察するものであり。それは同時に人がモノをどう愛し、どう関わってきたのかという視点から、古代から現代にいたる「日本人」の教養を理解するものともなっていく。

3.6 不思議な現象と異形の記述

ここまで考察してきた『大和本草』の知とは全て現実に根差した記述であり、実際

の生活に応用可能である実利的な知恵の解説だった。しかし同時に夜有光物ノ類や鬼火など実体が不明瞭であるモノも『大和本草』には解説されている。

夜有光物ノ類¹³¹では「陰氣ノ氣アル物ハ皆夜光有螢火モ昼ハ光無夜入光ヲ生ス。海潮夜之挙レハ光アリ月夜ニ光ナシ」と陰気のあるものが夜に光るものであると定義する。そして光るものは螢火や夜の海潮のほかに朽ちた山茶木や毒菌、腐草、青鷺の羽、鯛の肉うろこ、イカの新鮮な肉など光る対象に一貫性はない。また「黒猫ノ背ヲ暗夜ニナヅレハヒカル是ハイロコノ光也」と黒猫の背を暗夜になぞって光るのは毛皮の光であるとし、これは『大和本草』が求める「夜有光物ノ類」とは異なる現象のようである。「夜有光物ノ類」の定義として益軒が提示するものは「陰気の氣」という抽象的かつ思弁的なものであり、これまでの臘月や冬春といった具体的な季節や状態を指す言葉はない。しかし朽ちた山茶木、青鷺の羽など光る対象は具体的である。

鬼火¹³²では「野外之鬼燐其火色青其状炬如シ」と『本草綱目』の解説を引用する。そのうえで「日本諸州野外ニ鬼火所所ニ多シ其火タイマツノ如ク……（中略）……是古書ヨリアリテカハラズ人コレニ近ツケバ必消ユ」と日本の古書や実際の経験談が解説に反映されていく。『大和本草』は鬼火について書かれた中国の古典を知の土台に据えながら、その上に日本での経験談を積み上げていくことで論を補強する。そして「飛カケル火モ墓ノモユルモ多ハ雨夜ニアリ」という結論を一つ導き出すに至る。『大和本草』は実体がなく正体不明の現象であっても伝説と伝承からも知を蒐集し、その理を体験談と具体的なモノ（それは菌や草、鳥の羽や魚の肉などである）から解明しようとしている。

また鬼火の最後に「狐ノトモス火アリ口氣ヲ吐ケハ火ノ如ク光ルト云又鼬モ火ヲトモスト云是又口氣ヲ吐出ス事火ノ如ナリ」という解説がある。鬼火は「火」に分類されており、『大和本草』における「火」とは、炭火や燈火のような炭や胡麻などから起こる現実的かつ実態が明瞭な火のみならず、狐が吐くような実体のない伝説上の火も含んでいる。『大和本草』で解説された知とは現実的なものばかりではないことが分かる。

卷之十六の獸類で狐¹³³は「妖獸」と断言されたうえに淫婦となって人を惑わすとされている。そして人類の中には野叉落刹や鬼奴なども分類されている。野叉落刹¹³⁴について『大和本草』は中国の古典である『路史』の記述を引用しながらまずは解説する。それによると野叉落刹とは「娑利ノ東」や「北海海鬼ノ北」に存在する「人」の

ことである。そして『路史』の解説における形状を踏まえると、野叉落刹とは「国俗鬼ト称シ鬼神ト称ス」ものであると『大和本草』は考える。つまり中国古典の語る野叉落刹とは日本では鬼とされ鬼神とされるものと合致するという結論である。中国で羅刹とされたものは日本では鬼となり、中国古典の知は日本の伝説を根拠とする知へと転換されていく。そして最終的に「婦女ヲ見輒之ヲ盗ンテ穴ニ入是国俗ノ謂所丹後州大江山ニ昔穴居スル所酒顛鬼ト云者興相似リ」と中国の古典の記述と日本の酒吞童子の伝承の類似点を見出すにいたる。

そして鬼奴¹³⁵の解説では、まず宋の朱彥による『萍州可談』の記述を引用する。『萍州可談』では鬼奴とは「広中ノ富人多ク鬼奴ヲ蓄ク」とされており、裕福層に蓄えられている存在であるとされている。その記述を踏まえたうえで『大和本草』は、鬼奴とは「是俗ニ謂所クロバウ也」とする。つまり『萍州可談』の語る鬼奴とは現代の日本でいわれるところのクロバウであると結論づける。そして「或曰クロハウハ長崎ニ紅夷ツレ来リ役使令ム是海嶋一種ノ人類ナリ」と実際にオランダ人が長崎につれてきている人間がクロハウであり（これは黒人のことである）、それは海の向こうの島の「人類」であるとする。中国の古典の記述は日本の伝承を引き出すにいたり、その末に現代における未知を解明し、理解を深めるための一助となっている。

『大和本草』における未知の現象や存在に関する記述はただ迷信を蒐集しただけではない。多くの古典を参照し伝承や伝説を蒐集していく中で、その構造にパターンを見出すことを目的としている。それは現実の未知を究明する一助となり、迷信は現実を究める糸口となる。鬼火や狐の吐く火などは確かに実体のない「火」である。しかしそれは人間生活の中における体験が反映され、心情が中継されることで出現した現実でもある。

また鬼奴、野叉落刹などの「人類」は伝承や伝聞などの言説的事実にのみによって形態や生活様式を記述されるに留まらない。中国古典の知は日本の伝承を改めて吟味することに繋がり、そして現実の未知を理解する一助となる。『大和本草』における鬼奴や野叉落刹とは中国から日本へ、そして古典から現代へと繋がる有機的な思考の過程と、伝えられてきた知の歴史の集合体として出現する。

『大和本草』は異形な存在や現象の知をその周縁から考察していく。その知の土台となる歴史と経験、そして伝承と主観は断片的に語られることはなく、互いに交感し、時に置換を伴いながら連鎖と継起を繰り返す。それは日本と中国の伝承や伝聞の類型

を把握するものであり、同時に現実の理解を深める集合知であるといえる。

4. おわりに

『大和本草』は物理の究明という高踏な哲理の追究と、民生日用への一助という通俗的な目的意識が融合した末に成立した本草学書である。『大和本草』は人間とモノの間に生じる関係を客観視させる視点でもってモノを蒐集した。蒐集されたモノを理解するために『大和本草』は季節や環境、そして人の生活など非常に多くの標識を利用している。その手段はモノの単純な性質を理解するだけではなく、現代の日本で実際に行われている生活と、代々受け継がれてきた知恵を発見することへも繋がっていく。『大和本草』が追究する民生日用の知とは人間の知恵であり、その知恵を更に広範へと普及させていく手段として解説がある。

そしてモノはただ利用手段のみ言及されるのではなく、解説はモノと人間のことを論じるだけのものではない。季節によってその名称と効果を変える水や、土の状態や季節による変化で更に増えていく葱の知識など、『大和本草』で蒐集されたモノとは外見的特徴のみならず季節や土地の状態によって変化した複数の状態の諸存在の集合体であるといえる。そして獲得した知を、生活を更に改善するための知恵にするための手段として解説が存在する。

『大和本草』はその人間を主体にした視点を持ちながら、季節や風土という標識でモノの知を蒐集する。そして実際の経験を従えながら影響と関係の渦を展開させていく。それは日本の生活へと結びつくものとなり、また日本人自体を文化の歴史と共に考察するものへとも続いていく。『大和本草』の解説とはモノの境界を画定するものではなく、またモノ同士の間を裁断するものでもない。季節などの外部からの影響によって生じる変化や、草木を愛しむ人間によって品種改良が進められた歴史など、常にモノは外部との間に生じる関係と共に解説される。その解説は連続的なものであり、そして集合的なものとなっていく。

『大和本草』の考察の対象となるものはモノだけではなく、環境や人間、そして日本という国の歴史や文化である。それらは全て知の対象でありながら標識となる。総論において『大和本草』の執筆者である益軒はありとあらゆるものを蒐集し、その知を解説する「博学」を目指していた。しかしその「博学」が求める知とは過去の古典から現代の経験までを蒐集し、垂直に書き連ねていく手段ではない。『大和本草』は中

国古典を下敷きにしながら、その上に日本人の民俗や経験、そして日本の伝承や歌に詠まれてきた日本人の心性まで重ねていく。

『大和本草』は諸対象の関係を究明し論じ続ける中で、中国や過去の日本の古典に依る「言葉」以外で、現実の日本という「場」を持つ知を語り始める。関係の考察とは関係を生み出す「日本」全体の考究と解読にも繋がるものである。そこから見出された知と知恵を、『大和本草』は漢文ではない平易な言葉で多くの人と共有しようとしている。

『大和本草』の本草学とは、概念ではなく経験を根拠に置くことで人間とモノ、そして自然の関係の渦を活写する。そして日本の文化や歴史、心性などを分離させることなく同時に解読するものである。モノを基盤とし経験を根拠としながら歴史や心性をも含むことで築き上げられた知とは、中国に盲従することのない「日本」という場を新たに見つめ、展開させるものとなっていくといえよう。

『大和本草』の構成とその記述された内容からは、リンネ的な階層構造に基づく分類と秩序とは異なる思考の手段と認識の構造が見えてくる。『大和本草』の知の構造は垂直に並べられた表（リンネ的な分類法）の中で対象の特徴を見出すものではない。

『大和本草』から分かる本草学の知とは複数の視点と時間にまたがる「標識」によって立体的かつ多次元的な構成をとるものである。「標識」の中に知は分類されるのではない。蒐集されていく。

その多くの標識と知の多層構造の中で解読されるものは各々のモノの独自性であり、日本という風土と日本人との間に渦巻く関係の構造である。この関係の記述については実際の経験が根拠となっているが、『大和本草』ではこれらの経験知は断片的に記述されるのではなく、全体となって出現する。その全体とは水や火などの総体であると同時に牡丹を改良し続けた日本人の技術や心性などを含み、中国の古典から類推されていった末に現実の長崎でオランダ人が連れてくるクロバウに至る鬼奴の解説に見られたような歴史の堆積と思考の道程である。それらの全てが互いを論じるものでありながら、知の全体を構成し、考察するものともなりうる。本草学とはこのような「全体」を考察し、構築させる学問であるといえる。

本草学の知は「生きている」のである。この「生きている」とは「複雑さ」と同じ意味を持ち、全体が一つの要素に還元できないもののことをさす。たとえ同じ「水」という要素であっても季節や場所などの外部からの影響によって意味が変化し、それ

によって全体の関係もまた動的に変化するという循環的な仕組みこそ「生きている」知であり、本草学が追究し、構築する知である。

「生きている」知を持つ本草学は、リンネの分類法のように人間を取り巻く世界を階層的に並べるものではない。本草学は世界を階層に並べることで、下の階層の性質が理解できれば一つ上の階層の性質は自然と理解できるというような「還元主義」の学問ではない。「生きている」本草学の知は個々の要素を個別に分解して分析することによって全体を見渡そうとする学問ではなく、あくまでも「全体」との関係の中で個々を論じ、「全体」を構成するものである。

本草学の「複雑さ」とは決して単純に「込み入った」ものではない。本草学にとって重要なのはモノの性質やそれを取り巻く環境や歴史、それにまつわる伝承や民俗、人間の心性などを交えて互いに影響と関係を繰り返す多層構造の「全体」である。そして本草学が追究するのは相互作用を行っている全体の「仕組み」なのである。この「仕組み」こそ本草学の「複雑さ」そのものである。

以上のことより『大和本草』から分かる本草学の「複雑な」知の構造とは、多くの事物や心性が立体的に複合し、互いに関係づけあう構造を取るものである。またモノが環境から受ける影響と変化を知ることは中国とは異なる日本という国を知ることにも繋がり、日本人の生活と心性を改めて省みるものとなった。この日本へのまなざしこそ江戸本草学を成立させる要因の一つであり、ここでも「日本」と「モノ」は互いに影響関係にある。

江戸本草学にとって、ありとあらゆるものの蒐集と集合によって構築される全体は、日本の環境や歴史などを含めた個々の構成要素の相互作用によって変化し、また各々の構成要素も全体の変化の中で論じられるものである。この全体の「仕組み」そのものが「複雑さ」であり、江戸本草学の「体系」といえる。

歴史や環境などからモノの実態を究明する一方で、モノを標識にとりながら日本人の生活を究めることができ、互いの相互作用の中で全体の状態が決定される「複雑な」本草学の仕組みと体系のことを、今後は「複雑系」としてとらえていきたい。

「複雑系」とは現代の自然科学などの分野で「生命」や「知能」「思考」などの「生きている」システム¹³⁶を理解するために注目されている「とらえ方」である¹³⁷。複雑系の定義は¹³⁸、あるシステムを想定した場合に「システムを構成している要素は各自のルールに従って機能しており、局所的な相互作用によって全体の状態・振舞いが決

定される。そしてそれらの全体的な振舞いをもとに個々の構成要素のルール・機能・関係性が変化していくシステム」であるとされている。¹³⁹

本草学の知の構造はモノの知識のみならず、日本人の生活や歴史の中で論じられるものであり、あらゆるモノや現象が織り成す関係全体を把握するものである。次章からは「複雑系」の本草学の構造をより具体的に考察し、その発展を追う。

第3章 恕庵本草学の展開

1. はじめに

本章では松岡恕庵の著作から本草学の知の構造を解明していく。恕庵は江戸時代の本草学の発展の一翼を担った人物として知られている。

恕庵の時代には園芸の技術が進んでおり、新しい品種が多く登場した時期でもあった。伊藤伊兵衛による総合園芸書である『花壇地錦抄』も元禄8年（1695年）に出ており、また恕庵自身も『梅品』『桜品』『蘭品』など花に関係する著述を遺している。『大和本草』でも花の育成に注がれる人々の情熱に注目しており、本草学は当時の園芸の技術や知識からも影響を受けている

園芸のような楽しみを追究する知識の他にも、恕庵は明の周定王の『救荒本草』の和刻本を享保元年（1716年）に出している。これは飢饉において食物として利用することができる植物の知識を整理した実用書である。本草学は飢饉などの緊急事態に対処できる知識を求めている。このような知識を如何に実用化させるかという目的意識と手段が本草学を園芸とは異なる展開へと導いた。楽しみを吟味する一方で実用を追究するという二つの側面から知識を追究し、編集することで本草学は発展していく。

そして正徳6年（1716年）には徳川吉宗が八代将軍に就任する。吉宗は綱吉以来破産状態に陥っていた幕府の財政を立て直すことに苦心した。その政策の一環として全国の特産物に注目し、それらの商品化を図ったのである。つまり薬物の国産化を幕府が目指し始めた時期に恕庵は本草学者としての地位を固めていた。

良質かつ豊富な国産薬物を求める幕府は薬種を検査する「和薬改会所」を設立する。その検査員に選ばれたのが恕庵であった。益軒とも交流があり、園芸ブームからも影

響を受けながら、実用的な知識を追究する恕庵の本草学は、政治にとっても重要なものとしてみなされていたことが分かる。恕庵の本草学が江戸本草学にとって重要なポイントとなるのは、幕府という国家権力にも影響を与える学問であったからである。

このような恕庵の本草学の特徴は「名」への関心にあった。「名」に対する恕庵の目的意識とその理由をまずは明確にしたい。恕庵の本草学の師である稲生若水が和刻した『【新校正】・本草綱目』¹⁴⁰に恕庵自身が寄せた跋文がある。そこには「天下ノ名物ヲ談ジ薬性ヲ論ズル者、皆ナ斯ニ於テ法ヲ取ル」とある。そして「本邦ニ及ビ伝搬既ニ広ク、翻刻愈多シ、而シテ字画訓点多ク差訛ヲ率イ、薬物ノ和名往々ニシテ杜撰無稽ノ説ヨリ出ツ」¹⁴¹と薬物の和名の誤用と翻刻の杜撰さが非常に多いことを指摘したうえで「夫レ格物・正名ハ聖学ノ先ニスル所ナリ。而ルヲ学ブ者往往ニシテ性理ヲ高談シテ而モ名物ノ一事ニ於イテハ則チ以テ為ヘラク微事末枝ト視、未ダ嘗テ此ニ心ヲ注ガズ……（中略）……此ノ書独リ医家ノ一経ト為スノミニ非ズ。実ニ格物窮理ノ一端、読マザルベカラズ」¹⁴²とする。前章の益軒と同様、恕庵もまた「格物窮理」を目的に掲げながら本草研究に携わろうとしている。そしてその格物の手段として恕庵は「正名」をあげる。「正名」とは『論語』に由来する言葉であり、そのまま「名を正す」ことを意味している。

そして恕庵は「或モノ曰ク夫子多識ヲ鳥獸草木ノ名ニ言フモ、未ダ嘗テ其ノ実ヲ研究スルヲ言ハザルナリト。予以テ為ラク然ラズ。聖人ノ言ハ従容トシテ迫ラズ、詩ヲ読ム者但ダ其ノ名ヲ多識スルニ止マルヲ言フニ非ズ、而シテ必ズ其ノ実ヲ究ムルヲ要メザルナリ」¹⁴³と続ける。格物の手段として「正名」をかかげた恕庵は、孔子の「多識」の教えを「鳥獸草木の「実」を研究せよとは言っていない。だが詩を読みただ名を蒐集し、知ることのみに留まっていればよいと言っているわけでもない」と理解していることが分かる。恕庵にとって理を窮めることは対象となる事物の名を正しく理解することであり、それは物と名の対応関係を追究することでもある。

よって『【新校正】本草綱目』の序文で自ら「予素ヨリ本草癖有リ」¹⁴⁴と記述した恕庵の本草学とは「名」と「実」の関係を究明することで窮理にいたる学問であると思われる。

本章ではまず、恕庵の学問への目的意識が如何なる環境の中で培われたものなのかを究明することで江戸時代における本草学の需要と立ち位置を解明する。その後、恕庵の生前に唯一出版された『用薬須知』の記述から、恕庵の本草学が求めた知の姿を

考察していく。これにより前章の益軒と同じく「格物窮理」を学問の目的とし、その手段として「正名」を掲げた恕庵の登場がもたらしたであろう本草学の新たな展開を究明し、本草学の知の構造をより鮮明に構築する。

2. 本草学者を取り巻く環境と学問観

2.1 恕庵本草学へのまなざし

恕庵の知の基盤が儒学にあり、恕庵自身も生涯を通じて儒者としての立場を貫いていたことは既に多くの研究が明らかにした通りである。前章の益軒も併せて考えるに江戸時代の本草学とは儒者によって育まれた学問であり、実際の事物でもって格物を究明しようとする儒学的な目的意識によって展開した学問であったと考えられる。

恕庵は儒学の知識をつけるなかで浅井周璞の養志堂に通い、本草を中心とした医学を学んでいる。その周璞の孫である図南がのちに恕庵のもとで本草学を学んでいることから、医家である浅井家と恕庵の本草学は性質の異なるものであったことが推測される。

恕庵が本草学の研究に注力し始めるのは40代以降であり、本草学の師は稲生若水である。若水の本草学的な業績として有名なものは、古今に渡る古典から動植鉱物などの記事を精査し、各々の見識に再編集を加え、登載しようとする『庶物類纂』の編集に着手したことである。これは若水が儒者として仕えた加賀藩主前田綱紀の潤沢な資金と、綱紀自身が兼ねてより蒐集していた多くの典籍あってこそその活動である。元禄16年（1693年）という17世紀後半の日本で、多くの知を蒐集し編纂する学問である本草学に藩主というパトロンがついていたことは注目に値する。本草学は権力の庇護を受けながら活動の幅を広げていったことが分かり、権力者にとっても関心が深い学問となっていたことが窺える。

若水と恕庵の交流については江村毅庵が寄せた『用薬須知』の序文が明らかにしてくれる。

松岡君、儒雅精敏、経ヲ説クニ長ク、兼ネテ弃物ノ眼有リ。少年来医薬天下ニ明ラカナラザルヲ以テ憂ヒト為シ、稲君ト遊ビ諸家本草ヲ講明ス。盡サザル所有レバ則チ汎ク群策を参へ、必ズ当否ヲ訂正シテ止ム。暇アレバ則チ相携ヘテ尋覓

シ、一草木一禽魚、必ズ其形状ヲ的識ス。溪翁・山叟ニ遇フ毎ニ必ズ其ノ郷名ヲ
詢ヒ其ノ材用ヲ叩テ後止ム。是ニ於テ晦ハ頓シ、偽リハ真ニ、錯ハ正シ、ソノ本
草ニ功有ルコト大ナルカナ。(松岡恕庵,1980,p7-p8)

若水と恕庵は共に野外に赴き、モノを採取していたことが分かる。ただ採取するだ
けではなく形状を精査し、郷名を調査しており、この活動こそが本草学の発展に寄与
したと序文は記す。観察と蒐集が若水と恕庵の本草学の手段であり、実体験に基づい
た経験知こそ本草学を興しうる知であった。また前章で考察した益軒も二人と親交が
あったことから、自身による実践による知の蒐集によって本草学を究めようとするこ
とは、当時の名だたる本草学者たちにとって当然の手段であったといえよう。

恕庵が本草学者として注目されるのは、若水の死後である。それは若水の後継者と
して目されたがゆえであった。注目を浴びた恕庵の本草学について前田綱紀の侍医で
もあった小瀬復庵が残した資料がある。

復庵又云、京に在しほど、儒生にて舌耕などして松岡玄察と云年五十に近か
るべき有。稲泉州につきて本草ノ学うけし也。珍らしきこと共云也。柑子と橘子
とのことヲ問ひしに、凡そ物には類有也。まづよくよく類を分をわかち心つけい
ふほども、明朝には事物名多くなりて、粉々ノ説今その本を失ひし。いくらも有
と見えたり。只々古によりて、扱其類を推しなば、いかにもこと煩はしからずし
て、其疑も開くべし。薬物などの如き、特に其類を分ち知りぬれば、其性おのづ
から明らかにになりて、其駅多かるべきもの也。明世の人のいひし所の柑の類も、
皆々古の橘の類也。□（橙か）などの如きもの共、皆々古の袖の類也。此心得を
もて物を観るに、竹木鳥獸魚介みな悉く其類有也。相かまへて能々其類を推し知
り給ふべき也といひき。(新井,1977 年,p432-p433)

ここで重要なのは恕庵の見識が「珍らしきこと」と評価されている点である。この
書簡からは、モノの名を明確にすることで混乱を防ぎ、対象の実態を明らかにしてい
くことこそ恕庵の本草学であったことが窺える。その為に必要となる対象を観察する
心得〈ノウハウ〉と鑑定の手段が当時にとっては「珍らしきこと」であった。恕庵が
打ち立てようとしていた本草学と手段は非常に斬新なものであり、故に注目されてい

たことが明らかとなる。

恕庵の本草学とは蒐集された名と実物の一致を目指すものであり、綿密な観察を手段とするものであった。このような恕庵の本草学を本稿では〈恕庵本草学〉として記述していくことにする。

2.2 本草学をとりまく価値観

本草学は権力者にも関心を持たれた学問であることは先に述べた。しかし本草学は学問の世界で高い評価を受けるものではなかった。恕庵の門弟である浅井図南が『用薬須知後編』に寄せた序文からは、本草学に対する世間の目の一端を窺うことができる。

夫レ先生ノ博物ハ実ニ東方三才戴ノ一人ナリ。然リド雖ドモ先生ノ業、豈此レノミニ止マランヤ。……（中略）……傍ラ国家典故制度ヨリ、医ト釈老ノ教ニ至ルマデ、其ノ理ヲ窮メザル莫シ。博物ハ特ダ其ノ土苴ナルノミ。（松岡恕庵,1980,p237）

図南は『用薬須知後編』は恕庵の「博物」すなわち広く物を集めこれを知るための一端であるとする。そのうえで恕庵の知は「博物」に留まるものではなく、有職故実、医学や仏教などの知によって理を窮めており、その広範に渡る学問と知の内においては「博物」など土芥に過ぎないと言い切っているのである。

これは恕庵自身の見解を写し取ったものではなく図南自身の学問観から立ち上がった言説であり、評価であるという指摘がある。また図南だけではなく儒医南川金溪も儒者とその流派についての見解を記す『閑散余録』にて、恕庵に学んだ後に本草学者として高名になった人物である津島恒之進について「学問ノ力ハナケレトモ物産ノコトニ精密ナリキ」¹⁴⁵と評価している。「物産」とは薬材に限らず自然物を蒐集する学問のことを指しており、恕庵らの目指す「博物」の本草学であるといえる。儒者らの目から見て本草学とは学問ですらなく、軽んじられるものであったことが窺える。本草学は学問の世界において末端に位置づけられていた。

このような風潮と視線の中で自身も儒者である恕庵は、『【新校正】本草綱目』の序文で己の本草研究の意義について次のように記述する。

夫子云ハザランヤ「必ズヤ名ヲ正サンカ、名正シカラザレバ則チ言順ハズこと成ラズ」ト。苟モ名実乖戾セバ則チ玉石混濁・美惡無弁、人適従スル所ヲ知ル莫シ。其ノ害為ルヤ細故ニ非ズ。豈格物ヲ云ハンヤ、豈正名ヲ云ハンヤ。若シ夫レ無用ノ弁ヲ誇リ、不急ノ察ニ務メ、実学ヲ遺シテ空文ヲカリ、天下後世ニ無益ナル者ナレバ、則チ固ヨリ君子ノ戒ムル所ナリ。予好ム所ニアルニ非ズ。読者小枝ヲ以テ視ルコト勿レバ而チ可ナリ。(稻生, 1714 年, 『本草綱目 52 卷圖 1 卷附結髮居別集 4 卷本草圖 4 卷』, p13)

恕庵にとって名と実体を一致させることは格物を究明する手段であると主張する。そこに加えて本草学の研究について弁護を繰り返してきたのは、多くの名を知り、実体を理解し、その一致を目指していくことはまさしく一つの君子の学問であることを主張したいがゆえであり、読者が本草を単なる小枝とみなされなければそれでよいと記述する。本草学は「小枝」とされる学問であり、軽んじられていたことがここからも分かる。このような時代の中で本草学を研究するためには、儒学的な根拠による意義を求めなければならなかった。恕庵であっても「格物」への目的と「正名」という手段は、自身の活動の有用性と正当性を主張するために幾度も主張しなくてはならないものであった。

儒学を基盤とする学者社会の中では軽んじられていた本草学であるが、恕庵は上皇の密旨によって『蘭品』を著し、また 36 種の海苔にそれぞれ古歌を付けた『歌仙海苔』に漢名を選定する依頼を愛宕山教学院主から受けている。確かに「本草」は儒学や医学などの知に比べれば下位に位置づけられるものであったが、恕庵本草学は文人的教養を満たす学識であると認められており、求められていたことが分かる。本草学は実用とは離れた知の「楽しみ」を求める人々にとっても興味深い学問であり、そのような「趣味」の人々からの協力によって恕庵本草学は発展していった。

そして享保 6 年 (1711 年) に恕庵は台命を受けて江戸へ下向する。これは国内に流通する薬種の正式名称を定めるためであり、かつて「珍らしきこと」とされた恕庵本草学は幕府にも認められ、その知を求められるものとなった。

本草学を研究することは非常に軽んじられる社会の風潮の中で、恕庵は「正名」という目的意識を掲げることにより、新たな本草研究の手段と姿勢を明確にした。恕庵

本草学とは儒教を中心とする学者や文人との知的交流から生まれ、同時に藩主や幕府といった権力が望む公的な目的にも影響を与えた学問である。

その知は従来の本草学からは逸脱し、その評価を覆す「珍ラシキ」ものであったことが分かる。次節からは恕庵本草学の「珍しさ」を『用薬須知』の記述から具体的に解明していく。

3. 『用薬須知』の解説からみる恕庵本草学の知の視点

3.1 言葉とモノの同定

「名」と「実」の一致を目指した恕庵によって編集された『用薬須知』¹⁴⁶では、モノの呼称が多く蒐集されている。百合¹⁴⁷の項目では「和名サユリ一名山ユリ」と記述され、鶏冠花¹⁴⁸は「和名ケイトウゲ」と記述されているように漢名に対する和名が解説される。それは中国の名称とは異なる日本での呼称を明確にするものである。

白頭翁¹⁴⁹では「俗名赤熊柴胡ト云者是也。諸国方言最モ多シ于此ニ聚メ訪問ニ便ス。児花[賀州]、ケシケシマナイタ[同上]、猫草[筑前]、チチンコ[仙台]、ウナイコ、ゼガイサウ[京花肆称所]、ヒメバナ[摂州大坂]、ガクモチ[濃州]。此薬漢ヨリ渡セズ。……（中略）……漢土ヨリ渡セズ、医家用ヲ欠ク、処々山中極テ多シ。近来之以ヲ柴胡充ツル誤也。柴胡与殊ヘテ別ナリ」と「諸国方言最モ多シ」の記述通り、非常に多くの方言が蒐集されている。これは中国からの輸入品がない為、医師らが自ら日本国内で調達しなくてはならない現状を慮ったものであると思われる。『用薬須知』において方言は非常に重要な知識として位置付けられていることが分かる。

胡蘆巴¹⁵⁰では「古来和名ニ南蛮大根トスルハ本草ニ蛮国ノ蘿蔔子トナリト云説ニヨツテ名付タルナラン是妄謬實ノ形色ヨク蘿蔔子ニ似タルヲ推量ノ節ナリ」と『本草綱目』の説に従い、推量の呼称を記述した歴史を修正している。『用薬須知』は名を正すことで知を修正するのである。

欵冬¹⁵¹でも古典からの推量による誤用を指摘している。これはフキノトウであり、「和書ニ山吹ト訓ス絶ヘテ誤レリ四条大納言公任朗詠集ヲ撰シテ欵冬ヲ山吹ト訓スルヨリ誤レリ。山吹ノ称ハ芡實ヲ水フキト云ニ對シテ呼フ名ナリ欵冬金櫟棣共ニ山フキノ称アリ故ニ誤リ混称スルノミ酴醾ヲ山吹ト訓スルハ非ナリ酴醾ハトキシイバラト云モノナリ其花白黄紅ノ三種有汝南圃史金櫟棣ノ下ニ葉酴醾ニ似タリ葉ノ形ヨク相似タ

リ花亦黄ナリト云ヲ以誤テ山吹ト心得タルモノナルヘシ」と『用藥須知』は解説する。和書の誤用を指摘するだけではなく、その歴史を修正する。その修正の手段は名称を訂正するだけではなく、誤用の原因を葉の色や形など具体的な形状の解説による。『用藥須知』が求める正名の知とは名と実物の一致を果たすだけではない。その名を持つモノを観察し、究明された実態から誤用されるに至った理由が明確にされるものである。

そして天麻¹⁵²では「和漢皆用ベシ。和ニハ仙臺ニ多シ他處ニ亦間之有郷名ヌスビトノアシト云」とヌスビトノアシという呼称を記述する。そして「ソノ實ヲ還筒子ト云本草ニ云ク茎中ヨリ根ニ入トソノ説怪シ余嘗テ之ヲ疑フ」とある。『本草綱目』の説に『用藥須知』の筆者である恕庵自身が疑問を持ったのである。

恕庵は「仙臺ノ一瞥其實ヲ採テ寄せ来ル詳之ヲ察スルニ包中極細子有テ百合實ニ似タリ種ヘテ生活スベキモノニ非ス。試ニ屢之種ユ終ニ生セズ」¹⁵³と、実際に仙臺の実を取り寄せ、詳細に観察した。そして「此ノ物根ヲ以テ分ツベクシテ予種スベカラサル百合ノ如シ古人還筒ノ名ハソノ實ノ輕虚蒔種ニ堪ザル根ヲ以テ分ベキニヨッテ之ヲ名實茎中ヨリ根ニ帰スルニ非サルヲ知ル」¹⁵⁴と結論づけている。古典の知に疑問を持ち、その名と実物が異なる可能性を感じたならば、実際に実物を取り寄せ観察をし、試験を行っている。そして実物の実態から得られた知によって名は歴史と共に修正され、そして正されていくのである。『用藥須知』から分かるのは、名の追究に始まる恕庵本草学の知を支えるのは、実物の詳細な観察だということである。

恕庵は名を標識にすることにより、対象の実態を明らかにしようとしている。恕庵本草学において名の究明とは字句の解釈ではなく、鑑定の手段である。そして名から浮き上がってくるのは歴史への疑問であると同時に、四条大納言のような過去の人物の文化的活動へのまなざしであり、現在営まれている人間の生活である。方言のみならず芸花屋などでの呼称も蒐集する恕庵本草学にとって、「名」とは在野の人々の言説であり、眼前に現出するモノを取り巻く諸現象の一つである。

3.2 産地の記述と優劣の判断

『用藥須知』は人参の解説から始まる。この人参¹⁵⁵の解説は3ページにも及び、これは『用藥須知』の中で最も長い。「凡ソ和人参ト稱スルモノ其ノ類甚ハタ多シ漢ヨリ渡所モ其ノ種一二非」と人参には和産のものと漢産のものがあるという解説から始ま

る。

この解説は人参に限ったことではない。『用薬須知』では「和漢共ニアリ」など産地を明確にする記述から始まる解説が殆どである（黄芩、川芎、芍薬、大黄、升麻、獨活、防風、細辛、莪木、三稜、天門冬、牛膝、木通、威靈仙、常山、紫稍花など）。そして「蛮船戴来所者」や「蛮国ヨリ渡ル」などオランダからの船に積まれていた輸入品であることから解説されるモノも登場する（丁香、紫檀、雷丸、蘇香油、安息香、胡椒、畢澄茄、草撥など）。

そして人参の解説では産地を明確にしたのち、「朝鮮ヲ上トシ漢ヲ次トス」と人参の優劣を産地ごとに鑑定している。鑑定基準は「形小ニシテ堅ク色黄褐ヲ帯フ」とまずは形と質感、そして色である。また嘗ては人参を舐めて後味があったものが最上のものとされていたようだが、それを『用薬須知』では「此又真偽有」と再考の余地がある判断基準だとする。そして「唐参ノ中形肥大ニシテ蠟色ナルモノヲ以テ之ニ充ツ」としている。人参の種の優劣は見た目の色や形によって判定されている。

人参だけではなく玄参¹⁵⁶でも「関東ノ産根最モ佳ナリ」としたあとに、「京都叡山ニ生スルモノハ形似タリトイヘモ根堅木如」とある。産地は和漢といった国単位ではなく「関東」や「京都叡山」など更に微小な区分で記述されるようになる。そして同じ日本産であっても質感や形状などによって優劣を判断する。

『用薬須知』では優劣の判定に関わらず、モノの形状や色、質感などの外見を詳細に解説し、産地ごとの特徴と種ごとの特性をあげることもある。たとえば蒺藜¹⁵⁷では「若狭地方ノ海邊沙地ニ生ス地ニ布テ蔓生ス子ニ刺アリ是即チ黒蒺藜ナリ」と、若狭地方の海の邊に自生し刺があるものが黒蒺藜であるとしたのち、白蒺藜は「沙苑蒺藜原野草澤ノ間ニ生ス獨生葉」であり、刺のないものであると解説されている。

『用薬須知』の中では日本をはじめ、漢や唐、琉球にオランダといった多くの国名が登場する。また「和漢共ニ」という記述からは、日本のモノの隣には常に外国からの輸入品の存在が意識されている。しかし産地は和や漢といった国土の規模で解説されるだけではない。甘草¹⁵⁸の解説では「漢ヲ用ベキ」とした後に、「和邦ニモ甲斐国ニ之ヲ産」とあり、白芷¹⁵⁹では「城州長池邊ニ多ク」とされ、また肉桂¹⁶⁰では「漢ヨリ来ル東京交趾阿港蛇吧等アリ」というように、国の中の一地域に産地を限定することもある。『用薬須知』では日本やオランダといった巨視的な観点でのみ産地を指定し、モノの形状を比較するだけではなく、日本の京や若狭地方などの微視的な範囲に

まで視点を絞り込むこともある。『用薬須知』は漢や唐、オランダといった国名によるグローバルな視界を持つと同時に、甲斐国や若狭地方、東京、長池邊といったローカルな地域にまで注がれる視線を同時に備えている。

また胡黄連¹⁶¹の項目では胡黄連の味について「漢ハ気味和ス」が「和ハ烈ナリ」と解説する。そして漢産の胡黄連と和産の胡黄連は異なるものではないかと疑う人もいるが「其實ハ同種ナリタダ土地ノ異ニヨッテ和ト烈トノカワリ」であることを稻生若水からの教えとして解説している。『用薬須知』における産地の解説とは、同種のモノを更に細分化させ、各々の形状や味などの個性を解説するための指標の一つとなっている。『用薬須知』における産地の記述とはモノを更に詳細に理解し、分類する為の標識としての役割を担っているといえよう。

そして産地ごとの品種の特徴を見究め、時に優劣を判断する為に、具にモノを観察していることが分かる。それは根や葉の形状や色味などの視覚はもちろん、質感といった触覚、そして「和ス」や「烈ナリ」という言葉によって表現される味覚である。『用薬須知』の解説は五感による経験に基づく記述であり、モノに対する積極的な観察がその知を支えていることが分かる。

3.3 薬効の記述とその目的

『用薬須知』には「薬」という単語が用いられている。江村如圭の序にも「日用ノ薬品ヲ明ニシテ是編ヲ著ス」¹⁶²とあり、「薬品」に関する著作であるような印象を受けるだろう。

しかし『用薬須知』では薬効には全く触れられないまま、形状や産地、方言に解説が集中しているものが多い。たとえば莪朮¹⁶³では「和漢共ニアリ。但和極メテ稀ナリ。形状鬱金ノ葉ニ似テ粗澁リテ光澤無ヲ異ト為ス。根ノ色青黄ヲ帯フ」とあり、連翹¹⁶⁴では「和大小二種アリ。小トイヘトモ丈余ニ及フ。タダ枝軟弱ニシテ下垂スルコト垂柳ノ如シ。芸花家ニ「タニタワシ」ト名ク。歪頭菜ト和名同ジ、混スベカラズ。大翹ハ枝楊起シテ垂ザルヲ異トス、実ヲ結フコト稍少シ。春初二四弁ノ黄花ヲ開ク、迎春花ト時ヲ同ス、最モ愛ベシ。挿テヨク活ス」とあり、滑石¹⁶⁵では「和漢共ニアリ。漢ヲ上トス。近来肥後ヨリ出ル焼山石是モ此ノ種類ナリ」となる。『用薬須知』は薬について解説される本ではなく、またモノの薬効を確認するための本でもないことが分かる。

『用薬須知』は題名に薬の語が用いられているが、薬物という限定された集合の中か

ら収載されるモノは選択されておらず、解説される知も薬効に制限された思考に基づいたものではない。『用薬須知』は薬物の学習を促すものではなく、薬効の知を理解する為だけの書ではない。

もちろん薬効が解説されるモノも多く収載されている。しかしその書き方は「薬用ニ用ズ」(川芎、芍薬、龍膽など)、「薬用ニ供ス」(防風、白附子、阿魏など)といった薬物として利用が可能か否かだけを記した簡潔なものである。黄栢¹⁶⁶の「眼科ノ用ニ入ル」というように具体的な使用部位が書かれている場合もあるが、かつて恕庵が著した『薬性記』の連翹の解説である「カルイ腫物ノ皮膚ニアルハ発シテソノ毒ヲイダス也」といった具体例を挙げての薬効の利用方法にまでは言及されていない。

また甘草では「阿蘭陀甘草ト云アリ甚大ナリフトサ一寸餘ニ及フ形美ナレモ性特ニ劣ル共用ベシ」とあり、柴胡¹⁶⁷では「和漢共ニ用イルベシ。但漢ハ多ク陳旧ニシテ蠹蛀多シ、性味脱シテ用ニ堪ズ。鎌倉ト称スルモノ真ナリ。用ベシ。又河原柴胡ト称スルモノハ『本草原始』ノ翻白草、一名鶏腿児ト云モノニシテ柴胡ニ非ズ。但和方久シク来ヒ来テ解熱ノ功ハ柴胡ニ彷彿ス。益気湯等ノ補薬ニ升麻ト並用タグヒニ決シテ鎌倉ヲ用ベシ。河原柴胡ハ唯功無ノミナラズ而且ツ害有之ヲ慎メ」とある。『用薬須知』での薬性の扱いは産地の異なる同種のモノが存在する場合、それらの間で優劣をつけるための判断基準である、

また柴胡の解説では「和漢共ニ用イルベシ。但漢ハ多クハ陳旧ニシテ蠹蛀多シ、性味脱シテ用ニ堪エズ。鎌倉ト称スルモノ真ナリ。用イルベシ。又河原柴胡ト称スルモノハ『本草原始』ノ翻白草、一名鶏腿児ト云モノニシテ柴胡ニ非ズ。但和方久シク用ヒ来テ解熱ノ効ハ柴胡ニ彷彿ス。益気湯等ノ補薬ニ升麻ト並用ルタグヒニ決シテ鎌倉ヲ用イルベシ。河原柴胡ハ唯功無ノミニアラズ且ツ害有之ヲ慎メ」とある。河原柴胡とは『本草原始』でいうところの「翻白草」であるとし、薬効である解熱効果が共通していた為に柴胡と混用されてきたと医療の混用の歴史にまで『用薬須知』は踏み込んでいる。また升麻と併用する場合は有害であるため、そのような方には決して用いてはならないと使用への注意も促している。『用薬須知』は薬効を踏まえながら、正しくより良い薬物を選ぶための知識を教示する。それは鎌倉柴胡と河原柴胡の違いを具体的に明らかにする知でもある。

また阿魏¹⁶⁸は「漢ヨリ渡ルモノ真ナリ。薬用ニ入ベシ。即チ草阿魏ナリ。天竺ノ一種木阿魏ト称スルモノ有ルニ因テ本草家疑ッテ遂ニ決セズ。阿魏ニ真無シ辨アリ此ノ

説後人ノ面目ヲ印定ス草阿魏ハニ出テ元人胡荽ノ食用ノ常品トス疑カヒモ無キ今薬用ニ入ル者真ナリ木阿魏ハ別物ナリ名同シキヲ以テ混スベカラズ」と解説されている。本草家の疑念にまで記述は及び、名とモノの混用への注意喚起へと至る。

『用薬須知』は薬効を全面に押し出してはいないが、決して無関心を貫いているわけではない。だが『用薬須知』での薬効の記述とはモノを薬物として定義し、薬物としての有用性を言及するものではない。『用薬須知』にとっての薬効とは対象となるモノと別種のモノとの知識の混用を避け、混雑を排除することを目的とするものである。『用薬須知』における薬効の記述とはモノの個性を解説するための手段の一つであるといえよう。その解説が及ぶ範囲は、『本草原始』などの古典や医療の手段にまで入り込んでいるモノの歴史へも至る。それは薬効の真偽への疑問を提示するだけでなく、文献や経験の知識の成否を判断し、また人間がモノに抱える疑念の一端を映し出すものとなっている。

『用薬須知』の知は薬性を言及するものではなく、また思考の始点を薬効に限定することもない。『用薬須知』におけるモノの薬効とは、葉の大きさや味、産地と同じようにモノを他のものと区別するための標識であり、たとえ同種のモノであっても置換不可能な対象の独自性や個別性を解説するための手段の一つであるといえる。それはモノを解説する一方で古典を再確認するものともなり、また現在の医療手段を省みるきっかけを生むものともなっている。『用薬須知』は著者である恕庵の弟子の為に著されたものであるが、それはモノに対する思考を整理させると同時に、これまでの知の歴史や己の行為を振り返らせる一助となる解説がされているといえる。

3.4 利用手段と製法の知

『用薬須知』では自生しているモノだけを対象にはしていない。「漢土ニハ家園ニ植テ之ヲ用」いていると解説される葛根¹⁶⁹や「薬店ニ金銀ノ二種有」とされている蜜陀僧¹⁷⁰などのように薬店で販売され、園内で栽培されている種も収載されている。自生種のみならず人間の活動に関わるモノと知にまで『用薬須知』の記述は進んでいく。

菖蒲¹⁷¹では「和今人家庭際ニ種へ盆翫ニ供ズル石菖蒲根ナリ。誤テ五月端午檐ニ挿ムモノヲ用ユルハ非ナリ。其端午ニ用所モノハ白菖ト云又泥菖ト名ク席下ニ敷テ虫ヲ避ヘシ薬材ニ入ズ」と石菖蒲と白菖、そして泥菖の違いを、形状や薬効ではなく人の利用方法や目的によって解説する。それは石菖蒲の唯一性を語るものであり、白菖や

泥菖の個性を知る指標の一つともなり、互いを区別するための形状以外の目印でもある。そしてモノと共にある人の営みを見つめるものでありながら、その中に潜み続けた人の誤解を炙りだすものともなっている。モノはこれまでの人の知を再確認するものである。

また生地黄¹⁷²では「和産ナリ近世山州和州ニ多ク之ヲ植。于四方ニ賣ル乾地黄ハ日乾火乾陰乾者ヲ乾地黄名ク。熟地黄ハ酒ニテ蒸熟シ成モノナリ方剤因テ製シ用ユ宜諸家本草九蒸九曝之説有。之道家九ヲ貴フ胡説ニ因襲ス蒸ストキハ気味共ニ脱シテ用堪ズ信用スベカラズ。蕭方輿カ説其ノ辨尤詳ナリ。因于左列」とあり、以降は蕭方輿の救正論に解説されていた地黄の製造方法が引用されている。まず生地黄は山州や和州に多く自生しており、世間で売買されている乾地黄とは日や火、陰干しなどによって乾燥させた地黄のことを指すとする。そして熟地黄とは酒で蒸し、方剤によって製造したものであるとされている。

『用薬須知』ではこの熟地黄の製造について救正論の引用によって解説している。『用薬須知』が生地黄の項目で記述したのは、生地黄が加工されることによって乾地黄という商品になっているという当代の事実であり、さらに製造されることによって熟地黄という薬物へと変わるという古典から受け継がれ続けた知とモノの変化である。

モノは加工されることで名を変えられ、目的が変更される。生地黄が人の取引対象である乾地黄となり、また別に手段を用いれば薬物として利用される熟地黄という新たなモノへと変化するのである。人の手が介入することによってモノはその目的と価値の可能性をさらに広げていく。『用薬須知』は人の介入によって変化していくモノの様態を、古典の引用と実際に行われている製造方法によって解説する。

『用薬須知』において記述されるモノの利用手段や製法技術とは、同じカテゴリの中に含まれながら異なる名称や価値を持つモノ同士の差異や隔たりの原因を解説するものでもあり、それはモノの個別性や唯一性をさらに具体化するものとなっているといえる。

4. おわりに

『用薬須知』の著者である恕庵は、名と実物の一致を目指す「正名」を自身の本草学の根幹に添え、格物窮理の手段の一端としていた。そして「名」の追究は対象の実態を究明するに至る。『用薬須知』では薬物として供される部位のみならずモノ全体を

詳細に観察し、その形体を詳細に記述しているのである。そのうえで古典の知と実際のモノの形体を丹念に比較検討し、その対応関係を明確にする。それは誤用の歴史の修正ともなる。「実」によって「名」は修正され、蒐集されたすえに整理される。そして味覚や薬効などの内的情報にまで『用薬須知』の記述は至る。

名を初めとするモノをモノたらしめる総体的な情報の記述によってモノの知を提供しようとする試みこそ『用薬須知』であり恕庵本草学であるといえる。恕庵本草学が記述した知とは、他のいかなる存在とも同一ではなく、等質でもない、唯一の存在であるモノの「情報」である。

恕庵本草学は前章の『大和本草』に比べ、知の中心点は具体的なモノで固定されているように思われる。また『大和本草』よりもモノの外形に関する記述が詳細になっている。恕庵本草学は『大和本草』が提示した本草学から植物学としての可能性を高めつつあるといえよう。

しかし恕庵本草学が記述するモノをモノたらしめる情報とは、モノの外形や味覚などのだけではない。日本の地域のみならず国すらも越えた環境の違いによって、たとえ同じカテゴリの中であってもモノの価値は変化する。そして方言や利用目的、加工手段などによってモノは状態すら変え、名称すら変わる。人との関係によってモノは変化し、新たなモノが生み出される。その新たなモノと基盤となる従来のモノを、『用薬須知』は古典や人の生活によって論じようとする。それはモノの独自性や唯一性をさらに具体化する標識となる。

『用薬須知』とはモノが他の諸対象と並置された場合、如何なる手段や目的などの条件によってどう唯一性を確保しているのかを記述したものである。『用薬須知』におけるモノとは、形状から方言に至るあらゆる情報の集合体として独自性を保証されるものとなっている。

しかしそれは対象であるモノの領域を限定させ、モノを特徴づける手段となっているだけではない。製造手段や方言などの他の要素との相関関係を打ち立てることによってモノがそのモノとして成立しうる為の諸条件を明らかにすることが『用薬須知』が記述した知であるといえる。そのような『用薬須知』の試みは同時に古典への疑問や人への疑念をもたらすものとなっている。

モノから生起した恕庵本人の「疑念」といった主観すら『用薬須知』には記述されている。それはモノが人に与える影響の記述でもある。名称や利用手段、そして疑問

の生起など、『用藥須知』の中では常にモノは人との関係の中で存在している。それはモノの唯一性と特異性を環境や用法、技術の記述によって語ると同時に、人とモノが互いに与え合う影響の関係を記し、自身の行為を省みさせるものともなる。

『用藥須知』の知とは、形状や味覚といった内的な構成因子のみならず、環境や人間の生活などの外的要因と接する部分まで含めて総体的に解説されたモノの総合の情報である。またモノを取り巻く諸現象が呼称を中心に活写され、時に過去の知が修正されることによって、人間の生活や心性を含んだ「現実」が顕現していくのである。

『用藥須知』とはあらかじめ与えられていた薬物をいかに適切にかつ有効に利用するのかを主眼とするものではない。「名」を主だった標識としながらモノそのものに関する情報を他の諸要素との相互作用の様態と共に蒐集し論じることで、歴史を含めた現実の実態を明らかにさせていくものである。

恕庵本草学の特徴は実体験に基づいた活動のみならず、対象に対する詳細な観察力を要求するところにある。そして諸対象の実態を、それらを取り巻く現象と共に記述する。それは歴史や古典、風土や環境、そして人間の心性にまでまたがりながら、互いの影響と関係の変化の中で全体を分析する「複雑系」の知の仕組みを構築するだけに留まらない。「名」と「実」の一致を目指した恕庵本草学は、現象の連続的な記述と歴史の修正によって、古典の中にある言葉のような概念や、儒学的な思想と思弁の中で繰り広げられてきた知の構造を現実顕現させようとする学問であるといえる。

恕庵本草学は詳細な観察と広範に渡る知識の蒐集と議論によって成立している。恕庵が蒐集した知識とはモノの名や形状だけではなく、それに関わる環境や歴史、そして人間の思想と思弁がもたらす影響である。このような関係と影響が組み合わさることによって構築された「複雑系」の仕組みの中で恕庵は『用藥須知』を執筆し、蒐集した知識を体系づけていく。そしてその「複雑系」はこれまでの江戸本草学よりも遥かに優れた観察力と分析力によって成立する構造であった。この手段と知の構造こそが「珍らしきこと」と評価され、政治が求めた恕庵本草学である。

恕庵は若水の跡を継いで『庶物類纂』の編集を打診された際の返信で「一人之手にては中々成就難仕儀と覚悟仕候。……（中略）……惣而草木鳥獸等俗名之儀ハ諸国之方言をも委承合、普く人ニも相尋候而、其上同志之者と検議仕」と一人での編集は難しく、特に鳥獸草木の俗名については諸国の方言などを多くの人に尋ね、蒐集したうえで同志らと話し合いながら結論を定めていくものであると回答している。

また恕庵が穀庵に宛てた書簡¹⁷³において「本草会」なるものの存在が確認できる。それは「取カクレ草竹等モ此頃ノ会ニ顕レ申候。白薬子ノ一ニ種并猩々袴等モ顕レ申候間、珍重存候へ共、所獲零碎ノ小草、大方ノ益ニ立申ハ顕レ不申候。……（中略）……本草会不断有之、高森、甲賀、熊谷相不易主席……（以下略）」とあり、「本草会」とは自ら「獲った」植物を持ち寄り検討する会だということが明らかになる。

恕庵の学問作法は実地調査と共に、多くの人物から情報を収集し、有志の会席によって議論し知を共有するものであったことが分かる。恕庵本草学とは多くの人間たちとの協力関係の中で実行されるものであり、蒐集と議論の応酬によって成立していく学問であったといえよう。

恕庵本草学の「複雑系」の背後には、非常に多くの人々との交流と議論が存在しており、恕庵の門下からは後章でみる豊田養慶など、多くの本草学者が登場した。恕庵の本草学は後の本草学にも大きな影響を与えている。そして広範に渡る情報の蒐集と複数人での議論によって知を構築していく手段が本草学に新たな展開を生む。

第4章 薬品会の登場

1. はじめに

益軒の登場によって本草学は古典を精査する机上の学問ではなく実物とそれらをとりにくく現象でもって現実を構築し、日本を俯瞰するものとなった。恕庵はそこに更に詳細な観察力を要求し、構築される知の構造から現実を顕現させる学問とした。日本全土を視野に入れ、方言や民俗など人間生活に関わる知も蒐集することを目的する本草学は有志の協力が必要な学問であると認識されるにいたる。

この展開には享保の改革が大きな影響を及ぼしている。薬物の国産化を目指す享保の改革の薬事政策の中で重要なのは、享保19年（1734年）から大々的に行われた諸国産物調査である。これは全国の藩のみならず、天領や私領、寺社領に対して、薬草、鉱物、そして鳥獣、魚介、昆虫にいたるまで、その領内に存在するありとあらゆる動植物を利用の有無にかかわらず調査し、報告することを求めた政策である。この政策によって各地で「モノ」への関心が高まった。

そして吉宗の薬事政策に関わった専門家として紀州出身の医師林良喜、伊勢出身の植村左平次、伊勢出身の町医師である丹羽正伯、後に青木昆陽と共にオランダ語の研究に励むことになる野呂元丈、若い頃に漂流事故で中国に渡り、本草学を学んだ末に帰国、江戸町奉行所の本草家募集によって採用された安部将翁がいる。特に正伯と元丈は恕庵と同じく若水の下で本草学を学んだ人物であり、若水の影響は後の幕府の政策にも及んでいることが分かる。¹⁷⁴

本章では薬品会という本草学に関わる人物達によって開催された会合から本草学の展開と知を考察するが、この会の開催者の一人でもある田村藍水は将翁の弟子であり、朝鮮人参の研究を通じて幕府に貢献した人物である。その他にも官医である藤本立仙や岡田養仙、岡了伯、宮村永隆など幕府と関係のある人物が会には多数出席しており、政治と関係のある人々にも本草学は広く受容されていることが分かる。これまで江戸本草学を作り上げてきた益軒や恕庵は江戸の出身者ではなく、江戸で活躍した人物でもなかった。しかし薬品会は江戸で開催されたのがきっかけで全国に広まった催しであり、本草学の東漸という点において非常に重要な意味を持っている。

薬品会とは薬効の有無に拘ることなく全国から珍しいモノを集め、その真贋や産状、名称をめぐって質疑応答を繰り返し、情報を交換し合う会のことであるとされている。¹⁷⁵まさに恕庵が書き残した「本草会」であると思われるが、「薬品会」がいつ始まったのかを明確にする史料はない。出品者と出品物の明確な記録が目録として残されている最初の薬品会は宝暦7年（1757年）7月に田村藍水によって開催された会だが、これに先駆けて大坂で津島恒之進が「本草ノ会」を行ったとされる史料が存在する。¹⁷⁶しかしこの「本草ノ会」の実態を明確にする史料はない。

しかし津島恒之進は恕庵の門人であり、知識人らが自然物を持ち寄り討論を重ねる学問の手段を知っていると思われる。そして宝暦7年（1757年）には藍水の門人となっていた平賀源内は、「本草ノ会」の参加者である戸田旭山の門人でもあった。恕庵から恒之進へ、そして旭山と源内を経て藍水へと恕庵の学問手法が伝えられたことは考えられる。

「本草ノ会」の実態について明らかにすることはできない。だが本草学は複数人の協力と実物を前にした議論の応酬によって知を構築させていく学問となっている。それは本草学を学ぶ人間が広範に渡り始めたことを示唆するものである。

恕庵以降、本草学は政治にも関係し、その中で新たな展開が生まれた。それは知識

を通じた交流の拡大であり、そしてある土地に存するモノの発見と実態の吟味である。本草学は幕府の政策と並行して全国へと拡大していく学問となるだけではなく、多くの人物を繋ぎ合わせていく。政治に影響を受けながら、その一方で政治的な思惑が全く絡むことなく同好の士との交流により知を深めようとする営みが生まれた。江戸時代の本草学は知の構造も目的も交流もより「複雑な」ものとなっていく。その「複雑さ」を考察する為に、本章は薬品会を取り上げる。

薬品会は藍水による開催後、江戸だけではなく、大坂や京都、熊本、尾張、伊勢など全国に渡って幕末まで行われるようになった。大坂で初めて薬品会が開催されたのは宝暦 10 年（1760 年）4 月 15 日であり、会主は旭山である。この会の出品者は 101 人、出品数は 208 品（重複品を引けば 191 種）と、それまで行われてきたどの薬品会よりも出品者、出品数共に多い。また大坂と京だけでは無く、江戸や長崎、明石や讃岐といった非常に広範囲に及ぶ地域と人物から出品が集まっていることが分かる。旭山の薬品会は全国に渡る出品と参加者が確認できる最初の薬品会である。

また旭山は薬品会を開催した 1 ヶ月後に『文会録』と題した薬品会の解説目録を出版した。江戸の藍水一門も 3 回に渡って開催された薬品会の出品物と出品者の名を纏めた『会薬譜』を発行するが、『文会録』は出品物と出品者の名をただ羅列するだけでなく出品物に対する解説まで記載されている。『文会録』とはただの目録ではなく、薬品会の歴史上で初めて出品物の解説と批評が確認できる本である。

『文会録』が発行された 1 年後の宝暦 11 年（1762 年）4 月 15 日に、豊田養慶によって初めて京都で薬品会が開催される。この会は全国から出品物が集まったわけではない。しかし養慶も宝暦 11 年秋に『楮鞭余録』として薬品会の解説書を発行している。

藍水一門によって江戸で開かれた薬品会は宝暦 7 年から宝暦 12 年にかけて 5 回行われた。その後、薬品会に出品された総計二千余種の中から重要なモノや珍しいモノを厳選し、それに解説をつけた『物類品隲』という解説目録書が宝暦 13 年（1763 年）に出版された。『物類品隲』は『本草綱目』の分類法を踏襲したうえで出品物を解説しているが、引用文献は『天工開物』、『物理小識』などの中国古典や『和名抄』、『古今六帖』などの日本古典にまで及ぶ。その中には日本各地の本草学者や医師、蘭学者、長崎通詞、農夫など非常に多くの人物が登場し、彼らの薬品会以前の経験も記述されている。その為、『物類品隲』は江戸時代の学問と知の伝搬を考察する上で非常に良き資料を提供してくれるものである。

本章はまず『文会録』と『楮鞭余録』の記述を考察することにより、薬品会の参加者らが薬品会で如何なる知を求めていたのかを考察するものである。これは本草学に起こった新たな変化の実態を究明するものとなる。

多くのモノと人物が一堂に会する薬品会とは知の集合の場ともいえ、参加者らは知を蒐集していくことが求められる。参加者らが蒐集した知がどのような言説と手段をもって目録解説書の中では編集されているかを考察することは、これまで論じてきた「集合」と「蒐集」を繰り返す本草学の「複雑な」知の構造をより明確にし、「複雑系」としての本草学を更に具体的にするものとなる。

2. 『文会録』が編集する知

2.1 序文が語る薬品会の意義

『物類品隲』以前に出版された『文会録』や『楮鞭余録』は、『物類品隲』の影に隠れてこれまで注目されてこなかった。だが薬品会で得た知を解説し、編集するという活動は『物類品隲』へと至る道程として見逃せないものである。その為、まずは『文会録』と『楮鞭余録』から薬品会を経験した人物らがいかに知を記述し、編集しようとしたのかを分析するものである。それはこの2冊が持つ歴史的な意義を再評価することへと繋がっていく。

『文会録』¹⁷⁷にある「薬物会請啓」によれば旭山は「橐駝の癖」¹⁷⁸、いわゆる植木職人や庭師の仕事に興味があった。また百卉園と名付けた自宅の庭に多くの植物を植え、暇さえあれば自ら土を耕していたという。元々園芸趣味のあった旭山は「自己ノ見解ニテ本草ノ学ヲ好ンダ」独学の徒だったが、百卉園が恕庵の門人でもあった津島恒之進の目に留まったことで恒之進の教えを乞うようになり本草学者としての名を高めていくことになる。恒之進は旭山の百卉園に「園品類ニ富レシコトヲ賞嘆」したとされており、高名な師に就いた優秀な本草学者の目から見ても旭山の薬草園は完成度が高く、非常に知的好奇心を揺さぶる園品が豊富な場であったと推測できる。旭山は恕庵の知を受け継ぐ一方で、自らの庭で本草学を実践し、経験に基づく知を常に蒐集し続けた人物であるといえよう。このような人物から薬品会の目録解説書の歴史は開始される。

旭山が編集した『文会録』の本文は絵入二十一丁であり、その内の十丁が序跋に充てられている。そして旭山が薬品会の開催に先駆けて全国に配布した「薬品会請啓」

と薬品会の規則を明文化した「会例」まで『文会録』には掲載されている。

まず「会例」¹⁷⁹の記述をみていく。旭山の薬品会の「会例」は七カ条に及び、旭山の直接の知人でなくとも希望があれば出席が可能であること、しかしたとえ知人であっても必ず出品したうえで出席すること、重複などの調整をしたいので出品者は一日でも早く品物の名と自身の名を知らせてほしいこと、当日俄かに出席不可能となった場合でも出品だけはしてほしいこと、そして出品物については列座の衆で互いに真偽を「質し明め」て「衆評の上」名を決定したいなどの細かい規則と会当日の大まかなビジョンを説明している。

旭山は薬品会を友人同士のような限られた関係の中で行われる馴れ合いのような場ではなく、一定の秩序と規則に則った上で執り行われる緊張感のある学際的な「場」として設定していることが分かる記述である。

次に「薬物会請啓」¹⁸⁰では、藍水と源内が会主となり江戸で行った薬品会の紹介をしている。その結果を旭山は「嗚呼盛ナル哉」と感嘆し、評価した上で、「敢方今吾浪花比可不雖東都之隆盛並亦是本邦二三大都會ニテ而儒醫百工其人乏不」と江戸に及ばずとも大坂もまた本邦で二、三の大都会であり、儒医百工の数も負けていないと大坂を誇る。

これは旭山個人が大坂という大都市に対して常に持っていた誇りかもしれないが、「広告」という側面から考えると今まで江戸でのみ開かれていた薬品会を大坂でも開催することに対して説得力を持たせたいうえで参加への情熱を掻き立て、且つ上方で初めて開かれる己の薬品会の格を江戸と比べて見劣りさせない為の一文であるとも考えられる。

しかし「薬品会請啓」の最後には「寒陋棄不各薬用充可者一二種携」と、取るに足りないと思ったものでも持ってきて欲しいと付け加えられており、集まるモノの質には旭山は拘っていない。江戸よりも良質なモノを集めた薬品会を開催するつもりはなく、あくまでもできるだけ多くのモノの真贋を参加者らとの質疑によって解明し、知を蒐集することに旭山の目的があることが分かる。

旭山は『文会録』の序文で版元から会に集められた主客の品目を「四方ニ諸ヲ公ニセント」と持ちかけられた為に『文会録』の出版を「予之ヲ許」と述べている。¹⁸¹どこまでが事実かは分からないが、旭山の薬品会はその開催までの準備段階からその結果に至るまで「四方」に公にすることを求められるほど革新的で画期的な催しであ

ったと言える。

『文会録』に収載された旭山の序文では「君子以テ文ヲ会シ友ヲ以テ仁ヲ捕ク」（原文は漢文）と『文会録』の題名の所以を『論語』の一文を引用することでまずは記述している。¹⁸²薬品会が仲間を集め、集まった仲間によって「仁」を追究する場であることを旭山は題名でもって主張していることが分かる。

そして旭山は天の文を日月星辰虹霓雲霧雨露霜雪とし、地の文を山海原野金石鳥獣虫魚草木、そして人の文を君子の文としたうえで「夫レ天地人之文、各々其ノ趣ヲ異ニスト雖モ、文ノ文為ルハーノミ」（原文は漢文）としている。¹⁸³この「文」とは朱子学の哲理である。それに加えて「仁」という言葉が飛び出し、また「文会」という『論語』の概念も持ち出すなど、非常に思弁的な方向から旭山は序文を開始し、薬品会の目的を記述しようとしている。また旭山は「薬之物ト為ル上ハ、雨露霜雪ヨリ下ノ虫魚草木ニ至ルマテモ用イズ無シ。イズクンゾ即今、此ノ会ヲ設クルヤ敢エテ仁ヲ輔ルノ謂ニアラザルトイエドモ、マタナンゾ吾ガ仁術ニセザルカ」¹⁸⁴（原文は漢文）と自然界の「文」を探求することこそ仁への道であり、その手段の一つとして薬品会を開催したと記述する。朱子学的理論を持ち出しながら自然探究の意義を語り、薬品会の価値を位置づけているのだ。

旭山には薬品会の意義を朱子学という御用学問の価値観を引用し、「仁」の追求の一手段として強調する必要があった。これは前章で考察した益軒や恕庵らと同じ試みである。しかし益軒や恕庵と異なり旭山は儒者ではない。

第2章第2節で考察したように旭山の師でもある恒之進は物産への知識は評価される一方で「学問ノ力ハナケレトモ」と称されており、本草学者らの知は軽んじられていた。よって薬品会も学問としてはおおよそ認められにくい活動であったのではないかと推測される。その為、書名にも『論語』の価値観を転用し、益軒や恕庵と同様に「仁」や「文」という儒学的な弁論でもって薬品会を意義付ける必要があったと思われる。

『文会録』に収載された「会例」と「薬品会請啓」からは、藍水一門の活動に刺激を受けた旭山が、更に多くの出品物と人の知を全国から大坂に集めることで、ありとあらゆる「モノ」の実態を解明する学術の場として薬品会を開催し、規定しようとしていることが分かる。そして序文の記述からは従来の思弁や概念に惑わされることなく「モノ」をテキストとして実際の自然を純粹に解説しようとする薬品会が如何に本

草学にとって画期的な催しであったかが窺える。旭山らには薬品会という活動を単なる同好の士らが集まって歓談する場ではなく、正当な「学問」の場として立ち上げようとする強い目的意識がある。

2.2 過去の知の更新

『文会録』に登場する古典は『本草綱目』『閩中海錯疏』『桂海果志』である。特に『本草綱目』からの引用が多く、天茄¹⁸⁵が「上ニ図スル所ノ形状本綱牽牛子集解と吻合ス」と解説されているように旭山の薬品会では『本草綱目』を知の下敷きにしながら議論が進んでいた。

しかし『本草綱目』の記述が如何に正確であるかを旭山は知ろうとしているのではない。赤箭天麻¹⁸⁶は、半丁以上に渡る解説が為されている。その解説の内容は、まずは関東が主な産地であるということ、根の形は玄参に似ているが、玄参とは根の色が異なることを通常時と干した場合の両方の状態などで比較して玄参とは似て異なる赤箭天麻の実像を露わにしていける。その他に根や茎の状態や形状、そして長さは二三尺であり節の数は四、五節と具体的に観察する。そして花はハマウツボに似ており、実はつけないとしたうえで、「本草還筒子ノ説」は誤りであると結論付ける。

『本草綱目』の天麻の解説では天麻の茎の中から落下してくるものを天麻子としている。それは異名を還筒子という¹⁸⁷。還筒子は天麻の果実であるとされているが、赤箭天麻は「実無」とであると薬品会では結論付けられているので、赤箭天麻は天麻子＝還筒子を為すことはできないということだ。

『文会録』では赤箭天麻の外観の形状がつぶさに記され、茎の長さや節の数などを具体的な数値で示している。また非常に形状の似ている玄参の根や茎を赤箭天麻の隣に思い浮かべることで互いの異同を論じ、対象の独自性を見出したうえで、古典に記された名前の似た天麻子こと還筒子の記述の真偽の判断にまで『文会録』の記述は至っている。これは古典の再編集であるともいえる。

『文会録』には「時珍諸説引證スル者非ナリ」¹⁸⁸「先輩不加ヲ謂テ鱒魚ト為スル者非ナリ」¹⁸⁹と『本草綱目』のみならず先人たちの知識を真つ向から否定する解説が多い。『文会録』の記述は実際のモノの全体像を観察することで古典の知が更新されていく。

薬品会はモノを「観覧」する場ではなく、「観察」する場である。観察によって視覚

的に蒐集された経験の知と、古典から身に着けていた概念的な知を照応させ、吟味検討させることにより知は更新され、新たに定義づけられようとしている。

2.3 観察と関係の考察

赤箭天麻の解説の最後には「芝菌ノ類ニシテ年々梅雨ノ候時期ニ関シテ更ニ生スル」とあり、生育の時期にまで『文会録』は言及している。本名未詳とされる薬舗紫苑¹⁹⁰でも、ハコクサソウの葉に初生の葉が似ており、生えている毛は夏至の後に漸くなくなるとされ、金瘡小草では皺や毛の有無のほかには春夏の間は紫の花を咲かせ、まれに白い花のものがあることも書かれている。その他にも「梅雨ノ頃ニ氣ヲ感ジ生スル」蟬花¹⁹¹、「初夏中旬ニ長サ二寸余」となる矮菊¹⁹²と、葉や茎、根などの形状のみならず、季節や環境に伴うモノの変化にまで学者らの興味と見識が及び議論が交わされていたことを示す記述が多くみられる。

自然がモノに与える影響を『文会録』は記述する。『文会録』が編集しようとする知とは形状や味などモノ単独の情報だけではなく、自然という外界からの刺激によって起こるモノの変化と関係にまで及ぶものである。これも前章までの益軒や恕庵らの目的を受け継ぐものである。本草学は梅雨や夏至といった季節の変化の中でモノを知る学問である。

そして『文会録』の視点は早藕¹⁹³の解説のように「鼠毛色一般故ニ鼠山丹ト名ツク其餘名義詳ナラズ」と人が使う名称へも向けられていく。早藕は一般的に鼠毛色の為、鼠山丹と呼ばれているのである。しかし他の名前は未だ明確でない。

獨根大薊¹⁹⁴は「根ノ形色気味並ニ牛房根ノ如シ故ニ濱牛房ト呼ビ為ス」と名の由来が解説され、かつ「土人蔬ト為シ食ス香味口に可ナリ」と土地の人々がどのように食べていたのかという経験の知と味まで記されている。薬品会ではモノにその名が与えられた理由から、土地の人々の生活にまで議論が及んでいたことが分かる。ただモノの名を知るだけでなく、理由を求め、利用の手段まで考察しているのである。それは日常生活の中で育まれてきた文化を考察する民俗学であるともいえる。

人間とモノの関係にまで議論が及んだ結果を示す解説は、「本邦ノ貴人往々此物ヲ以テ筋ト為シ菌ヲ固ス」白玉¹⁹⁵、「此石ヲ以テ一口ヲ鑿開シ鹹水濁水及ヒ酒醋瀘ハ皆清水ト成ル蓋奇石也」とされた瀘水石¹⁹⁶、「熊館ニ生スル所ノ芝ナリ土人取収テ精氣ヲ治ス甚効アリ。衆評ニ曰其形色気味皆エブリコト同シ是而朱崖芝ヲ以テ名ヅクベシ」とさ

れる熊館芝¹⁹⁷がある。また「龍宮国ノ人席ニ作ル絶佳」とされ「本邦ニテリウヒト呼為ス者ハ此ノ席也」と解説される芟草¹⁹⁸がある。国内のみならず、海外のモノに対する日本人の解釈にまで薬品会の話は及び、その知を『文会録』は記述している。

『文会録』はモノと人が培ってきた関係を、伝承や実体験を交えて記述していく。そのモノと人を巡る関係へのまなざしは日本だけではなく、海外の文化にまで及ぶものであった。

また『文会録』では出品物の品質のランク付けにも及んでいる。全ての出品物に対して評価が下されているわけではないが、和産と漢産の二種が出品された天竺黄¹⁹⁹の解説には「衆評和産ヲ上トス」とあり、薬品会では産地の異なる品が出品された場合に互いを比較し、どちらの方がより優れているかを検討していた場合もあったことが分かる。(もちろん単独で出品されたものでも上品、下品の評価が下されている場合もある)。その判断基準だが陽起石²⁰⁰では「薬用ニ堪ズ」とあり、檀香梅²⁰¹では「本綱ニ存テ蠟梅中ノ上品トス」と解説されていることから、薬用に成り得るか、もしくは『本草綱目』などの古典の記述を判断基準にし、衆評によって決定していたようである。

その他にも備前岡山の某氏の出品である磁石²⁰²は「衆評ニ曰上品ナリ漢産ト雖モ此ノ者如キ尤稀ナリ」と絶賛されている。『文会録』は参加者による集団討論の活気と高品質なものを見つけた時の高揚感を記述する。また「漢」という場所から産出されたモノに対する信頼と同時に対抗心がモノへの視線の中には含まれていたことも分かる。

『文会録』はモノと人が積み上げてきた関係の歴史と共に、モノを認識の中心に置いたときに浮かび上がってくる日本と海外の環境や文化の違いを記述しようとしている。これも前章までの益軒や恕庵らの目的を受け継ぐものである。本草学は多くの現象の変化の中で事物を知る学問であるいえよう。薬品会では前時代の本草学の手段を生かし、目的を理解しながら議論は活性化した。

2.4 記述される「衆評」

ここまでは益軒や恕庵らの本草学と薬品会が実行する本草学に大きな違いはない。しかし『文会録』に「衆評」という言葉が頻出する。これは『本草綱目』はもちろん、江戸時代に日本で出版された本草学書にもみられない記述である。序文で幾度も繰り返されていた「四方の君子」である同好の士らとモノの真偽を「質し明める」目的が薬品会では実行されており、その様子を、『文会録』では「衆評」という単語で表現し、

強調している。

その「衆評」が用いられるのは、モノの品質を決定した場合の他に誰もが納得のいく明確な答えが出るまでやや時間を要したであろう場合、モノの真贋を明らかにした場合、そして結果として真実が明らかにならなかった場合に分けられる。

たとえば東都の岡田養仙が出品した藜蘆²⁰³では「衆評ニ曰此ノ物主品ノ中ニ在ト雖モ亦以異種奇品ト為ベシ」とある。旭山の出品物と重複したが異種奇品であると判断された為に『文会録』に掲載されたのである。会例で重複などの調整をしたいと言っていた旭山だが、その調整方法も旭山の会主権限によって決定するものではなく、非常に民主的に対応されたことが分かる。

出品物の真贋について議論している様子が窺えるのは不灰木²⁰⁴であり「衆評以テ真ニ非ス為」とされ、『本草綱目』で火にくべても燃えない木として解説されているモノだと思われたが議論の末に本物ではないと結論づけられている。その他にも無名石草²⁰⁵では「衆評以瓦葦ノ属ト為ス」とされ名前も分からないモノを衆評によって属を決定させている。

一方で詳細が明らかにならないまま終わった議論の様子がよく分かるのが朝鮮産の麦門冬²⁰⁶の解説である。それは「衆評ニ曰ク」和漢に三、四種あり、そのすべてが葉に縦の文があるのだが、この出品されたモノにはその縦模様が無かったようである。植木屋で熨斗蘭と呼ぶものに似ているようだが、結局真偽は決し難かったと解説している。

古典を下敷きにしながらもその知識に疑惑を向け、植木屋などの商業の現場で得られた経験上の知識や目の前にある事実と高名な学者の知恵を中心に議論は進められていった様子を『文会録』は記述する。

また「衆評」と同時に「未詳」という言葉も『文会録』には頻繁に出現する。薬品会の場合では何もかもが明らかになったわけではないことが分かる。馬檳榔²⁰⁷のように名称は分かっているが、誰も詳細が分からず「衆評以為詳シナラズ」とされるものもあれば、「衆評未ダ決シズ或ハ以テ雲実根ト為亦詳ナラズ」とされる無名枯木²⁰⁸のように名すら明らかにできず推測するに留まったものも幾つかある。誰もが納得する確証がなければ名称も確定させない慎重な態度を『文会録』は記述する。

木綿并実²⁰⁹では「或人曰木綿ハ乃今販海ノパンヤ也ト又或人曰非ナリパンヤハ薩摩絮ナリト此説未タ必シモ然ズ上説是ニ近シ」とあり、パンヤの真偽を巡って解決に至

らないほど白熱した議論が行われていた様子が垣間見られる。

旭山の薬品会では参加者らの経験と実践による知識と、目の前にあるモノの実際が古典の記述上の知よりも重んじられている。『文会録』の記述は集まった人が実際のモノを巡って行う議論の様子と知への態度を記述しようとしているのである。

2.5 『文会録』が編集しようとした知とその手段

薬品会で明らかにされようとした真偽とは古典の記述や薬効だけではなく、実際の観察と経験を下敷きにすることで得られるモノの実体である。そして『文会録』の記述からは出品物は勿論、議論の及ぶ範囲も非常に多岐に渡り、最早出品されたモノらは単一の個として展示された「object」でもなければ「medicine」でもない扱いをされていることが分かる。

『文会録』ではモノを中心にして参加者らの経験や実践に基づく見解が展開されていく。モノが単独で語られていることは少なく、薬品会の議論によってモノの裏側にはモノが嘗て生育していた自然の様子が気候の変化まで含んで立ち上がる。そしてその自然の中で生活する人間とモノは如何なる関係を結んでいるのかという民俗や文化へも薬品会のまなざしが議論と共に移動していく様子を『文会録』は編集する。

『文会録』が記述し、編集しようとしたものは、古典を参考しながらも常にその記述に疑惑の目をむけ、目の前にある実際の現実と経験に則った知識を取り入れながら行われる非常に活発な意見交換の果てに徐々にモノの実体が明らかになっていく「様子」である。

薬品会とはモノの展示場ではない。博覧会でもない。また討論と議論によって知識の性格性を競い合い、古典の正否を突き詰めあう場というのも評価としては不十分である。モノを標識にして参加者のまなざしは方言や民俗のみならず海外の文化や環境にまで拡大されていく。薬品会が参加者らに与えた経験はモノの形状や質感だけではなかった。

そのような薬品会の経験を反映させた『文会録』の記述は出品物の論評や解説にとどまらず、これまでの古典の「言葉」の解釈でもない。また薬品会の会場は身のまわりの多くの事物に関する漠然とした知識の集積でもなければ、『文会録』が記述したのは雑多な知の蒐集でもない。『文会録』は時節や気候などの自然がモノに与える変化という現象や見知らぬ土地や国の環境や文化、民俗へのビジョンが議論によって明らか

になっていく様子を「衆評」などの言葉によって記述するものであるといえる。

確かにこれまでの本草学書も環境の中で生きる人々の生活を活写していた。しかし『文会録』では本草学に関わる人間たちの活動を書き、薬品会という本草学の学問の現場の熱気を「衆評」や「未詳」の言葉で伝えている。議論の「様子」を活写しようとする手段と目的こそこれまでの本草学書とは異なる「目録解説書」の意義であり、「本草学を究める人間」への視点こそ本草学の新たな展開を予感させるものである。

3. 『楮鞭余録』が編集する知

3.1 序文が記述する本草学

『楮鞭余録』²¹⁰は養慶の本草学の師である甲賀敬元によって行われた出品物の鑑定を養慶が編纂したものだ。序跋文を除き二十三丁の短篇である。そのうちの五丁が異品図と形容された絵図である。『文会録』でも絵図は掲載されていたがそれは非常に小さく、解説と同じ箇所に描かれたいわば挿絵でしかなかった。しかし『楮鞭余録』では一頁を縦に二つ切りにし、全十六図を掲載している。解説から「絵」を独立させて大々的に掲載する手法は後の『物類品隲』にも受け継がれている。その為、『楮鞭余録』は京都で行われた薬品会の実体を知るだけでは無く、薬品会の目録解説書の構成の点でも歴史的な意義を持っているといえよう。

また『文会録』と異なるのは『文会録』では見返しに「衆評」と明記されていたが、『楮鞭余録』では「甲賀敬元鑑定」「豊田養慶編輯」と個人の名が挙げられている点である。

『楮鞭余録』に掲載されている養慶の「楮鞭余録凡例三則」でも「甲賀先生正其名實編録成書命曰楮鞭餘録上梓」とあるので『楮鞭余録』は養慶よりも敬元の意図の反映されている本だといえる。その為、薬品会そのものも会主は養慶となっているが実際は元敬の威光を借りたものであったと推測できる。また旭山の『文会録』の「衆評」とは異なり鑑定者として元敬の名しか挙げられていないことから、会の実体も民主的な集団討論や質疑応答の場というよりも元敬の発言力に依存した編集がされていると思われる。

養慶は周防国岩国藩の藩医であり京都に出て甲賀敬元について本草学を修めた。また師であり、今回の薬品会でも鑑定者として名前を挙げられている敬元は松岡恕庵に師事していたとされ、養慶は恕庵の孫弟子にあたる。養慶は京都滞在中に鞍馬貴船両

山で採薬を行っていたことが序文に記されていることから、実際に山河を巡るフィールドワークの経験が豊富であったことが窺える。

序文を読むと養慶を評する言葉に「本草癖」という表現が何度か登場する。屈玄珪の序文には「昭代文明有稻生若水松恕庵二先生者出始繼烈山大貴二皇之業本草之学復命于吾」²¹¹「東方焉後世談名物論薬性者皆適従於二先生其功豈不偉哉」²¹²と稻生若水や松岡恕庵が作り上げた「本草之学」とし、その業績を讃えた上で養慶を「本草癖」と評している。

前章でも指摘した通り、若水は「江戸時代を通じて最大規模の本草—博物書」ともいべき『庶物類纂』を編集した人物であり、恕庵は『詩経』に出てくる本草類の名称の解釈に悩んだことから若水に弟子入りし本草学を学び始めた学者である。

恕庵は後に幕命によって本草の薬効調査をする和薬改会所に加わる。その他にも飢饉のための対策にも積極的にに関わり、数多くの実地見聞を行った人物としても知られる。二人とも本の言葉や風土に目を向け、実際に足を向けることで「救荒」や「日用」をキーワードに名とモノの一致をめざし、日本独自のモノや環境、方言、民俗にまで言及していく江戸本草学を開拓した人物である。序文を読む限り「本草癖」というのはそのような本草学の偉人たちの系譜を受け継ぎ、数多くのモノの生態や形態を日本の自然や文化と共に探求することに精力を注ぐ人物のことを指すもののようである。

また二人の人物から寄せられた『楮鞭余録』の序文ではモノを表現する言葉は「天下之庶物」²¹³「四方品物」²¹⁴、そして「草木金石虫魚禽獸」²¹⁵である。そして「博雅之君子草木金石虫魚禽獸之異品以便畜眼」²¹⁶とあり、薬用であることに拘ることなく四方に存在するモノを蒐集する人々が集う場所として薬品会を設定している。それはただのモノではなく「異品」、つまりは珍しいものであることが求められていた。

凡例では養慶は「天下之品物其無窮」²¹⁷とこの世に溢れるモノの種類には果てが無く、その枚挙のいとまなさに自分個人の力では到底全ての見識を得ることはできないことを語る。そして「四方庶物辨真偽」²¹⁸と書かれていることから「本草之学」を嗜む養慶の目的は諸家の書物に書かれたモノの実物を実際に見て名や異同を確かめることにある。名を知り、異同を判別し、真偽を鑑定しようとする目的は旭山と変わらず、できるだけ多くのモノを会に集めようとする思惑も変わらない。

しかし旭山との違いは「本草之学」という言葉が繰り返し用いられているところにある。養慶と敬元は『救荒本草』の和刻や『用薬須治』などを世に送り出している恕

庵の系譜に位置し、それが序文でも強調されている学者である。日本の本草学の立役者ともされる人物の教えを直接受け継ぐ学者達の間では既に天下に存在するモノの実際の姿を知り、その形状を的確に識別しながら方言による名称を問ひモノの性質を究明していくことを「本草之学」と位置付け、その学問を追及する手段の一つとして（仁や文などのような朱子学的哲理を持ち出さずとも）薬品会が開催され始めていたことがこの『楮鞭余録』から分かる。

この養慶の薬品会は旭山のように前もって開催案内の引き札を配布した様子もなく、参加者も幾人かは旭山の会にも見られた人物がいるが全国に渡っているわけではない。旭山の薬品会と比べればやや熱気に乏しい印象を受ける。近しい学派の間で行われた内輪の会であると考えるのが妥当だろう。

しかし（出品が薬用に拘ることなく多岐に渡る点は旭山の薬品会と同じだが）養慶の薬品会で注目すべきなのは、開催の前段階から「薬用には拘ること無く多くの分野に渡るモノ」を蒐集し、それが「本草之学」だと自覚していたということと、そして特に「異品」に注目していた点である。出品物には風鳥、帯箭鳥、鯛ムコノ源八、ハギウオ、サカテザメなど動物類が非常に多く、化石類にも及んでいる。その他にも但馬島に漂着した夷果や馬尾蜂など、珍品異物が数多く出品されている。『楮鞭余録』からは薬物であることに拘ることなくモノを観察し、知を得ていく学問を本草学とする気運が育ちあがりつつあったことがよく分かる。そして求められるモノは「薬」ではなく、「異品」であった。

3.2 記述される「土地」

異質なモノが多数出品された養慶の会の解説書である『楮鞭余録』ではモノの品質や形状、そして産地に関する情報が『文会録』に比べて詳細だ。特に特徴的なのが産地である。

『文会録』では「漢種」や「和種」、「日光産」など非常に大まかな書き方で済まされており、産地は特に言及されないポイントであった。しかし『楮鞭余録』では磁石²¹⁹の解説では「中品ハリスイ石ト云下野ナス野殺生石ノ東一里許ニ小山アリ皆磁石ナリ」と「一里」や「小山」などの、その土地の特徴や状況を表す単語が登場する。これはこれまでのどの本草学書よりも一段水準が高いものである。

その他にも海鶏頭²²⁰は「防州岩国大畠ノ鳴戸ニモ出」、羚羊角²²¹には「伊吹山ニ出ト

云」「熊野新宮ニ行道河アリ此川ノ両傍ノ木ニ角ヲカケテ子ムル」、山椒貝²²²は「紀州弱浦」など非常にローカルな地名にまで産地を限定し、記述する。そして「一里」のように距離を感じさせる記述や、熊野新宮に行く道に河があるなど実際の経験を彷彿させる解説が『楮鞭余録』には豊富である。

『楮鞭余録』が記述する産地とは「唐」や「日光」のような包括的な概念の土地ではない。「伊吹山」や「熊野新宮」のような具体的な地名を伴う固有の土地であり環境なのである。このような経験に裏打ちされることで現実感を伴った産地へのビジョンがモノの裏側に広がっている。そして図まで描かれた馬尾蜂は「元文五年庚申六月濃州岐阜洪水大風ノ後コノ虫多ク化生ス名ヲ知モノナシ」とあり、異形のモノがどの土地で如何なる時期に発生したのかまで言及する。

『楮鞭余録』が注目し、「モノ」の解説の中で記述しようとしたものは、生物が生育し固有の環境と地形を有した「土地」である。この各々の環境の独自性の追究はこれまでの本草学の知と目的を更に飛躍させたものであるといえよう。『楮鞭余録』の知の中心点は土地への現実感にある。

3.3 再編集される古典

『楮鞭余録』では『本草綱目』を筆頭に『三才図絵』や『典籍便覧』、『福州府志』などの古典からの引用が非常に多い。また「恕庵先生ノ説」²²³など恕庵の説で解説が補完される場合も多い。

旭山は「衆評」という言葉を繰り返し用いることによって薬品会の会場内で行われていた議論の様子を『文会録』で記述、編集しようとしていたが、『楮鞭余録』では薬品会の様子ではなく目の前にある「モノ」の知を如何に多くの史料から解説するかに重点が置かれている。

海膽殻²²⁴では「福州府志曰海膽殻図如孟外結蜜刺内有膏黄土人以為醬按スルニ防州岩国黒磯ノ海中一種ノウニアリ色青刺ヤワラカナリ漁人海桃ト云」と『福州府志』の中での記述を民俗も踏まえて前置きした後に、実際のモノの形と名を解説する。

特に石弩²²⁵の項目では「肅慎国ノ砭石ナリ肅慎国ハ今ノ北高麗ナリ彼地ニテ獵スル時此石矢ヲ以テス」と外国の歴史をなぞり文化をおさえている。そのうえで「今出ス処ノモノハ出羽土佐ノ産能州及ヒ南部山中円野ノ間時々有之上品ノ者ハ體水精ニ似テ亀紋有……(中略)……土人傳フ神イクサノアル時空中ヨリフル靈物トシテ守ニ用ユ」

と出品された実物の形状と日本の一地域に暮らす人間がそれをどう扱い接してきたのかという民俗学の観点に解説は及んでいる。

民俗に言及している出品物は多く、この他にも「山人搾油外科家ノ用ニ入」とされる阿勃参²²⁶、「里人採テ薪ニ雑ヘテ賈」とされる釣藤鈎²²⁷などがある。モノを標識としながら日本のみならず海外の自然や環境や民俗へと記述のまなざしを移動させ、ビジョンを描いている。

『文会録』でもモノと人、自然の関係を記述しており、『楮鞭余録』もそれを受け継いでいる。しかし『楮鞭余録』では「『三才図絵』曰」「『福州府志』曰」など中国古典や偉人の説を前置きし、その後に出品物と参加者らの知見が記されることが多い。それは古典の追記作業である。『楮鞭余録』は目の前にあるモノの実際とそのモノにまつわる現代の知見を、古典の知と併せて記述している。これは知の蒐集であり、また古典を現代の見解によって再編集することにより知を当代のものへと更新させていこうとしている。

3.4 日本と世界へのまなざし

『楮鞭余録』の編集で興味深いのはモノによって古典の知が実体化されていく様子である。そして真何首鳥²²⁸では「漢渡ノモノ真ナリ」、朝鮮種人参²²⁹では「朝鮮ヨリ来ルモノニシテ性味宜」、未定葉²³⁰では「或人園中ニ唐ヨリ渡ル所ノ龍眼ノ種ヲ植レハ此木」と解説されている。

また夷果²³¹は「コノモノ唐ヨリ葉ヲ入来ス匱ノ中ニ偶」あったモノであり、『楮鞭余録』には舶来品に関する記述が非常に多い。『本草綱目』のみならず『三才図絵』や『福州府志』など多くの古典を参照しながらモノの実態を記述していく『楮鞭余録』には、海外の国々を歴史の変化と共に理解しようとする「歴史も含んだ外国へのまなざし」が広がっている。

従来の研究ではさほど注目されてこなかった養慶の薬品会と『楮鞭余録』だが、珍奇な出品物が数多く出品されていることと異国への関心という点において、薬効だけでなく前時代の若水や恕庵が抱えていた藩命といった公務のしがらみや影響からも脱しかけているこれからの本草学のあり方と、外国という巨大な存在を見つめると同時に日本の一地域といったローカルな場所にまで視線の照準を合わせていく本草学者達の世界観を論じる上で非常に意義深い会であり本草学書である。

薬物に拘ることなく「異品」を蒐集し、嘗て益軒が追究した民生日用などのテーマが決められないまま研究と討論と解説が行われることで、学問が委縮することなく発展していく本草学の可能性を『楮鞭余録』は示唆している。内輪だけの小規模な会であるが、モノを標識としてローカルな土地にまで切り込むマイクロへのまなざしと、日本と貿易を行いモノを提供する外国にまで至るマクロな世界像へのまなざしを『楮鞭余録』は古典の知の後に現代の学者らの知見を付け加えていくという記述の手段によって編集する。

古典の知を現実の「モノ」によって再構築するだけではなく、モノを標識としてマイクロとマクロへの「まなざし」が同時に提供される環境として薬品会は機能している。そのまなざしの解像度はフィールドワークという実際の経験だけではなく、複数の人間たちによる集団討論によって格段に向上している。またまなざしが移動する方向はモノが生育する季節や風土によって変化する自然環境と同時に外国の歴史にまで至り、モノを霊的に崇めている人間の共同体へも座標を移していくのである。

薬品会では「モノ」とこれまでの人の「経験」によって参加者らを取り巻く古典の知を読解する一方で、自然や民俗、歴史を含んだ巨大な世界から微小な共同体の詳細まで縦横無尽に移動するまなざしが、集団の中で形成されていく。

養慶の薬品会の知を編集した『楮鞭余録』ではモノは認識の手段でありながら標識となっている。モノを標識としながら移動する記述は日本や外国を俯瞰するほど拡大する一方で日本のローカルな部分がクローズアップされるほど微細な解像度を持つものでもある。

『楮鞭余録』が編集した知とはモノを標識としながら古典を問い直すだけではなく、外国をその歴史ごとと俯瞰しながら日本を更に詳細に見つめる二重の視野であった。

4. おわりに

『文会録』と『楮鞭余録』はともに、モノの実際と薬品会の参加者らの知見から古典の知を更新しようとしている。そしてモノが嘗て生育していた自然の様子が気候の変化まで含みながら記述され、そしてその自然の中で生活する人間とモノは如何なる関係を結んでいるのかという民俗や文化へと記述は移動していく。

薬品会ではモノが中心的なテキストであり、同時に参加者らの認識の標識となる。モノを標識にして参加者のまなざしは拡大されていく。それは見知らぬ土地や国の環

境や文化、民俗への興味を起こさせるものであった。また何よりも薬品会とは複数の人間たちが直接議論を行う場であるがゆえに、議論が活発化した「様子」を『文会録』は記述し、『楮鞭余録』は海外へと視野が開かれていくのと同時に日本の細部へと向けられていく「まなざし」でもってモノの知を編集していく。薬品会の解説目録書は、薬品会という会の「様子」が記述され、「本草学の現場で起こっている出来事」が知の構造に組み込まれたことが、これまでの本草学書と異なる。本草学の複雑系は「知識を通じた人間同士の交遊」や、「その結果起こった出来事」という新たな要素を知の体系の中に組み込んだことになる。

薬品会の様子を編集しようとし、モノを中心にして日本を再確認しながら海外の環境や歴史にまで記述を広げた『文会録』と『楮鞭余録』は、薬品会という画期的な催しの様子を知ることができるものである。そして当時の学者たちがモノのどこに注目し、そこから如何なる知を築き上げ、記述しようとしていったのかを知る知の編集の系譜の手掛かりとなる本であるといえる。ここから薬品会の登場と共に、本草学が本草学者自身をも研究対象として取り入れ始めた可能性が指摘できるのである。本草学の「複雑系」はその構成要素を更に増やしていく。

この後、江戸で開催された薬品会の知を編集した『物類品隲』が出版される。この『物類品隲』には非常に多くの人物が身分や職業に関わらず登場し、彼らの薬品会以前の経験がモノの解説と共に記述されていく。またモノも唐種や朝鮮種だけでなく、オランダ産のモノがオランダ語の解説と共に記述されていくことも注目される。次章では『物類品隲』を考察することにより、薬品会が本草学の「複雑系」に与えた影響を究明する。

第5章『物類品隲』と薬品会

1. はじめに

出品者と出品物の明確な記録が目録として残されている最初の薬品会は宝暦7年(1757年)7月に田村藍水によって開催された会である。その後、薬品会は江戸だけではなく、大坂や京都、熊本、尾張、伊勢など全国にわたって行われるようになった。

藍水一門による薬品会は宝暦 7 年から宝暦 12 年にかけて 5 回行われた。藍水が会主を務めたのは宝暦 7 年に行われた 1 回目と宝暦 8 年に行われた 2 回目である。残りの宝暦 9 年に行われた 3 回目と宝暦 12 年に行われた 5 回目を平賀源内、宝暦 10 年に行われた 4 回目は松田長元がそれぞれ会主を務めている。4 回目の長元による薬品会の目録は無いが、1 回目から 3 回目の薬品会の出品者と出品物は『会薬譜』として纏められ、東都薬品会と銘打たれた 5 回目が開催された後には『物類品隲』という解説目録書が出版された。第五回東都薬品会は宝暦 12 年（1762 年）の開催であり、『物類品隲』は宝暦 13 年（1763 年）に出版されている。

本稿は『物類品隲』の記述を分析することで、藍水や源内らが薬品会で得た知を如何に編集し、読み手に何を伝えようとしたのかを考察するものである。

2. 『物類品隲』による本草学の展開

2.1 薬品会の歴史と開催の目的

薬品会は江戸で行われたのちに、戸田旭山が大坂で開催し、京都では豊田養慶が主催するなど全国的な広がりを見せていた。薬品会がブームとなった裏側には輸入品に頼りがちになりつつあった日本の貿易こと情と、輸入されてくるモノについて正確な知識を持つ学者が少ないという現実があった。

宝暦 12 年（1762 年）に第五回薬品会を開催するにあたり、源内らは出品を募る引札（広告）を全国に回している。その引札には「本邦産スル所ヲ藥物ヲ備悉スルニ以テ足ラズ縦令ヒ之有リトイエドモ用ニ中ズト。徒ニ耳ヲ貴テ目ヲ賤トス。愼焉トシテ意ヲ加ヘズシテ常ニ給ヲ海舶ノ齋戴スル所ノ其題スル所ニ從竝。蓄テ會テ其ノ真偽ヲ辨ズ嗟乎其レ人ヲ傷ザル者ノハ幸ナリ。若シ夫レ洋海颶に遇ヒ商舶期ヲ失シテ至ズ。前日ノ藏ムル又已ニ盡レ則其ノ疾治スルヤ棋類スル者ヲ投シテ。而シテ其ノ奇中ヲ庶幾カウ其レ亦思ザルノ甚ナリ。甚ヒカナ。本草学ノ講セザリシアルハベカラズ。始メハ人ヲ欺キ終ワリ以テ己ヲ欺クソレ薬用之品。無ンハ則已ニ。有リテ而シテ之ヲ知ラズ。人ヲ欺キ己ヲ欺クに至ル。是ヲ何ト謂ンヤ」²³²という記述がある。この時代は国産の薬物には有用なものが少なく、輸入品に頼らざるをえなければ、重要で確実な知識を得る機会も少ないのが現状だったようだ。そして本邦の薬物に目も向けなければ輸入品の真偽を吟味し、正確な知識を欲しようとしめない学者たちが多かったことがうかがえる。

源内らは外来品はおろか日本産の薬物の実体を把握することすらままならず、耳学問だけで済まされがちであった状況を改善しようとしている。これが日本全国に出品を募る引き札を回すほど大規模な薬品会を開催しようとした動機であり、目的の一つである。

前章で触れた旭山の薬品会について纏めた『文会録』の序文でも「海内ノ草木ヲ以テ睥睨シ」という言葉がある。日本のモノを眺めたいという欲求は当時の学者らの間で共有される願望だったことが分かる。古典の記述という概念に基づく知ではなく、実際の「モノ」の実体に接しながらモノの事実を理解し、従来の知識の真偽を判断する場として薬品会が開催されていた。

「徒ニ耳ヲ貴テ目ヲ賤ンス」とする源内の言葉を借りるならば、薬品会が開催された時期の学者たちは、「耳」から入る言葉によって学ばれていた本草学を、「目」に見える実物から知を得ていく学問へと変えていこうとしている。

薬品会はただ薬物となるモノを蒐集し、鑑賞するだけで満足するような受動的な試みでは無く、好事家を喜ばす展覧会でもなかった。学者らが薬品会に求めるのは実際の「モノ」を目の前にし、時にはそれに触れながら行われる学者同士の活発な議論である。薬品会とはモノの実際を知り、モノを標識にして現れる自然や国などの世界を見つめながら探求する場だ。それは「展覧会」や「博覧会」というような牧歌的な空間ではなく、自らの知識や研究成果を公開し、その妥当性を審議討論する現代の学会に近い。薬品会は目視の力が問われる眼目の空間であり、古典の言葉という概念では無く実物によって正確な知を見つめることが参加者らに要求される場である。

源内も引札の序文の後に「序にしるすがことく此會の主意は只今まで漢渡にて我国になき品も深山幽谷尋求る時は又なきにしもあらずしかはあれど道遠き国々を一々尋ねんとするのも煩しく又ことことは至るへきにもあらされは其国々の人にてよりて産する所のものを得て是を考る時は諸本草並にどどにゆすころいとぼつくとといへる阿蘭陀の本草等に出るところ大体は外国より渡らずとも日本産物にてこと足りなん然る時は内治外療の器少なからすと思ひ立し」²³³と記述している。日本の深山幽谷から漢や阿蘭陀からの輸入品を見つけ出すことで、更なる日本の自給率の向上を目指すことが薬品会の主意であることを、改めて述べているのだ。

また引札は「無名の異物にても思召寄に御出し」とも記述する。たとえ無名のものであっても出品してくれと薬品会の会主である源内は積極的にモノを募集している。

しかも前回の薬品会で出品されたものであっても産地が異なるのであれば出品を認めると、実際のところ源内は珍品にはこだわっていない。そして「山澤の名方言等又は深山まれにある品所在多く産する譚などくわしく御書しるし」と、方言や産物の由縁なども詳細に記して欲しいと言う。源内らはモノの希少性やその医療価値のみを求めているのではなく、日本の自給率の向上という実用的な思惑のみで薬品会を開催しようとしているのではない。方言や由縁などを重視するということはモノを自然から切り離された無機質な「object」として扱うのではなく、そのモノが育まれた風土やそこで暮らす人間達の姿と共にモノの知を考究しようとする為である。

源内らが引札を回した末に開催された第五回東都薬品会は 1300 種の出品物を集め、旭山や養慶らの薬品会はもちろん、藍水一門が行った過去四回に渡る薬品会での総数 700 数種を一度で超えており、盛況のうちに終わったと考えられる。源内らの引札は日本の実情を反映させたうえで本草学にかかわる人々の心を奮起させるものであり、薬品会は知への好奇心を確実に高める会であったことが分かる。

2.2 『物類品隲』の構成

『物類品隲』²³⁴は江戸で 5 回に渡って開催された薬品会に出品された総計 2000 余種の中から重要なモノや珍しいモノを厳選し、それに解説をつけたものである。タイトルページには「鳩溪平賀先生著」とあるが、巻之一の冒頭には「鳩溪平賀国倫編輯」とある。そして田村善之、中川鱗、青山茂恂の名が続く。(なお田村は讃岐、中川は江戸、青山は信濃出身である)。そして「藍水田村先生鑑定」とあることから、『物類品隲』は源内個人の著作というよりも藍水の鑑定を源内、田村、中川、青山の四人で編集した本であるとした方が事実に近いと思われる。しかしタイトルページには「鳩溪平賀先生著」とあり、解説の中には源内個人の経験に基づいた記述があることから源内が中心人物であったことがうかがえる。しかしたとえ源内が中心となっても、藍水の鑑定を四人で編集していることから、『物類品隲』は本草学と薬品会に関わった多くの人々のまなざしを複数の視点から読み解くことのできる本である。

『物類品隲』では『本草綱目』の分類方法を踏襲し、全 2000 余種の中から厳選された 360 種を巻之一に水部・土部・金部・玉部、巻之二に石部、巻之三に草部、巻之四に穀部・菜部・果部・木部・蟲部・鱗部・介部・獣部の順番で分類し解説している。そして巻之五は図絵であり巻之六は付録として人参培養法、甘藷培養并製造法、朝鮮

種人參試効説が解説されている。よって『物類品隲』は薬品会の目録解説書以外の価値も備えた本である。

また『本草綱目』の分類方法を参考にしたことは『物類品隲』の凡例で述べられているのだが、杉本つとむは『本草綱目』よりは林羅山の『新刊多識編』の影響を受けていると考察している。²³⁵そして『物類品隲』には非常に多くの板種があり、出版元の相違も著しい。『物類品隲』は当時の出版事情を探る史料としても価値があり、現代でもその視点からの研究が行われている。²³⁶

このような『物類品隲』の凡例には「品物重複スル者ノ及論富核者未タ者ノ及常種凡類世人能ク識所ノ者者皆畧載ズ」²³⁷とあり、重複したものや未だ実体が明確でないもの、そして世人がよく知っているモノは省略されていることが分かる。よって『物類品隲』には日本国内のモノ以外にも蛮種夷種とヨーロッパから輸入された「珍しいモノ」の解説が非常に多い。また藍水が寄稿した序文では「広諸四方、以為諸州製作之助也、冀徧有益人民乎云尔」²³⁸と『物類品隲』が広範に知られ、製作の助けになるような有益な書物となることを願っており、また「珍しいモノ」の他に人参の栽培法などの知識を載せた巻もあることから『物類品隲』は薬品会の解説書以上の価値を目指して編集されていることが分かる。

2.3 『物類品隲』序文からみる薬品会の様子

『物類品隲』の冒頭には藍水と藍水の門下生である後藤梨春の序文が寄稿されている。梨春は「遼雀啣侵翔西洋」²³⁹という書き出しから始めている。これは雀（つる）が侵（人参）を啣えて西洋へと羽ばたくという意味を持つ。この一文からは鶴や人参のような東洋的なモノでもって西洋へ挑もうとする挑戦的な意気込みが感じられる。

また梨春は「毒薬之難辨者真偽也明辨真偽而後漸生可得而論也已而世難乎其人焉」²⁴⁰と毒薬の真偽は弁じがたく、それらを明らかにできてこそ生を得ることができ、それらの主体が「人」であるとする。この「人」への視線は藍水の寄稿した序文でも窺える。藍水は「辨薬草之真贋而得其正矣雖然随欲掌握衆薬於此也則独力之所能盡也其以一人力得之僅」²⁴¹と独力では薬草の真贋を見極め、衆薬を掌握することはままならないとする。その為に四方の同志らの力を借り、諸州の奇物や蛮国の珍品異物を藍水のところに送ってもらい薬品会を開催することを思い立たと記述する。薬品会は「モノ」を中心において「人」と交流する場でもあった。

その為、『物類品隲』には珍しいモノの他に非常に多くの人物が登場する。それは藍水門下だけでなく後の蘭学者や長崎通詞、そして無名の地方の人物にまで至る。主な人物を挙げると、宝暦2年（1752年）に既に『本草綱目補物品目録』を編輯し、後に『紅毛談』を著す町医の後藤梨春、『解体新書』を発行する杉田玄白と中川淳庵、現役の官医でもある岡田養仙、藤本立泉、岡了伯、宮村永隆、橘隆庵、山田富水、長崎通詞の檜林十右衛門、吉雄幸左右衛門、伊豆の農民の鎮惣七である。

また引用文献も中国古典の『本草綱目』を筆頭に『天工開物』のような技術書や『医宗粹言』『物理小識』などの医学書や科学書、そして『和名抄』『古今六帖』『大和本草』などの日本の古典に至るまで『物類品隲』には登場し、源内らが参照していることが分かる。また参照する文献は本草学に関わるものだけではない。金²⁴²の部分では「和名コガネ、往古ハ本邦ニ金ノアルコトヲ知ズ」としたうえで大伴家持の「スメロキノ御代サカエントアヅマナル陸奥山ニコガネ花サク」と『万葉集』の和歌を引用している。

モノの呼称のルーツを古典や聞き取り調査などによって探索する名物学も『物類品隲』では行われている。たとえば沙参²⁴³では「和名ツリガネニンジン、山城、山科方言ビシヤビシヤ。但馬方言キキヤウモドキ。筑紫方言シテンバ。南部方言ヤマダイコン」とあり非常に多くの方言に注目していたことが分かる。『物類品隲』で源内らが取り扱っている方言は江戸方言、日光方言、伊豆方言、西国方言、讃岐方言など多岐に渡り「俗、和俗、方俗、一名」など俗称や別名も多く考証している。そこにくわえてオランダ語やポルトガル語、琉球語など中国からヨーロッパにも渡る。名物学の側面も外国のモノの登場と共にグローバルな展開を見せ始めているが、一方で東都方言、江戸方言が多く収録されている。これまでの日本の本草学では「江戸」での呼称は注目されてこなかった。これは『物類品隲』の編者らが江戸に在住していたことも関係するが、学問の中心が上方から江戸に移動してきたことも示している。

名物学のほかにも「薬品」会の名に沿った **medical** に関する話題も提供される。蝦夷産のエプリコ²⁴⁴の解説には蝦夷人は病の時にこのエプリコを用いるとされている。そしてその次にはルザラシが解説される。このルザラシは瘡や蟲積、食傷、攪乱、胸痛などを治し、毒を解するそうだ。また「鮫ニテオロシテ二分許白湯ニテ用、又熱腫ニハ水ニテ解キ傳テヨシ」と使い方まで解説されている。

薬品会では『本草綱目』などの中国古典の知識や日本人の呼称についての知識が飛

び交う一方で、オランダ語やオランダ人からの伝聞という新規の情報源が登場していたことが分かる。薬品会とはモノもそして知識を得る手段も新規と既存が交錯する場であった。次節からはそのような薬品会を経験した人々が、どのような知を『物類品隲』によって編集しようとしたのかを考察していく。

3. 『物類品隲』に記述された薬品会の経験と知

3.1 薔薇露から繋がるヨーロッパの知

『物類品隲』巻一の冒頭に登場するのは水部であり、解説されるモノは薔薇露²⁴⁵である。この水部には薔薇露しか載っておらず、水部は薔薇露の為だけに設けられた分類であり、また水部の為に薔薇露が選抜されたと言ってもいい。『本草綱目』のように「雨水」や「露水」でもなく、また『大和本草』のように「熱湯」「浴湯」でもない。薔薇露という一読しただけでは何か分からない外国のモノから『物類品隲』の解説は始まり、薬品会の出品物は登場する。

薔薇露とは和名バラノツユであり、紅毛語はローズワートルである。そして紅毛人は刺刺があるものをローズといい、ワートルは水であると解説は進む。そして「此ノ物ランビキヲ以テ薔薇花ヲ蒸シテ取タル水ナリ」とあり、薔薇露とは人力によって薔薇から蒸留される香水であることが分かる。完全な天然物ではなく、天然由来ではあるが人工のモノが薬品会に出品されている。

そして解説は『本草綱目』の著者である李時珍も牆藋の項目で番国に薔薇露があることを指摘しているがそれは花上の露水であるとする。『物類品隲』では李時珍も薔薇露の実体を知らなかったと書いており、古典の知識から薔薇露の正体を解明することはできない。つまり薔薇露の精製法を知っている人物が薬品会に参加していた、もしくは参加者の身近な関係の中にいたことになる。

『物類品隲』の解説によると紅毛人は常に長崎に薔薇露を持ってきていたらしい。「近世本邦ノ人亦其ノ伝ヲ得テ是ヲ製ス」とあり、既に長崎では薔薇露の製法をオランダ人から伝授されていた。非常にグローバルな経験が日本の長崎では行われており、その知識は薬品会まで伝えられたことが分かる。また精製する時には「サルアルモニヤアカ」があれば数十年は腐らないと非常に実用的な面にまで『物類品隲』の解説は切り込んでいる。そして薔薇だけではなく梅の露からも香水はできると日本での代替案まで引き出すに至る。解説は実際の精製法にまで及び、そこには「フラスコ」「キヨ

ルコ」などのオランダ語が飛び出してくる。

「薔薇露」は東都薬品会の出品物の中でもかなり珍しいモノであり、人々の興味をかき立てた出品物だったのだろう。そして薔薇露のローズワートルといったオランダ語の由来を答えることができ、『本草綱目』にも載っていない製法や保存方法に至るまでの知識を備えた人物が薬品会に出席しているのである。それは一人ではなく複数の人間の知識を繋ぎ合わせた結論かもしれないが、薬品会では西洋の知識がモノと共に伝えられたことが分かる。

そして薔薇露の項目の最後には「サルアルモニヤアカ、キヨルコノこと各条ニ詳ナリ」と書かれているのである。つまりサルアルモニヤアカとキヨルコも東都薬品会には出品されている。そしてその項目へ『物類品隲』は誘導しようとしているのだ。外国の慣れない言葉で読み手の興味を煽り、ページを巧みにめくらせようとする源内らの思惑にのせられて、今度は「サルアルモニヤアカ」と「キヨルコ」の解説を覗いてみる。

サルアルモニヤアカは硃砂²⁴⁶（塩化アンモニウム）であり、石部に収載されている。『物類品隲』の硃砂の項目ではオランダ語ではサルアルモニヤアカというかと解説したうえで、その形は鹵鹹に似ているとする。鹵も鹹も塩を意味する言葉である。これが薔薇露の香気を保存する役割を果たすそうだ。そして硃砂そのものの製造法まで解説は及ぶ。それは焰消などの薬でもって製造されるらしく、製造法も伝わっているとされている。

ここで「紅毛通こと檜林十右衛門」と固有名詞が登場する。そして十右衛門曰と、藍水門下と十右衛門との会話が『物類品隲』の中で再現される。十右衛門によればサルアルモニヤアカは二種類あるらしく、一つはいわゆる蛮国に自然に生じ、もう一種は自然に生えるものは少ないそうだ。その為、このもう一種類を得るためにオランダ人は他薬から升鍊する。その気味効用は自然に生じるものと同一だそうだ。

詳しい製造法は書かれていないが、オランダ人がサルアルモニヤアカに抱えること情が明らかになる。これだけの情報をオランダ人から引き出す十右衛門の語学力の高さと、オランダ人と築いている円満な関係の一端が『物類品隲』の記述からうかがえる。

そして自然には手に入らない種を得る為に、オランダ人は焰消などからサルアルモニヤアカを升鍊することにまで十右衛門の知識は及んだことを示す解説が続く。海外

のモノこと情やそれに伴う技術など、人間とモノの関係について『物類品隲』は記述する。これは当時、通詞を介した西洋のモノと知識の受け渡しがあったことを感じさせる解説であり、本草学者らにとって非常に近い場所に「西洋」は人間やモノという実体を伴って存在していたことが分かる。

次に「キヨルコ」²⁴⁷である。これは木部に収載されており、コルクのことである。これは「紅毛語壘ノロヲポロツプト云。故ニ和人聞誤テ此ノ物ヲホロツフト称スルハ誤ナリ」と解説されている。紅毛人は壘（ビン）の蓋をポロツプと言い、それを聞く環境にいる和人（日本人）がいた。そしてホロツフ（壘の蓋）＝キヨルコ（コルク）と取り違える日本人もいたようである。江戸時代はオランダ語と接する機会が多く、オランダ人たちの生活の中に現れる言葉と実際のモノを一致させようとする努力をしている人々が一定数いたことが分かる。そのオランダに対する知識の真偽を質すことにも薬品会は一役買っており、『物類品隲』はその知を記述する。

この薔薇露から繋がっていく一連の解説から分かるのは、薬品会とは限られた人間達だけに共有されていた知識が「開放」されていく場だということだ。それまでは長崎でしか得ることのできなかったモノとその知識が、薬品会の会場で大勢の参加者に伝えられていくのである。また日本のローカルな場所の情報や、外国の人間達が培ってきた製造法や採取法など、これまでは特定の人間しか知らなかった経験や知恵も会場では開放され、多くの人々に共有されていくのである。それは実際のモノを目の前にした視覚による経験を通じて伝搬していくものであった。

またポルトガル産の出品物として雲母²⁴⁸がある。ポルトガル産の雲母のほかにも参河吉良村、河内道明寺山中産、讃岐良野産が出品されており、それぞれ上品、中品、下品であると品評が下されている。雲母は和名がキララであり、オランダ語ではアラビヤガラアストという。『物類品隲』には「アラビヤハ国ノ名ナリ。ガラアスハ硝子ヲ云」と名の由来が解説されている。アラビヤという新たな国が薬品会には登場した。莞菁もオランダ語ではスパンスフリイゲといい、スパンスは国の名であると解説されている。薬品会ではこうやって新たな「国」を、モノと言葉を通じて発見していた。薬品会は「発見」の場でもあった。

粉霜²⁴⁹もポルトガル産の出品物である。オランダ語ではメリクリヤルドーリスという。これは中川淳庵の知識である。そしてこれまでと同じく「メリクリヤルハ紅毛人水銀ヲ云、ドーリスハ殺スト云詞ナリ。水銀殺トハ水銀ヲ焼製スルヲ云ナリ」とオラ

ンダ語の構成について分析する。この粉霜の他にもカナノヲルではオランダ語はブルートステインといい、ブルートは血でステインは石であるとし、ロートアールドは赤色をロートと言ひ、アールドが土であると解説される。粉霜の解説の最後に「蛮人ノ語脉此ノ類多シ」とあることから幾つものオランダ語と接する中で、言語を構成する一定のパターンを源内らは把握するに至っている。

淳庵は後に玄白とオランダ語を翻訳し『解体新書』を出版するに至る人物であり、その語学力は言葉の構成を判別できるレベルに達していた。その知識は藍水一門の間でも一目置かれるものであり、源内らにもその知識は共有されていたことが分かる。

このように『物類品隲』には「紅毛産」「紅毛語」「蛮種」「蛮国」といったヨーロッパを意味する言葉が頻出し、また「紅毛人持来ル」というようなオランダ人との交流を感じさせる表現も多い。貿易という公務の一方で薔薇露のような私的な品の個人的な譲渡も行われており、それが本草学者へと伝わり薬品会へ出品される。薬品会とはこれまでの経験から得られた知識とモノの伝搬の成果が結実する場であり、その様子を『物類品隲』は編集している。

3.2 金剛石から広がる東西の知

金剛石²⁵⁰は藍水の出品物であり、蛮産である。これまでの解説のパターンならば蛮語での呼び名が書かれるはずである。しかし源内らは、まず梵語での呼び方である跋折羅や『西域記』に記載されている伐羅闍などの呼び名を中国古典から見つけ出して解説している。その後、『抱朴子』『玄中記』『(晋の武帝の時代の)起居注』『維摩経』などの古典の解説を参考にすることで、オランダ人が持ってきたギヤマンこそ、これまで跋折羅や伐羅闍と呼ばれてきた金剛石と同一のモノであると最終的に結論づけている。古典の解説とモノの実体を照らし合わせながらの同定作業が薬品会では行われており、『物類品隲』は未知が既知へと変わっていく過程を詳細に綴っている。

参考にした文献として挙げられている古典は、本草学書でもなければ技術書でもなく医学書でもない。『抱朴子』は神仙や養生などの観点から道教の実践理念を説くものであり、『玄中記』は中国の怪異に関する話題が豊富な博物書だ。『起居注』は晋の武帝の時代に関する歴史書であり『維摩経』にいたっては大乘仏教の經典である。

薬品会に関わった人々の認識の媒体は限りなく現実的で実践に裏打ちされた薬学や医学だけではなく、歴史や宗教にまで及ぶ幅広いものであったことがうかがえる。彼

らの知識の源泉は実用に限られた本草学や医学だけではなく、1000年以上前から伝わり続けた宗教理念と歴史意識が構成する世界観にまで及んでいた。それらの本から参考にした解説とは形状や産地だけではなく、人が鉄椎を撃っても金剛を傷つけることはできなかったが羊角を使えば砕けたという過去の経験や、晋の武帝に金剛宝として献上されたことがあるなど、人間と金剛石の権力まで交えた関係にまで及んでいる。

『物類品隲』は多くの分野の古典を幾つも参照することで視点の座標を固定することなく、出品物という実物を通じて人とモノの歴史を実感させる。また薬品会に出品された実際のモノは古典の真偽を判定するだけではなく、これまで古典の中でしか知らなかったモノに現実感を与える役割も果たしていることが『物類品隲』からは分かる。梨春が序文で東洋のモノでもって西洋へと切り込もうとしていたが、まさに今回、東洋の古典からの知識という概念でもって西洋からの出品物を解明したのである。「金剛石」という概念を実際の「金剛石（ギヤマン）」によって理解し、実物の「金剛石（ギヤマン）」は、それまで古典の言葉の上でしか知らなかった「金剛石」という概念を実体化させた。薬品会の中で東洋と西洋が出会い、概念と実体は互いに連動することで新たな知へと昇華されていく。概念が実体化していく様子が『物類品隲』には綴られ、また西洋と東洋という巨大な空間に対する学者たちのまなざしが文中からは溢れ出す。

しかし源内らはただ古典の解説とモノを一致させて喜ぶだけではない。西川如見こと西川求林斎（慶安元年（1648年）～享保9年（1724年））の説にまで金剛石の解説は及ぶ。如見はギヤマンはデヤマンとも云うし、その色は紫赤が多かったと語る。今回の薬品会で出品された金剛石は白石英に良く似ており白かった為、源内らは如見の時代に長崎に來たギヤマン（金剛石）には赤紫色のものが多かったのだろうと推測している。一つのモノが持つ長い歴史を古典によって俯瞰した末に、現代の貿易品の変遷に解説は至る。『物類品隲』はモノを中心に広がる歴史の渦も編集し、また日本を俯瞰しようとしているのである。

3.3 石髓から見えるマクロとミクロ

モノを認識の媒介にして海外を見つめ、日本を俯瞰している様子が窺える解説は金剛石の他にも食塩²⁵¹がある。印塩は獸等の形を作ったものをいうなど塩の製造法もいくつか源内らは知っているようだが「日本ハ四方海ニ近キ国ユエ製スルモノ希ナリ」とする。そして「紅毛人持來モノハ種類多」らしい。それを裏付けるように食塩の

項目には崖塩と自然白塩が分類され、戎塩の項目には青塩と赤塩が分類される。

そして通詞の吉雄幸左右衛門が出品した光明塩²⁵²がある。これらが「紅毛人持来ル」ポルトガル産の塩類である。幸左右衛門は十右衛門に続く二人目の通詞だ。薬品会の会場に直接参加したかどうかは分からないが、長崎の通詞も薬品会には関心を持っており、藍水一門と協力関係にあったことが分かる。

崖塩や自然白塩はポルトガル産のものだけではなく日本産のものも出品されている。崖塩²⁵³は下野塩谷郡塩湯産のものが出品され、自然白塩²⁵⁴は讃岐山田郡瀉本産と讃岐小豆島土ノ庄産のものが出品されている。そして源内らはそれぞれの形状の違いを確認している。二つともポルトガル産と異なる点はなかったが、たとえ同じモノであっても産地が異なれば互いを見比べるのである。

同じ名称のモノが出品されているにもかかわらず、産地が異なるために細かい議論が交わされた様子がうかがえるのは石髓である。石髓²⁵⁵の項目では、まず石髓には二種類あると解説される。その一種類は『仙経』を引用し「石中空処ニ生スルモノ」であるとし、もう一種類は『本草綱目』に書かれた「臨海華蓋山石窟」に生じるものだ。もう一種類は土地の人々が採取して「澄淘シテ泥ノ如丸ニ作」ったものである。そして薬品会に石髓として出品されたのは下野境野産のものと、越前大野郡打浪村産、そして下野阿蘇郡山管村産のものである。下野境野産の出品者は官医の山田氏であり、山田氏曰く土地の人々が石を割り、その石の中にあつた水が流れ出してきて固まったものがこの石髓だそうだ。これは『仙経』に載っていた石髓に一致する。しかし出品された石は白く、『仙経』に書かれた色は青い。源内らは『本草綱目』では黄色や白の石髓があるとされているため「恐ハ石ノ色に随テ此物モ亦色ヲ異ニスルカ」「然ル時ハ色ハ一ナラザルト見エタリ」と推測している。実際のモノと複数の古典の知識を照合しながら多くの知の可能性を引き出していく。過去の知を下敷きにし、活用しながらも、更にその先に行くのである。それは知の継承でありながら知の進歩を担う行動であり、知の更新活動だといえる。

また越前大野郡打浪村産のものは「郡上候ノ医官沢東宿」の出品であり、出品者曰く深山の溪谷から流れ出てきた水が自然に凝結したものがこの石髓だそうだ。または草木の枝葉などの形にそって凝結する場合もあるらしい。これは石の中から流れ出した水由来の石髓ではないため『本草綱目』で解説された石髓と同じものである。そして最後の下野阿蘇郡山管村産の石髓も水中に自然に決するものであるため、『本草

綱目』で解説された石髓である。源内らは下野産のものが二種類あるが重複品とするのではなく、各々の産出の経緯などを詳しく調査したうえで「境野ノ産ト出ル所一様ナラズトイヘドモ、皆石髓ナリ」と結論付けている。ここまでは過去の知によるモノの分類であり、知の継承でしかない。

しかしここから「国倫按ズルニ」と薬品会の会主でもあり『物類品隲』の編集者でもある源内の見解が開始されるのである。

源内は鍾乳石・孔公孽・殷孽・石牀・石花・土殷孽・石髓の七種は全て石液であるという。そして金銀を掘るか、もしくは石を穿った場合には中から石液が滲み出し、これが下垂して固まったものが鍾乳石であるとする。これは孔公孽・殷孽・石牀・石花も名は違うが同一物だとしたうえで、土殷孽は石液が土の中で固まったものであるとする。では石髓はなにかというと、石の中に稀に空の部分があり、この中に充満した石液が流れ出し、風日によって石となったものが石髓だそうだ。下野境野産のものはこのパターンの石髓だと源内は解説する。では越前打浪産と下野山管村産のものはどのようなものかということ、深山幽谷で石液が水と共に凝固したパターンの石髓であるそうだ。「今三所出ル所ノ石髓ヲ見ルニ其ノ質殷孽・孔公孽ト全ク同物ナリ」と源内らは三種の石髓をそれぞれ詳しく吟味し、そして出品者の経験と知識を統合することで新たな「石髓」の知を獲得するに至っている。

薬品会に関わった人々は実際のモノと実体験に基づく証言によって、過去の知を発展させ、現代の自分たちの知へと更新していくのである。『物類品隲』はそのような認識と実践の運動による知の活動を記述していく。

更に石髓の解説は「美濃国ニ産スル日ノ糞、月ノ糞ト称スルモノ」へと移っていく。これは玉の中にある乳水が螺旋の中に入り、凝結してできたものであると、別の地域にある石髓の近縁種の話へも至る。もし薬品会がモノの真偽を質し、古典の真実を追求するだけの場ならば源内の見解は必要なく、また別の土地の別のモノの話が上がることはない。『仙経』や『本草綱目』からの知識を下敷きにしながらも、石髓の形状や発生する原因などを探ることで下野の境野と山管村、そして越前大野郡打浪村という非常にローカルな日本の土地の自然環境を知り、過去の知を自らの知へと更新していく。そしてその知は更に別の土地とモノの理解へと繋がっていくのである。モノは類似性と差異性の表の中に配列され、その枠をずらすことでモノが嘗て自生していた環境の差を見出していく。モノは環境を読解するテキストともなっている。

薬品会の主催者や参加者らが見つめ、見出そうとしていたのは土地の環境がモノに与える影響という自然のメカニズムである。また求めていたのは一つの知識と見識が新たな経験と知見を呼び起こしていく知の派生であり波及であった。一つの結果が幾つもの方向へと伝搬していく知の網目構造が薬品会を通じて浮かび上がり、モノと自然、そして人間が構築する関係の渦こそ『物類品隲』が記述し、編集しようとしているものである。

ポルトガル産のものまで出品されていた第五回東都薬品会では日本国内のみならず、外国の環境にも視線は注がれている。たとえば胡椒である戎塩²⁵⁶では「凡ソ中華ニ産セズシテ、蛮国ヨリ来ル塩ハ皆戎塩ナリ」と解説されている。「日本ハ四方海ニ近キ国ユエ製スルモノ希ナリ」と塩を製造する必要のない日本の環境を理解した上で、中国からは戎塩は採れないなど、モノとそれに関わる知識は日本と外国の違いまで明らかにしていく。その視点は日本が世界地図の中で占める位置と、その座標ゆえの特徴まで見極めるものであり、日本の独自性を世界地図の中で自覚していくに至る。

モノから環境の違いを見出し、モノへの影響を同時に考察するのはこれまで出版された薬品会の目録解説書である『文会録』や『楮鞭余録』でもみられた視点である。薬品会ではモノは必ず産地の環境とセットとなっていた。その産地とは讃岐山田郡瀧本や讃岐小豆島土ノ庄、越前大野郡打浪村、下野山管村などのように非常にローカルな土地にまで及ぶものである。薬品会に関わる人々の好奇心は日本のへと切り込み、目録解説書の中で日本は細分化されようとしていた。

『文会録』や『楮鞭余録』でも漢産や唐種、紅毛産や琉球産といった外国のモノが出品され、日本だけではなく海を越えた先にある「世界 (world)」が抱える人間や自然環境という巨大なものへと学者達の視野は広げられていっている。しかし同時に日本の庄や村という非常に小さな「共同体(community)」の内部にある自然や知識にも学者達の視界は開かれていくのである。中国や朝鮮、オランダといった外国からの輸入品と知識は、同時に日本を人とモノの両面から客観視させ、可視化させていく。薬品会とは world としての世界を俯瞰しながら、その世界を眺望するまなざしを更に周縁からみつめるという二重の運動が同時に行われる場所であり経験であった。

世界が巨大化していく中で、日本は更に細分化されていく。『物類品隲』の中で日本はもはや藩の集合体ではなく、一つの国家でありながら、無数のモノと人が自然のメカニズムと異なる環境の中で相互に関係し合う渦の場である。世界へのまなざしは同

時に日本を発見し、マクロへと拡大されていく視界はミクロをクローズアップすることにも繋がっていく。このような知の構造とまなざしの姿を『物類品隲』はモノの解説という方法で編集している。

3.4 モノから広がる関係の渦

環境だけではなく、人間の生活にも本草学者のまなざしと『物類品隲』の記述は向かう。玄白が出品したポルトガル産の篤耨香²⁵⁷はオランダ語でテレメンテイナというそう。これは『本草綱目』では真蠟国で採れる樹の脂であるとされている。土地の人々は夏に火で樹を炙ることで樹液を溢れさせ、それを固めて篤耨香とする。その香は夏に融けだし、冬に結する。このような『本草綱目』の解説を引用することで源内らは篤耨香＝テレメンテイナと結論づけている。モノのメカニズムを自然と共に考察し、夏に火を樹で炙って樹液を採取するという民俗にまで考察は及んでいる。

日本から採れたモノでも民俗的見解は数多くみられる。先述した自然白塩の山田郡産の項目には「方言ジオンシホ、又テントウシホト云。亭戸鹵地ニ海水ヲソソギ日ニ晒スコト数次、霜ヲ生ズルヲ待テ括取、海水ヲ以テ淋滲シタルヲ名テタレシホト云。是ヲ池中ニ貯置ハ其底自然ニ凝結シタルモノナリ」と書かれており、山田郡では状態の変化に伴い自然白塩の名称が変わることと、如何にして海水や池を利用して自然白塩を採取しているかが書かれている。

その他にも越後蒲原郡如法寺村産である石油腦²⁵⁸では「水上ニ浮ヲ土人カグマト云。草ニ付取テ器中ニ貯ヘ燈油ニ用ウ」とあり、地油は「讃岐阿野群川東村奥林ニ石壁アリ。高数丈地ヲ去ルコト丈余ニシテ、水、石間ヨリ摘出ス。内ニ乳汁ノゴトキモノ流出ス。土人石ノ乳ト号ス。火傷ニ塗テ治スルコト神ノゴトシ」と解説されている。この地油の産地は源内の出身地の讃岐で、出品者は源内の知人である三好喜右衛門だ。そして「奥林ニ石壁アリ」という地域の細部にまで切り込んだ解説であることから、出品者である三好もしくは源内自身が実地調査し、見聞した記述であると思われる。

薬品会の主催者、出品者、そして参加者らは日本のローカルな土地に実際に赴いている。そして調査を重ね、自然とモノの関係を人間の生活と共に記述していった。細分化されつつある日本は無数のモノと人と共に詳細に編集されていくようになる。それは薬品会の現場では外国のモノや知識を見つめるものになりながら、同時に見つめられるものへと変わっていくのである。

ポルトガル産の胆八香²⁵⁹では「以上紅毛人カスハル口授ノ効能ナリ」とある。源内らはカスハルというオランダ人から直接、胆八香の使用方法を教えてもらっているのである。胆八香はオランダ語でワマリヨレイヒということ、そして「悪血ヲ去リ肉ヲアゲ一切乾タルヲ潤シ筋ヲノバシ痛ヲ和ク。之ヲ服シテ痲疾ヲ治ス」こと「紅毛人平常ノ食用トス」ことをパスカルから教えられたようだ。薬として用いながら食糧でもある胆八香の実体が、実際の経験者の言葉によって解説されているのである。薬品会とは書物を介さない実体験による生の知識が伝搬していく「現場」であり、物類品隲は経験者の生の声を伝えるものともなっていく。

次に胆八樹²⁶⁰が解説されるのだが、まずは南蛮諸国に生えているという『本草綱目』の解説を引用する。その解説と出品された胆八樹を照合したところ、「則此ノ実ノ仁ヲ取テ油ニ搾リタルモノヲワマリヨレイヒ和俗ノ謂所ポルトガルノ油是ナリ」ということが判明した。胆八樹の実から油を搾ったものが胆八香であり、それがポルトガル油なのである。『本草綱目』の解説を引用しながらもそこから更に一步、知識の幅を源内らは広げるに至る。

この胆八樹は紀伊産であり紀伊の方言ではツグという。湯浅深専寺内に大木があると『物類品隲』では解説されている。また「葉落ル時至テ鮮紅色愛スベキ」と源内の主観が混じっている。「庚辰ノ歳予紀伊ニ遊テ始テ是ヲ得タリ」とあり、源内は宝暦10年（1760年）に紀伊に行った時に胆八樹を手にいれ、その元でもある大木の形状を確認し、葉が落ちるのを観察したのだ。これは第五回東都薬品会の2年前の話である。

そして源内らは蛮産の実とこの深専寺で得た実を比較した。その結果「蛮産ハ大二、和産ハ小ナリトイヘドモ全ク同物ナリ」という判定を下す。そしてある人が橄欖の一種ではないかという説を出したらしいのだが、それは「甚非ナリ」と一蹴している。実体験から得た知が薬品会に求められているのである。その経験上の知と実際のモノでもって世界が解読されていく中で従来の知が更に進化していく過程こそ源内らが本草学を学ぶにおいて求めた姿勢であった。

そして源内は宝暦12年3月に江戸にやってきた紅毛外療のポルストルマンに直接会い、胆八樹の実物を見てもらった。小川悦之進が通訳を務め、「蛮人ハ実ヲ酢ニ漬テ是ヲ食フ、味酸甘ナリ。又和俗統随子ヲポルトガルト称スルハ大ナル誤ナリ」という知識が得られたことが『物類品隲』に記されている。このような経験が薬品会には反映

され、知識は開放されていった。紀伊でのモノと経験が『本草綱目』という中国古典の解説に補完されるだけでなく、言葉であった「胆八樹」の概念を実体化させている。そしてモノを通じて西洋のモノと環境、そして人間の風俗を源内らは垣間見るに至るのである。モノは中国やいわゆる蛮国などの外国への扉でもあった。源内が薬品会以前に既に紀伊で実地調査を行い、東都でポルストルマンから知識を得ていることから、中国古典も合わさって薬品会は外国の言葉が飛び交い、風俗が語られ、日本産のモノの隣に中国や朝鮮果てはオランダやポルトガルといった外国産のモノが展示される多国籍の空間となっていく。実際の経験こそ薬品会で貴ばれる知識の源泉であり、『物類品隲』が求めた記述であった。

『物類品隲』は決してモノの知を単独で記述しようとはしていない。『物類品隲』では無数のモノ・人・自然が中国古典の知識だけではなく経験によって形成された認識の枠組みに嵌め込まれていくことによって、各々の個性や独自性が互いの関係と共に明らかにされていく。『物類品隲』はモノとそれに関わった人間たちの経験を中心に置き、彼らの生の声を活写しながら、日本を隙間なく覆いながら海を越えて世界へと至る関係の網を編集しているのである。

3.5 スランガステインを巡る人々

源内の紀伊行きやポルストマンとの会談など薬品会以前の経験が『物類品隲』には数多く解説されている。その一つとして龍骨²⁶¹の解説がある。

薬品会には讃岐小豆嶋の龍齒と龍角が竜骨として出品されている。そして龍角には蛮国産のものもある。これはスランガステインといい、オランダ人が稀に持ってくるものだと解説されている。福山舜調によれば『薬性纂要』に載っている吸毒薬がスランガステインだそうだ。

そして藍水が長崎に遊学した際（宝暦 8 年）に「吉雄氏 檜林氏」にスランガステインと龍角の関係を質問したことが書かれている。吉雄氏（幸左右衛門）や檜林氏（十右衛門）は既に『物類品隲』に登場している通詞である。特に幸左右衛門は自ら光明塩を出品している出品者だ。『物類品隲』には数多くのオランダ人が長崎に持ってきたという蛮産のモノが出品されており、また巻之五には長崎産の香鼠が解説されているが、これらの出品が叶い、数多くの西洋の知識が薬品会で開放され、『物類品隲』に解説されるに至ったのは藍水の長崎遊学（もしくはそれ以前に行われた源内の長崎遊学）

がきっかけとなって生まれた人脈があったが故だろう。薬品会以前から培われた人と人の関係が薬品会を（特に第5回東都薬品会を）盛会へと導いた。つまり、今までの薬品会よりも多くの出品があり、大勢の参加者らの知識や経験が活発に議論された。そして通詞たちがモノを出品し、多くの知識を藍水に提供していることから、通詞達の間にも既に外国という未知の国を実際のモノや人間の実体験、生活などから知りたいという意欲があり、既にオランダ人相手に実践されていたことが『物類品隲』からうかがえる。

そしてオランダ人の外科医であるパウルが宝暦10年に江戸に来た際、藍水も龍角についてパウルに質問したことが書かれている。源内だけではなく藍水も直接、モノの知識を得るためにオランダ人に会いに行っていたのである。その結果、龍角はスランガステインであることが証明され、オランダ人たちは「本邦ニ産スルコトヲ聞テ大ニ驚」いた。オランダ人の反応にまで解説は及んでいる。

『物類品隲』は当時の日本や海外で実際に生活し、源内らと言葉を交わし、モノを介して交流していた人間達の生活だけではなく感情まで記述されている。この中には薬品会だけではなく、薬品会を中心にして集った人々の息吹がつまっている。それが他の本草学書との違いの一つだ。『物類品隲』からは18世紀中葉の本草学者たちにモノを中心にした交流が如何なる影響を与えていたのかが「人間」の声と情熱をもって伝えられる。

そして「吉雄氏訳ヲ伝フ、証トスベシ」とある。「証トスベシ」とは非常に強い口調である。金剛石の解説でも考察したが、『物類品隲』では多くの中国や日本の古典を引用し、参考にしてモノの実体を解明し、理解した様子が記述されている。薬品会では言葉はモノを記述するだけではなく認識する「目」となっているが、薬品会に関わる人々はモノを古典の枠の中でだけで認識し、確認しようとはしていない。また古典の記述を全て鵜呑みにし、自分たちのモノへの解説に説得力をつけるために古典を利用しているわけでもない。

『物類品隲』には「非ナリ」や「誤ナリ」、果ては「妄説ナリ」「削去ナリ」という言葉が頻出する。源内らは薬品会を開催するにあたり、参加を求める引札を全国に配っているが、その中で学者たちが「耳ヲ貴ビ目ヲ賤」していると書いていた。源内らは耳学問に惑わされることもなければ古典の権威を借りることもなく、実際のモノからの情報と実体験に基づいた知識を尊重し、信頼しようとしているのだ。

既にいくつか源内らの実地調査の様子は見てきたが、この龍骨でも「漁人網中ニ得タリト云」と聞き取り調査もしていたことが分かり、また「之舐舌ニ着之ヲ用其ノ効驗本草ノ主治ト合ス。是真物疑ベキナシ」と実際に舐めることでモノの真偽の判定を下している。

実証に基づく批評精神は『大和本草』から出現したものであり、『物類品隲』の際立った特徴ではない。しかしその益軒も『物類品隲』では批評され、また龍骨の項目では恕庵に対し「松岡先生、是ニ雷同シテ真ナルモノ絶テ稀ナリト云ヨリ、声ニ吠ルノ徒、管見ヲ以テ弁説ヲナス。皆夏虫氷ノ論知ズ、挙テ論ズルニ足ズ」と中国古典に雷同し、狭い見識の弁説であるためにここで引用する価値もないと厳しい批判を与える。ここでは感情の昂ぶりすら感じさせる。これを書いたのは源内だろうが藍水や他の編者たちによって削除されずに済んだところを見るに、感情の昂ぶりすら実証に値する経験さえあれば認められるものであったことが分かる。

「吉雄氏訳ヲ伝フ、証トスベシ」という記述の他にも「〇〇曰」など『物類品隲』では実際に藍水や源内らと議論を交わした人々の実名が非常に多く使用され、発言元が参照できるようになっている。多くの人間の「実践」と「実証」によって得られた見解と知識が伝搬し、そこから新たな事実や真実が明確になっていく場こそ薬品会であり、その昂ぶる感情や情熱を世間に伝える本こそ『物類品隲』であった。そこでは実体験に基づく実証により古典の真偽が詰問され、自らに近しい日本の本草学の雄の経験や知識までが批評される。そして実証によって新たな知が生み出されていく様子が編集されていくのである。

3.6 芒硝から繋がる歴史

第五回東都薬品会を開催するにあたり全国に回した引札の一文には「方ニ今本草学盛ニ世ニ行ルト雖モ深ク好ム者蓋シ少シ。故ニ諸国産物未ダ盡ク出テズ」とある。幕府の国家政策や園芸趣味に伴い隆盛を極め始めていた本草学であったが、藍水らのようなプロの学者の目から見れば、未知のモノを追い求めると同時に自然を窮め、学問を追究しようとする人材は少なかった。藍水一門は自らの好奇心や知識欲を満足させるに留まらず、薬品会の開催によって本草学に興味を持つ人間を増やそうとする思惑がある。そして薬品会が学問全体のレベルを向上させる可能性を考え、期待している。

ここから藍水一門が薬品会を開催するに至った動機の一つとして本草学の活性化と

探求心溢れる学者の育成が挙げられる。「薬品会」という場が参加者らの好奇心や知識欲を高めるきっかけとなり、本草学という学問全体の転換点となることを藍水一門は求めているのだ。この目的に関わる具体的なエピソードが『物類品隲』の芒硝²⁶²の項目で解説されている。

まず源内が「予辛巳ノ秋、家僕ニ命シテ薬ヲ伊豆国ニ採シム。留ルコト三月余、産物ヲ送致スモノ数十度」と念に念を入れ、時間をかけて実地調査と実物による親試実験を繰り返していたことが明らかになる。

源内は藍水を通じて幕府に芒硝の製作を報告し、ついに官命によって源内自ら伊豆へ至ることになる。そして郡官の「江川君」²⁶³の助けを借りながら数日で芒硝を「製成」し、これを藍水が幕府に献上した。源内は自分の業績を世間に誇りたかったと考えることもできる。しかし『物類品隲』には源内の経験だけではなく藍水や淳庵、そして善光寺から錦黄耆を得たという青山仲菴の経験も記述されている。その他にも阿部将翁による甘草の採取など、源内とも薬品会とも直接の関係はない学者達の活躍や実績も記述されている。そして「官ニ献ズ」「台命アリテ」「官園ニ植」などモノと政治、そして幕府と本草学、ひいては本草学者と関係の歴史を示唆させる表現が『物類品隲』には頻出するのだ。またこの芒硝の項目では源内が製作した芒硝を藍水を通じて幕府に献上した話題の後に、何故源内が伊豆に興味を持ったのかが明かされるのである。

源内が芒硝を手に入れるきっかけとなった出来事は、伊豆に住む鎮惣七が源内を訪ねてきたことだ。惣七は源内とは面識がなく、また名のある本草家でもない。また武士身分でもない。農夫なのである。しかし惣七は「其ノ人能ク本草ヲ言」と源内が思うほど非常に博識な人物だった。不思議に思った源内はどこで教えを受けたのか聞いた。惣七は「本邑山海之間ニ崎嶇シテ。吾済野人豈ニ能ク書ヲ読而学ヲ為知也。往歳誠所並河先生有三島駅ニ寓ス。経ヲ講スル之暇又本草ヲ授ク」と山海の間に崎嶇したる僻地では書を読み学問を修めることを知らなかったが、並河先生に寓し経学を講し本草学を授けられたと答える。そして「農夫・農人多ク鳥獸草木之名状臭味ヲ識テ以テ予セ救荒之用ニ不可不」と農夫たるもの本草を学び、鳥獸草木の名状や臭味等を識別しておくことは荒年の備えになると惣七は語る。

惣七がいう「並河先生」とは並河誠所のことだ。並河は伊藤仁斎に師事した儒学者でありながら地誌にも興味を持ち、『日本輿地通志畿内部』を発刊した地理学者でもあ

る。この『日本輿地通志畿内部』は日本全国を網羅することが目標であったが、実現したのは畿内だけであった。しかし『日本輿地通志畿内部』は古文書や伝承などの史料を実際に集めて回り、六年にも及ぶ実地調査の末に完成した地誌である。そして江戸時代最初の幕撰地誌と見なされ、後の地誌編纂事業に多くの影響を与えた。非常に画期的な活動を行い、歴史的な意義の大きい業績を残した地理学者は本草の知識にも秀でており、それを伊豆の農夫らに伝えていたことが惣七の証言から分かる。それは結果として荒年の備えにもなり、農夫らの生活の質の向上に大きく貢献するに至った。

薬品会以前に農村部にまで本草学は既に浸透し、それは生活に多大な影響を与えていたことが分かる記述だ。既に青木昆陽や建部清庵の働きによって救荒書はいくつか出版されており、救荒の側面から本草学を究めていこうとする動きは起こっていた。しかしその影響は幕府の高官や医官、藍水一門のような知識人そして民間の薬種商や植木屋などの本草学に関わる生業につく商人のみならず、農村部のかつては書を読むことすらなかった「農夫・農人」にまで及んでいるのである。

実地調査による成果を残した並河の下で、「生活」という実経験の中で農夫らは本草学を学び続けていた。彼らは源内らが薬品会と『物類品隲』を通じて啓蒙、普及させようとしている「徒ニ耳ヲ貴テ目ヲ賤ニス」ことのない実践に基づく本草学を既に「生活」という実体験の中で学び続けているのである。その知識は荒年を乗り切るほど実用的なものでもあった。そして彼らの本草学は生活の知恵を増やし、生活の質を向上させるだけに留まらない。惣七のように当時すでに一定の知名度を誇っていた藍水の弟子である源内をわざわざ訪ねてくる人間も生まれたのである。

惣七の本草学は伊豆という生活の共同体に留まるものではなかった。知は外部に開かれたものとなり、都市や地方を伝搬していく。知を実生活に生かしながらも実利に拘ることなく「本草ヲ好ム」惣七の登場は、源内らに芒硝に代表されるような「珍品・奇物」の発見を促しただけではない。実見に基づく本草学を実践しながら実用し、そして知を派生させていく行動力を伴う学問への姿勢は、源内らが薬品会によって普及させようとしていた本草学の姿である。惣七は民間のそれも農村から登場した新しい人間であり、源内らが薬品会でもたらしたかった本草学の可能性を体現（実証）してみせた人材でもあったといえよう。

その感動を『物類品隲』では「然雖並河先生無ハ者鎮氏ハ一農夫ノミ。斯レ焉ソス

ヲ取ン。嗟乎君子人ヲ教其ノ及フ所ノ者遠カナ」と表現している。並河がいなければ惣七は農夫のままである。これ取りも直さず並河先生の教えに基くところと、その賜を源内は深く喜んでいる。君子の教えが如何に遠くの人間へと伝搬し、その恩恵がどれだけ貴いものかを『物類品騭』は感謝と感動を込めて語る。

これは源内の経験であり、そして並河から至る惣七の知の体験でもある。本草学という学問が秘めた可能性と広範に渡って繋がれていく知と人の関係を『物類品騭』は示唆する。本草学の継承と知の伝搬は、嘗ては書も読むことのなかった農夫の実生活のみならず知的生活までも変え、それは後に公命を賜うほど有益なモノの発見へと繋がるのである。

知の伝搬とは即ち知の開放である。知とは一人の君子や一つの学派が独占するものではなく、外部へと開放されていくものとなっていく。それは惣七のように人間の未来を変えるものともなり、ひいては共同体のような一つの世界を変えるものともなりうる。開放によって起こる知の刺激はその連続によって変化を起こすことを『物類品騭』は記述する。

序文でも藍水が「方ニ今本草学盛ニ世ニ行ルト雖モ深ク好ム者蓋シ少シ」と書き、薬品会とは本草学全体のレベルの向上と、本草学を学ぼうとする人間の育成を目指す場としても考えられていた可能性があった。惣七の存在は本草学によって生まれた人間の関係の中で、人間自身にも新たな変化が起こることを源内らに証明するものであった。並河から惣七に伝えられた知は更に源内らに伝えられ、芒硝の製作を実現させた。知の普及は本草学に新たな展開をもたらす刺激となり、それは世界の変化にまで至る可能性を秘めていた。源内らにとって知とはただ蓄えるものではなく、それによって世間を、ひいては世界を興すものでもあった。

この惣七は薬品会では出品物の中継地点である諸国産物取次所の一つに指定されている。産物取次所は薬品会以前から本草学によって培われてきた交友関係によって成立しているが、それは名高い学者に限られてはいなかった。

源内らは薬品会の開催以前から人間の活動と関係の構築によって知が更新されていく様子を目の当たりにしており、それを更に広範囲に普及させ、学問と人の可能性を拡大させようとしていた。実際に第五回薬品会には後に源内と火浣布を制作する中島利兵衛や、淳庵と『Anatomische Tabellen』の翻訳に挑み『解体新書』を出版することになる杉田玄白の参加が確認できる。また『解体新書』には幸左右衛門が序文を寄

稿している。

薬品会とは確かな実力を備えた有益な人材を発掘し、参加者らが自らの学究人生に新たな可能性をもたらす相手を見つけだす場となっていた可能性が高い。薬品会とは本草学に興味がありながらそれまでは無名であった人物が世に出る「きっかけ」を生む場ともなり、後々まで続く関係を繋ぐ場でもある。そしてこれまで知られてこなかった新たな知を持った人物の存在をモノの解説と共に『物類品隲』は示す。『物類品隲』はモノだけでなく人間をも表現し、その価値を発見しているのである。

『物類品隲』に記述された経験と体験の主は本草学者に限らない。墨²⁶⁴の項目では推古天皇の時代に高麗から献上されたのがきっかけで「日本ニテ墨ヲ作ル」ようになったと益軒の説を引用して解説する。そして南都の墨工である古梅園の「心ヲ用テ甚ダ精巧ヲ尽」した墨が薬品会に客品として出品されている。薬品会の出品物は自然物だけではなく名のある工による製品も出品されていた。また嘗ての古梅園の主である松井元泰が長崎に遊学し、家製の松烟煤を漢土へ帰る商人に渡したという元泰の墨を巡る経験が記述されている。この墨の項目では産地や形状、製造のみならず推古天皇から続く歴史が語られた末に江戸を生きた元泰の経験が記述される。墨の歴史の中に元泰は記述され、その経験は歴史の一部となっている。人間の経験は歴史となり、歴史を覗き読み解くツールとしてモノがあるのだ。

『物類品隲』には「推古天皇」のほかに「天武天皇」「聖武天皇」、「『日本書紀』ニ出タリ」など日本の古代の歴史がモノと共に語られることがある。これはこれまでの薬品会の目録解説書にはない記述である。しかし既に『和歌食物本草』など日本の古典や歴史に本草学を仮託させて広範に知識を普及させようとする手段は存在していた。江戸の本草学とは江戸以前から続く文化や歴史をも見つめるものでもある。

『物類品隲』にはモノの形状や製造に関する知識と共に、自然のメカニズムや人間の民俗、そして源内を中心とした当時の人々の実際の経験が記述されている。そしてそれは歴史の一部となっていく。源内らが『物類品隲』で記述しようとするのは決してモノの真実ではなく、過去の知の批評でもない。各々のモノの項目で記述されるのはモノと自然の関係であり、民俗や方言といった人間との関係である。そして薬品会に関わる人間の体験がいかに広範囲に波及し、新たな知が歴史の一部となり時代を興していくのかという実際の「出来事」が記述されているのである。

4. おわりに

薬品会は古典を朗読するだけではなく実際のモノを観察することで知を得ようとする本草学の気運に、輸入に頼りがちな日本の社会情勢への危惧が反映されることによって活性化した。本草学は時代の流れや政治の展開、学者たちの心情など非常に多くの要因が重なり合い、互いに影響し合うことによって発展した学問であることが分かる。ありとあらゆる事物と現象の相互作用を論じながら、それらの関係を構成する本草学という学問自体が、多くの影響と関係の渦の中で育まれているのである。

『物類品隲』の記述からは、薬品会がこれまで知られてこなかったモノを発見し、知識を得るだけの場所ではなく、有益な人材を発掘する場ともなっていたことが分かる。『物類品隲』にさがけて出版された『文会録』や『楮鞭余録』でもモノの産地の環境や人間の生活にまで記述は及んでいた。『物類品隲』はそこに更に具体的な人名などの固有名詞を加えることによって記述をより明確にし、またモノに関わる人間たちの関係と発生した出来事に至るまで詳細に記述している。『物類品隲』の独自性は非常に多くの人物が登場し、その活動が活写されることによって生まれる現実感と臨場感である。これは他の本草学書には無い特徴である。

薬品会の話題の中心点は名称や薬効、形状や味覚、民俗や歴史など、視点や目的と共に移動しながら増殖していく。中心が定められないがゆえに巨大な認識と実践の運動が薬品会では起こっていた。それは医師や薬種商のような旧来の本草学をフィールドとする人物もいれば、栽培技術などのメカニクな方面に関心を持つ人物もあり、オランダ人や異国といった新規の情報源に目を向ける人物も同時に存在する。この一貫性が無く、新旧が互いに乖離しそうになりながらも互いに結びつき合い、剥がれること無く関係づけあいながら知が更新され、普及していく様子を『物類品隲』は記述によって編集する。中国や日本の古典を参照しながらも実践を伴うことでその一歩先に踏み出し、当代の実情が反映されるなかで歴史と知が更新され、江戸独自のものへと本草学の知が昇華されていく「様子」を語る本こそ『物類品隲』である。

『物類品隲』では従来 of 知識と新しい知見が交錯する様子と、モノ・人・自然・国といった多くの要素が互いに連動しながら複雑な関係を築き上げていく「出来事」の様子が、当時を実際に生きる名前を持った人々の知や経験と共に記述されている。確かにモノは「水部」や「木部」のように分類され、単独で記述されている。しかしその中では名称や民俗、国や政治、人間同士の繋がりなど多くの諸要素が国も時代も越

えて編集されている。また薔薇露の部分でみられたようにキヨルコやサルアルモニヤアカの解説へとページをめくらせるような仕掛けも施されている。そして長崎の通詞とオランダ人の交流や、元は農夫だった惣七と源内が本草学を通じて関係しあうことで芒硝の製作が実現した現実など、各々の解説は単独で存在すると同時に多くの現象へと繋がり続ける編集が施されているのである。

『物類品隲』の編集は一つのモノの記述が全体へと繋がり、互いの影響関係を俯瞰し、理解するものとなる。決してモノは単独では存在せず、記述もモノごとに断片化されるものではない。『物類品隲』という書籍自体が「複雑系」の構造をとっているといえよう。

源内らが『物類品隲』によって世間に伝えようとしたのは、薬品会に集まった薔薇露や芒硝、墨などの「モノ」から浮かび上がってくる世界の諸要素の関係である。その「関係」の内部には薬品会の開催以前から培われてきた本草学の学び手たちの経験と知の繋がりも含まれている。『物類品隲』には人間とモノと世界の間で繰り広げられる「出来事」が編集されているのである。それは本草学が培ってきた経験と知の歴史の編集であり、本草学の「複雑系」の有り様を再構成するものともいえる。

『物類品隲』は薬品会の解説目録書でありながら、本草学の世界で何が起きているのかを記述と編集の手段によって編集するものである。薬品会に関わる人間の体験がいかに広範囲に波及し、新たな知が歴史の一部となり時代を興していくのかという実際の「出来事」が具体的な人名と、生の声と共に共に活写されているのである。その独自性は非常に多くの人物が登場し、その活動が活写されることによって生まれる現実感と臨場感である。

これまでの本草学は確かにモノと人の関係を論じてきた。しかしそれは歴史の中に生きて自然物を詠った歌人であり、また「野人」や「賤民」という名称で一括されるような概念としての人間であり日本人に過ぎなかった。しかし薬品会の登場によって、これまでの本草学の知は会の様子と同時に記述されるようになった。それに伴い、本草学の興味は本草学者自身にも向けられ、それに影響を与えた具体的な人間たちへの人間性や活動へと知が求める範囲は広げられていく。本草学は今を生きる人間の現実的な触感を感じさせる学問になっていくのである。本草学を取り巻いている現象もまた「生きて」おり、「複雑系」であるともいえる。その実態を『物類品隲』は写し取り、編集の手段によっても明らかにした。よって『物類品隲』自体が本草学の複雑系の構

造を構成した本草学書であるといえる。

本草学は当代を生きる具体的な活動をしている人間たちが、今、どこで、どのような知を蒐集し、何を実行したのかを知る学問へといたっていく。薬品会の登場と『物類品隲』の出現によって、本草学は人間という現象を記述するものであり、またそれらが織り成す「出来事」を知るものとなっていく。本草学は更に動的に、そして現実を反映した知を求め始めたといえよう。

次章では、人間同士の繋がりや関係にまで知の構造を広げ始めた本草学が、外部へともたらした可能性の一つを吟味していく。そしてその道程がどのような結果を伴い発展を遂げたのかを論じる。

第6章 開かれていく本草学の知

1. はじめに

薬品会と『物類品隲』の登場によって、本草学の興味の幅は大きく広がった。本草学の知は実体を備え、現実的な手触りを備えた人間へも広げられるようになった。彼らは歴史書の中で語り継がれる過去の偉人でもなければ「農人」のように一括して語られる概念としての日本人でもない。「杉田玄白」や「檜林十右衛門」「鎮惣七」といった具体的な人名を伴う人間（個人）であった。ここから本草学は個人の活動を知り、その活動の影響と発展の軌跡を記述し理解する学問であるという可能性が立ち上がってくる。それを考察する為に、本章では木村兼葭堂（元文元年（1736年）～享和2年（1802年））の存在を中心に論をすすめていくことにする。

兼葭堂は大坂の造り酒屋の主人である。本草学書のほかに書画や地図、器物などあらゆるものを蒐集する一大蒐集家として有名な人物であり、博学多才な人物として名を馳せた。また自身の書齋を拠点にきわめて幅広い交友関係を持ち、その交遊の様子は日記や書簡から読み取ることができる。

兼葭堂の本草学との関係については、兼葭堂自身が遺した「巽斎翁遺筆」²⁶⁵（以下遺筆）から明らかにできる。

余幼年ヨリ生質軟弱ニアリ。保育ヲ専トス。家君余ヲ憐テ草木花樹植ルコトヲ許ス。親族ニ藥舗ノモノアリテ、物産ノ学アルコトヲ話シ、稻若水[割註]物産家中興、名宣義。」松岡玄達[割註]字成章、慈菴ト号ス、平安人、物産学以テ若水ニ継グ而興。」アルコトヲ聞ケリ。(木村兼葭堂,1975,p11)

「遺筆」は兼葭堂が本草学を知るきっかけから語られ始める。物産ノ学こと本草学の實力者として若水と恕庵の存在が兼葭堂には強く印象付けられており、また恕庵らの学問を「物産学」として捉えていることが分かる。しかし若水や恕庵から直接教えを受けたのではない。「遺筆」を更に引用する。

十二三歳ノ頃、京師ニ松岡門人津島恒之進。[割註]名久成、字桂菴、彭水ト号ス、又如蘭軒、松岡先生業受ケ、越中高岡人、法橋津島玄俊弟松岡学頭タリ。」物産ニ委コトヲ知り、コノ頃家君京遊ニ従、始テ津島先生ニ謁シ、草木ノことヲ問フコト一会、翌年余十五歳、家君ノ喪ニアイ、十六歳ノ春余家母ニ従テ京ニ入、再津島氏ニ従学シ門人ト成ルコトヲ得タリ。之ヨリ屢書ヲ通ジ物産ノ説ヲ聞キ、津島氏モ毎歳浪華ニ下リ本草ノ会アリ、数出会ス。宝暦四年甲戌津島氏客中ニ卒ス。同社戸田斎[割註]旭山ト号ス。備前人。」江戸田村元雄、[割註]坂上登、藍水ト号ス。」平安直海元周[割註]名竜、越中人。」ナド、書ヲ通ジ考索ヲことトス。近キコロ平安蘭山[割註]小野稀博、字以文。」ニ従テ、益々名物コトヲ究ム。(木村兼葭堂,1975,p11-p16)

兼葭堂は恕庵門人である恒之進から本草学の知を受け継ぎ、旭山や直海、藍水らと交流することで更にその知を研磨させている。「名物」の言葉を使うことから恕庵本草学の系譜に位置する一人だといえ、旭山の薬品会にも参加していることから薬品会による本草学の展開の影響を受けていると考えられる。

しかし兼葭堂はこれまで考察してきた人々のように儒者でもなければ医家の家系に生まれたわけでもない。兼葭堂が現代の研究では兼葭堂は本草学の系譜に加えられることは少なく、茶道や漢詩、絵画などの方面から考察されることが多い。

兼葭堂の本草学的な活動としては、本草学者らの交流や薬品会の参加の他に貝や石

の蒐集があげられる。この貝の蒐集については宝暦 10 年（1760 年）に紀州で貝の採取を行い『浄貞五百介図』の写本を作成した源内からの影響が大きいと考えられており、兼葭堂と本草学の関係の深さを感じさせる。

また大阪市立博物館には兼葭堂の蒐集した貝と石の標本が伝わっている。兼葭堂は貝類を研究したすえに彩色し図示した『奇貝図譜』を作成しており、その他にもキノコ図鑑である『兼葭堂菌譜』や『本草図譜』、『薩州虫品』、『諸国異魚図』などの稿本もある。兼葭堂はありとあらゆる動植物を蒐集し、その成果を一つの書籍に纏めている。

また兼葭堂には『一角纂考』という著作がある。これは北海周辺の海域に生息する鯨の一種である「イッカク」の正体を古今東西の知を総動員させることによって考察した書籍であり、蘭学者大槻玄沢の協力を仰いだ末の成果である。考察の結果として想像上の動物である一角獣とイッカクには関係がなく、イッカクは海生生物であること、そして額の角だと思われていたものは歯が伸びたものであることを明らかにしている。モノを蒐集し、古今東西のあらゆる書籍から知を積み重ね、協力者との議論によって事物を探究し、究明するに至る活動はこれまでの本草学の手段を受け継ぐものであるといえる。

それでもこれまでの羅山、益軒、恕庵、旭山、源内らと兼葭堂の性質は異なる。羅山から始まった江戸時代の本草学の歴史に関わり発展を担ってきた人物らには、本草学を選ぶに至った思想と目的があり、学問の方向性が明確であった。対して兼葭堂の学問意識は「遺筆」から推測するに、これまでの名だたる本草学者らの掲げた目的とは異なるものが見えてくる。以下に引用する。

余嗜好コト専ラ奇書ニアリ。名物多識ノ学、其他書画碑帖ノコト、余微力トイヘドモ、数年来百費ヲ省キ、収ル所書籍ニ不足ナシ。過分ト云ベシ。其外収蔵ノモノ、本邦唐山金石碑本、本邦古人書画、近代儒家文人詩文、唐山人真蹟書画、本邦諸国地図、唐山蛮方地図、草木金石珠玉虫魚介鳥獸、古銭、古器物、唐山器具、[割註]奇ヲ愛スルニ非ズ、専ラ考索ノ用トス。」蛮物異産。右ノ類アリトイヘドモ、ミナ考索ノ用トス。他ノ艶飾ノ比ニアラズ。（木村兼葭堂,1975,p17）

兼葭堂自身は自らの嗜好は「奇書」にあるとする。その奇書とは「名物多識ノ学」

に関わるものであり、また「書画碑帖」などである。「収ル所書籍ニ不足ナシ」と言い切るほどの蔵書量を誇る兼葭堂だったが、集めていたものは書籍だけではない。書籍以外にも地図や器物が蒐集され、その好奇心の対象はヨーロッパの品にまで及んでいることが分かる。

だが兼葭堂の目的は蒐集ではない。愛でて楽しむのではなく、「考索」の対象にしていることを兼葭堂自身が割註と本文の両方に記している。兼葭堂にとって本やモノとは決して部屋に飾って眺めるものではなく、知を得るための手段でありテキストなのである。しかし嘗ての本草学者たちが打ち立てた「物理の究明」や「民生日用」というような具体的かつ実地的な目的については「遺筆」では語られない。兼葭堂にとって「蒐集」と「考索」は手段ではなく目的そのものであったと思われる。

だが「遺筆」の中で「因ッテ閑居ストイヘドモ、名物ノ学ヲ精研シ、不朽ノ微アルノミ」²⁶⁶と記述している。書画を嗜み、漢詩の心得もあった兼葭堂だが「名物ノ学」すなわち本草学はその中でも特に重要視していた学問であったことが分かる。そのような兼葭堂の書斎には全国から雅俗を問わず人が集まった。

本章では兼葭堂の書斎に訪れた多くの人々の中でも特に本草学方面の知識を求めた人々の目的を考察する。これは兼葭堂が時代に果たした役割を明らかにするだけでなく、江戸社会の中の本草学の在り方を探りだすものともなりうる。

2. 兼葭堂の書斎

2.1 兼葭堂と本草学

本章の本題は兼葭堂の人物研究を行い、兼葭堂自身が語る「考索」の内実をこれまで考察してきた本草学の知の構造に反映させるものではない。また本草学の研究分野で兼葭堂が影響を受けた人物たちを一人ずつ詳細に取り上げることは量的にも膨大であり、それだけで一つの研究になりうる。しかし兼葭堂がどのような人物から影響を受け、如何なる人物と出会っていたのかを把握しておくことは、兼葭堂の書斎から波及していった知の内容を考察するにおいて非常に重要である。その為、本節では『兼葭堂雑録』の他に来客名簿ともいえる『兼葭堂日記』²⁶⁷（以下日記）を中心に、兼葭堂の知の構造を概説する。

兼葭堂が恕庵本草学の系譜から本草学の知を与えられ、旭山や藍水を師としながら源内からも影響を受けていることは既に述べた。本節では兼葭堂がモノにつけた解説

の構造を考察することで、その影響を具体的に考察する。まず『兼葭堂雑録』巻之二に記録された安産草について次のような解説をつけている。

安産草、[割註]蕃名「ロースハンエリゴ」といふ、此語、安草草といふにあらず、地名なり。」古人の説に、此草「エリゴ」の外、他所に生せず。「アラビヤ国荒地の紅海の浜砂中より産す。其大さ手の如し。形状は円く、多枝ありて相纏るごとくなり。狭く小き葉あり。其中に粒々たる花実の如きものあり。常に凋て開くことなし。(木村兼葭堂,1975,p45)

安産草について兼葭堂は大きさや形状、花実の有無や性質などを記述する。これは恕庵本草学から受け継ぐモノそのものが持つ情報の活写である。それに加えて「ロースハンエリゴ」というオランダでの呼称を記述する。呼称に注目するのも恕庵本草学であるが、その語がオランダ語であり、また海外の地名であることを明らかにしたうえで、アラビヤ国などの外国の土地にまで記述の幅を広げている。この海外へのまなざしは薬品会と『物類品隲』にも登場した知の視点である。安産草の記述の引用を続ける。

然れども彼土の斎日に、「ケルスタク」といふあり。此夜はじめて開くと、[割註]「ケルスタク」は毎年彼が四月にある日なり。」然れども是古人一偏の説のみにて、誰か是を見たる者なし。薬肆及売薬の徒、商売の為に褒賞して、是を四方に流布せしむ。(木村兼葭堂,1975,p45)

兼葭堂の記述は、安産草はアラビヤ国の斎日である「ケルスタク」に初め開くものであるという根拠のない説を商売の為に利用する売薬商人らの様子に至る。モノから当代の人間の活動を知り、その様子を記述するのも本草学の手段であり、知の一環である。

一説に催生の時に及で、是を酒中に投じ、其産期を考るに、将に産せるとする時自ら開と、温湯の水を陶器[割註]彼土の玉盞。」に納れ、此草を能浸せば一時計を経て開く、又是水より上て乾燥すれば、元の如く凋む。如是すること許多なり

といへども、燥後其形状等しくして、終年曾て変せず。催生の期これを頭上、或は背上に置、又掌中に持しめて後、陶器に水を貯自投ぜしむるに、須臾の中其開くときは、是安産の兆なり。時を移すといへども、開かざる時は難治と知るべし。ジュデヤ国、又亜細亞州の女、催生の期に及んで産みがたき時は、是を酒又は水に投じて飲せしむ。[割註]右は蕃書に著す所を訳する者なり（木村兼葭堂,1975,p45-p48）

安産草の伝承まで兼葭堂は蒐集している。しかもそれはオランダから輸入された書籍に書かれていた知識を訳したものである。本草学者らが翻訳の技術を利用しながら海外の知識を手に入れていたことは『物類品隲』の記述からも明らかである。

また『兼葭堂雑録』にはヤマアラシである豪猪や駝鳥と混用されてきた食火鶏など、西洋から伝来し、見世物になっていた動物についての知が記述されている。食火鶏の記述を引用する。

食火鶏[割註]一名馳蹄鶏、骨托禽トモ云。」蘭語に「カスワル」といふ。又俗に駝鳥といふ。然れども食火鶏と駝鳥は別なり。寛政元年酉七月、阿蘭陀船にのせて長崎に來り、同二年戊五月より浪華に於て觀物とす。此食火鶏は西南の天竺より出る奇鳥にして、常は米麦をくらひ、悖なる時は鉄石瓦火炭などを喰ひ其儘糞に出す。尤鳥にして鳥にあらず。大小便二穴あり。鳴声地にひびき雷の如く、惣毛逆立おそろしきこといふばかりなし。後形状凡土佐駒のごとし。身の重さ拾八貫目ありといふ。餌飼一日に握飯一升五合余食すといふ。

本草綱目ニ諸書ヲ戴テ云、其說同ジカラズ有り、鴈身駝蹄蒼色、頭ヲ舉レハ高サ七八尺、翅ヲ張レハ丈余、大麦ヲ食ヒ、或ハ鉄石火炭ヲ食フ。足ニツ指利キ爪アリ。能ク人ノ腹ヲ傷リ死ニ致ス。日々ニ行七百里、其飛高不、卵ノ大サ甕ノ如シ。此ノ鳥波斯國產佻齋安息等ノ西南天竺ヨリ出ツ。和漢三才圖會云、按ニ阿蘭陀人咬カタ（口偏に留）吧國ノ火鶏ヲ貢ス。彼人呼ンデ加豆和留ルト曰。肥州長崎或ハ之畜フ。形略雞ニ類シテ而、丈高サ三四尺、能火燼及小石ヲ食。其糞ハ乃炭或ハ石也。人近クキハ則趕テ而啄カント為ツ。

按ずるに、万国新話云、食火鶏は番達に産す。其名を「エメウ」と云。大き鵝

の如舌なく翼なし。羽毛黒く頂上に冠あり。其室龜殻のごとし。爪は甚だするどく、物に触れば後さまに蹴こと馬の跳るに似たり。熾たる炭、磁器の欠といへども投あたゆれば則ち食ふ。是「エメウ」なるものなり。所謂食火鶏なり。俗人やもすれば、食火鶏と駝鳥と取り違へて覺へたるものあり云々。然るときは此に渡りしは食火鶏にして、駝鳥といふには非ずかし。(木村兼葭堂,1975,p65)

兼葭堂は『本草綱目』のような中国古典だけではなく『和漢三才図会』や『万国新話』など日本の著作も引用することにより、食火鶏でありエメウでもある動物の知を記述する。ヨーロッパから渡来した知は中国の知識を経て日本化されていくのである。

知の日本化こそ本草学の目的でもある。実際の日本人の生活を論点とした『大和本草』を嚆矢とし、恕庵本草学は漢名と和名の一致を目指した。そして薬品会の活動と『物類品隲』の記述は、中国のみならず西洋のモノを実際の日本人の経験知から究明しようとしていた。兼葭堂のモノを巡る好奇心と記述の手段は、本草学の歴史と思考を受け継いでいることが分かる。

以上のことから、17世紀後半から18世紀にかけての日本で行われた本草学とは、海外の知を日本の風土や歴史、そして日本人の生活や心性の中で検討することにより日本独自の知を構築しようとする「試み」であり「営み」であったといえる。

2.2 兼葭堂の交流網

『兼葭堂雑録』巻之二には「ヲハリヨアプセンテ」という草についての記述がある。

「ヲハリヨアプセンテ」といふ草ありと、按ずるに、「ヲハリヨ」とは、薬油の通称なり。「アプセンテ」、この草茵陳に似たり。紅毛国の中「イタリヤ」といふ国の河海辺に多く有よし、主治悪虫を殺す。此草の油を二三滴も殺虫の薬湯の中へ加て服すれば、腹内の悪虫ことごとく消去。兼治金瘡臭爛、楊梅瘡臭穢にて近づき難きもの、水にて煎じ温め洗へば、陳腐を化して良肉とす。真に古今無上の奇薬なり。紅毛人いへらく、往年其国合戦ありて、戦場に刃傷の人、此草の中へ倒れ死せるが如くなれども、凡十五六日を過て、或人行て見しに、刃傷の者疵も痛まずして、逐漸に平癒し、死人は全身腐らずして完かりしとなり。此時より紅毛国にも、かくの如きの神薬あることを始て知しとなり。吾日本国にも亦此草

ありや否哉、後人の考へを俟のみ。[割註]茵陳は艾蒿の種類にして、畿内の河原に多し。」(木村兼葭堂,1975,p48)

兼葭堂の知識はオランダの逸話にまで及んでいる。そしてオランダと同じ効果をもった草が日本にもあるかどうかを思考し、その回答を後世に託そうとしている。

日本化を目指す本草学が究明する知の対象を西洋にも広げたことと、その知を本草学者たちが蒐集し議論していたことは『物類品隲』の「様子」と「出来事」の記述でも明らかである。その『物類品隲』ではカピタンや通詞が登場するだけではなく中川淳庵の語学力の高さが賞賛されており、後に純庵と共に『解体新書』を出版することになる杉田玄白の存在が確認される。

杉田玄白といえば『解体新書』を出版し、『蘭学事始』を著した人物である。蘭学とは西洋の情報、学術文化を知るための学問である。本草学の活動の中には蘭学発展の兆しが窺えるのである。

本草学は蘭学の発展に寄与しただけではなく、並走することにより互いに知的刺激を受け合っていた。兼葭堂自身も食火鶏の知を蒐集する際に、『解体新書』の協力者である桂川甫周の弟の中島中良が著した『万国新話』を利用していることから、兼葭堂の地理や語学に関する知見は本草学だけではなく蘭学方面の影響も強く受けていることが分かる。

兼葭堂は通詞や蘭学者だけではなく非常に多くの人物と交流している。その具体的な人名は書簡だけではなく『日記』によって明らかとなる。『日記』には兼葭堂の日常が記されているわけではない。その日に往来のあった人物名を書き上げたものであり来客名簿だといえるだろう。ここには本草学の師である小野蘭山はもちろん蘭学者である大槻玄沢や、司馬江漢。通詞である吉雄幸左衛門、檜林重兵衛。荒木元融のようなオランダ人から西洋画法を学んだ画家に、書肆の河内屋太郎右衛門。そして文人である大田南畝、上田秋成の名前もみられる。また長崎奉行だった平賀式部少輔や中川飛騨守も兼葭堂を訪問していたことが分かる。兼葭堂の交流は本草学から蘭学、絵画に文学などの知識人から流通業界に及び、また長崎奉行の覚えも良かった人物であるといえる。

この『日記』であるが具体的な交遊の内容が書かれているわけではない。しかし名前だけが記録されているわけでもない。たとえば天明4年(1784年)10月24日には

(堺陶堤山人明静院知人、伝語にて朝鮮契会図持参)とあり、寛政6年(1794年)7月28日には「夜藤井来カンハン書」など持参した持ち物が記されている場合がある。また誰が誰に連れ添われてやってきたのかを「同伴」の言葉で常に記述している。『日記』は人名の記録であると同時に、交友関係の蒐集でもあり、行動の集積であるといえる。兼葭堂はモノだけではなく人名も関係と行動と共に蒐集していた。

以上のことから、兼葭堂は知の日本化を目指して発展してきた本草学の影響を十分に受けているということ、そして蘭学からの刺激も同時に受けていることが明らかになった。またその知は多くの人間たちとの交流の中で培われたものであると同時に、長崎奉行のような海外の窓口でもあり西洋の知を最も間近で見る機会が多い権力にも注目されていたことが分かる。そして兼葭堂の興味はモノだけではなく具体的な人名を持った人間そのものへとも向けられている。

また訪問者が朝鮮契会図やカンハン書などを持参していることから、兼葭堂がコレクションを一方的に開放するだけではなく、訪問者も自分の手持ちのコレクションを持ちよっていたことも分かる。また前節で考察した通り兼葭堂はこれまでの本草学者たちとは異なり「蒐集」と「考索」こそが目的であると考えられる。よって兼葭堂の書斎は現代の図書館や博物館のような社会貢献を目的として開放されているものではなく、古今東西を問うことなくモノと情報を蒐集し、人々との交歓を楽しむ場として兼葭堂自身は機能させていたといえる。

ここから本草学を基盤とした兼葭堂の知は、交歓の場である書斎を通じて本草学や蘭学のみならず画人や文人などにも波及していくものであり、また兼葭堂自身も知の研磨に協力してくれる能力を持った人物を常に把握していた可能性が指摘できる。後節では兼葭堂を通じて波及していく本草学の知の様相を考察する。それは本草学が社会に与えた影響を知るだけではなく、社会の中の本草学を理解するものともなる。

3. 大槻玄沢と兼葭堂の関係からみる本草学の知の波及

3.1 『一角纂考』と『六物新志』

本章では蘭学者である大槻玄沢と兼葭堂の交遊から、本草学と蘭学を考える。その為にまずは兼葭堂の『一角纂考』と共に出版された『六物新志』²⁶⁸の内容から本草学の影響を考察する。

『六物新志』は大槻玄沢の著書である。六物とは、一角（ウニコウル）、泊夫藍（サフラン）、肉豆蔻（ニクズク）、木乃伊（ミイラ）、噎浦里哥（エブリコ）、人魚の 6 種を指す。これについて玄沢が蘭書に基づき考証した成果を収めたものが『六物新志』である。

玄沢は玄白に入門し、また玄白と共に『解体新書』の発行に取り組んだ前野良沢に蘭語を学んだ人物である。その後も長崎で本木良永から蘭語を学んだ。江戸に戻ってからも仙台藩医として蘭方医学塾芝蘭堂を開いており、生涯を蘭学の研究と実践に費やした人物であるといえる。

『六物新志』は兼葭堂の『一角纂考』を後ろに付す形で出版された（『六物新志』と『一角纂考』でセットとなって販売された）書籍である。（『六物新志』の稿本段階の書名は『西産物諸言』である。西洋の産物についての知見がまとめられた書籍である。また『六物新志』巻首の題言・凡例は天明元年（1781 年）となっているが、知友に頒布されたのは天明 8 年（1788 年）からであり、実際に書肆から公刊されたのは寛政 7 年（1795 年）である。

『一角纂考』下巻に記述された玄沢の後序によると、玄沢は天明 5 年（1785 年）に長崎へ向かうついでに兼葭堂の書斎を初訪した。そこで話題が一角に及び、玄沢は兼葭堂から『アイスランド・グリーンランド・デーヴィス海峡地誌』の「一角魚之圖説」を提示され、該当部分を訳してほしいという依頼を受けるに至った。蘭学に秀でた玄沢の協力があったからこそ『一角纂考』は完成した。

玄沢が兼葭堂の書斎を初めて訪れる以前に既に原型が完成していた『六物新志』は、蘭書の訳述による考察が主だが、『大和本草』『用薬須知』などこれまでの本草学に関係する書籍からも多くの根拠を得ており、源内の名も登場する。また解説の対象となっている六種のうちいくつかは『大和本草』『用薬須知』『物類品隲』にも解説があるものである。本節は兼葭堂にも影響を与えた『六物新志』の解説を概観することにより蘭学と本草学の関係を見出すものである。

3.2 『六物新志』からみる蘭学の目的

『六物新志』で解説される六種のモノは今までの本草学書にも収載されているものである。たとえば『六物新志』の一角は『大和本草』と『用薬須知』にも解説がある。

『大和本草』ではウニコウルとして獣類の項目に解説がある。「蛮語ニ一角ヲウニカ

ウルト云は一獣ノ角ナリ。其獣ノ名シレズ。犀角ノ類ナルヘシ。蛮国ヨリ来ル。俗ニ称スル所ノ功能ヲココニ記ス……（以下略）」と一角とはオランダからの輸入品であり、オランダ語の呼称は「ウニカウル」であるとする。そして『大和本草』では獣の角だとしている。

『用薬須知』では犀角に「漢及蛮舶将来ル所白犀有。鳥犀角有然レドモ角偽有。精ク詳ニ釋用宜ク。凡ソー角ト称スル者皆一類ナリ海獣ノ一角ナルモノ通シテウンカウルト云。蛮語ナリ。其上品ヲ駭鷄犀天犀ト云多ク得難シ」とある。『用薬須知』でもオランダから輸入された角を通じて、動物の「角」について考察している。その結果として「海獣ノ一角」をすべて「ウンカウル」としている。「一角」とは希少且つ未知なモノであり、ヨーロッパを感じるものであった。

『六物新志』で取り上げる一角もオランダとの貿易品である。『六物新志』はヨーロッパの船でやってきた一角を「烏泥哥爾奴（ウニコルニュ）ハ即チ我邦從來呼テ烏泥哥爾（ウニコール）ト曰者ニテ而世之ヲ珍藏シテ以テ諸毒ヲ解スル」とまずは記述する。オランダ語と日本での呼称の一致をはかり、日本では解毒剤として珍重されてきたという、日本における一角の扱いから解説は始まる。

そして「漢人」（中国人）は一角について知らず、中国古典には解説がないことを指摘する。そして「赭鞭家之明師ト雖モ亦タ何ヲ以テカ其ノ物ト主治興トヲ詳ルヲ得ンヤ」と「赭鞭家」すなわち本草家であっても詳しいことが分からずにいたとする。そこで『六物新志』は「和蘭之諸書ニ質正」することにした。

結果として一角に関する知識は「勇斯東私（ヨンストンス）人ノ名之魚譜ニ其ノ圖ヲ載セ、窩葉都（ワーエツ）ノ人ノ名之書ニ其ノ説有リ」と、西洋から輸入された書籍にあった。勇斯東私は **Johannes Jonstons**（1603 年～1675 年）（以下ヨンストンとする）であり、ヨンストンの魚譜とは 1660 年にアムステルダムで出版された『**Historiae Naturalis**』（以下『禽獣魚介蟲図譜』とする）である。また窩葉都は **Johann Jacob Woyts**（1671 年～1709 年）（以下ヴォイトとする）であり、ヴォイトの書とは『六物新志』では「悉迦多蛤模兒牒爾業湟伊斯嬰納丟兒硬治下業鞞亜更（シカツトカアムテルゲシイスセンナチュールキュンシゲサアケン）」とされており、これは 1709 年にドイツで出版された『**Gazophylacium medico-physicum of Schat-kamer der genees- en natuur-kundige zaaken**』（以下『医事博物宝函』とする）。日本には 1741 年にアムステルダムで出版されたオランダ語版が伝わった。

『六物新志』にはヨンストンの『禽獸魚介蟲図譜』にある一角の図を写生した図版が登場する。『六物新志』にはこの後も図版がいくつも登場するがそれは全て『禽獸魚介蟲図譜』を写したものであり、司馬江漢の筆によるものである。

『六物新志』は『医事博物宝函』に書かれた一角についての説を引用する。そこでは一角とは鯨の異種の巨牙であるとする。その他にもオランダ語での呼称を記述し、所以などを列挙する。そのうえで実際に玄沢自身が一角の実物を手にとって観察した記録にまで記述は至り、結果として一角とは海生動物の歯牙であることを突き止める。そして『六物新志』は「蓋シ昔人目未タ親シク其ノ物ヲ觀ルコトヲ得ズ而シテ徒ラニ傳聞ノ誤リヲ受ケテ漠然ト」誤りを書いてきた日本の知を「妄誕杜撰」などの強い言葉で何度も非難する。

人魚の項目でも「貝原翁之ヲ於大和本草ニ録シ松岡翁ハ之ヲ於用藥須知ニ奉テ而其名称産地ニ書俱ニ未ダ説カズ。余竊ニ之西洋之語ナルヲ疑フ。因テ和蘭一二之書ヲ執テ之ヲ考ルニ未タ記載スル者ヲ見ズ也」と『大和本草』と『用藥須知』が名称と産地に言及していないことに疑問を持ち、いまだ人魚を西洋の観点から吟味した人物が日本にはいないことを確認する。

『大和本草』における人魚の記述とは「謝仲玉ト云者婦人水中ニ出沒スルヲ腰ヨリ以下皆魚乃人魚也。……（中略）……今案此魚此魚本邦ニ所々稀ニ之有亦人魚ノ類ナルヘシ」とある。中国古典の数ある人魚に関わる説を引用した末に、「日本紀推古帝二十七年」に魚でもなく人でもないものが網にかかったという伝説から「此魚本邦ニ所々稀ニ之有亦人魚ノ類ナルヘシ」と日本の人魚について言及する。中国古典から日本の歴史へと知は移動する。これに対し『六物新志』はヨンストンの図譜から人魚は「百節武唵爾（ペセムエル）」という呼称があり、これは「伊斯把你亜（イスパニヤ）国」の語であることを突き止める。

以上のことから『六物新志』はこれまでの日本の学問の過ちや曖昧にしてきた知を、ヨーロッパの知識と実見から究明し、修正していくことを目的にしているといえる。そして玄沢が『大和本草』や『用藥須知』といった本草学の知に疑問を呈していることから、本草学は蘭学を志す学者に大きな影響を与えるものであった。そして蘭学の徒は西洋から輸入した新たな知識によって、日本人がまだ辿り着いていない新たな知の地平を切り開こうとしていた。

しかしヨーロッパの知識で未知を解明しようと初めて試みたのは蘭学ではない。『六

『物類品隲』が載せる泊夫藍は『物類品隲』にも解説がある。『物類品隲』では「ラティン語泊夫藍。紅毛語フロウリスエンタアリス、又コロウクスヲリエンタアリト云。此ノモノ生草絶テナシ。乾花蛮国ヨリ来ル。東壁曰ク。番紅花西番・回回・地面及ヒ天方国ニ出。即チ彼ノ地ノ紅藍花也。按ズルニ此ノ説大ナル誤ナリ。泊夫藍番国産ナルガ故、李氏モ其ノ何物タルコトヲ知ズ。花色紅ニシテ頗ル紅花ニ似タルヲ似テ、妄ニ番紅花ヲ以テ命ズ。近世紅毛人ドドニヤウスト云者ノ本草ヲ著ス。泊夫藍ヲ図スルコト甚詳ナリ。根葉。山慈姑ニ似テ五辨ノ赤花ヲ開ク。蛮国ヨリ来ル所ノ泊夫藍ハ即チ其ノ花ノ葢ナリ。紅藍ノ類ニハアラズ。図有考ベシ」と記述されている。

『物類品隲』は『本草綱目』における泊夫藍の解説を否定している。『物類品隲』は李時珍は泊夫藍がオランダ産である為に実体を知らなかったのだろうとしたうえで、オランダ人である Rembert Dodoen (1517～1585) (以下ドドネウス) による『Cruydeboek』(以下、江戸時代の表現に基づき「ドドネウスの本草書」とする) に掲載された精密な図から泊夫藍について新たな見識を得ようとしている。中国の知を西洋の知で否定するだけではなく、そこから新たな知を作り上げようとする意気込みが本草学にはあったことを『物類品隲』の記述は示唆する。西洋の知を材料とする知の日本化は本草学から出発しており、薬品会を主催した源内らは既に「ドドネウスの本草書」を手にしていたことが分かる。

『六物新志』でも『本草綱目』の知を否定したうえで「鐸度捏烏斯(ドドネウス)之本草」の花部の説から泊夫藍の知の記述を始めている。『六物新志』は『物類品隲』を参考にしていることが分かる。以上のことから本草学の活動が蘭学に大きな影響を与えており、また本草学の知は蘭学の追究に必要なものであったといえよう。

しかし蘭学は本草学に追従し、その知を西洋の知識で修正するに留まらない。『六物新志』が解説する噎浦里哥は、『物類品隲』ではエブリコとして「蝦夷ニ産ス。蝦夷人諸病トモ是ヲ用ウ。其質甚軟ニシテ色白シ。或ハ是レ五葉松ニ生所ノ芝ナリト云」と蝦夷産について記述する。『六物新志』でも我邦ニ羈所麼スル之野作(エソ)島産スル所而我邦呼シテ野作松曰者之木耳也」とあり、蝦夷を産地とするものだとしている。

『物類品隲』では蝦夷の人たちが病気の時に用いるという解説がある。『六物新志』でも噎浦里哥の薬物としての利用について言及される。そこでは「余西医ノ説ニ因テ此物ノ性功ヲ審スルヲ得テ毎之用テ微利ヲ得テ而効ヲ取ル」とあり、玄沢はヨーロッパの医者たちの説を利用しながらエブリコの効果を研究していたことが分かる。

そしてその成果として「四物湯噎浦里哥加へ婦人経行毎治スルニ期ニ先テ腹中急痛ヘル者ヲ治スルニ甚ダ効シアリ」と記述されている。四物湯とは血液循環を良くして体を温める漢方製剤であり『和剂局方』にも解説されている。そこに玄沢がエプリコを加えたところ、生理痛の女性に非常に効果があったようだ。この成果を玄沢は『六物新志』の中で「其ノ効神如シ」と記述している。中国の知識とヨーロッパのモノを組み合わせた末に新たな良薬を完成させている。蘭医とはヨーロッパの医学を実践するのではなく、従来の知識に新たな知識を融合させることによって日本独自の処方を作り上げていたことが分かる。

よって蘭学とは決して西洋の知の模倣や究明を目的とする学問ではない。また本草学の知を西洋の知識で修正するだけの学問でもない。蘭学とは東洋の知と西洋の知を融合させることによって日本独自の知を構築していく学問であるといえる。そしてこの異文化の知を日本化しようとする知的活動には本草学の強い影響があることが分かる。

3.3 『六物新志』に記述される「出来事」と知の波及

『六物新志』の記述は西洋の知識を新たな武器としながら考察を深めていくことで、従来の知の修正を迫るものである。その内容は西洋で出版された書籍によってモノの実態を究明することを中心に行っているが、海外での呼称や環境から知を論じる記述もある。

木乃伊の項目ではヴォイトと「烈墨力伊（レメレイ）」ことフランス人医師であるNicolas Lemery（1645～1715）の書籍から「利未亜之地炎熱赭烈行人堪ウベカラズ。動モスレバ則道路ニ僵仆シテ而死ス其ノ屍大陽ノ為スニ焦爍被ル乾枯擬化スル者ノ名ケテ白摩蜜亜（モミア）曰」とあり、「利未亜」ことリビアの灼熱の環境から人がミイラ（モミア＝mummy）になる理由を記述する。

また一角の項目には「土人其ノ魚ヲ呼シテ曰襪兒（ワルー）曰其ノ屍ヲ納兒（ナル）ト曰フ。其ノ民率其ノ屍ノ牙ヲ得テ以テ貿易ノ資ト為ス。故ニ二言連合シテ納兒襪兒（ナルワル）ト之ヲ謂」とある。日本ではなく海外の人々の呼称の語源と生活が「一角」と「貿易」を媒介にして記述されている。だが『六物新志』の記述は西洋の出来事に留まらない。

一角では次のような記述がある。

近江州、八幡郷、一富戸通商ノ舟帆ヲ於奥州松前之函館港ニ開テ而將ニ于前越ノ敦賀浦ニ帰ラントスル也。已ニ於佐渡海至テ而快風霽ヲ吹キ駛疾吹キ飛カ如シ……（中略）……佐渡国ニ到リ即チ戴ヲ卸シ舶ヲ陸ニシテ而視レハ則チ一物有テ底ヲ穿ツ。其形角ノ如長サ三四尺可リ……（以下略）（大槻,1980,p54・p55）

佐渡の海を渡って敦賀浦に帰ろうとする船に異変が生じた為、佐渡国で調べてみたところ、船の底が角のようなもので穿たれていたというエピソードだ。その角は富戸のものとなり「甚珍藏」した。『六物新志』はその角について「東都ノ一赭鞭家ニ送テ而之鑑定ヲ請。赭鞭家以一角為。余此ノ説ヲ於一京医ニ得。京医之ヲ於江州山田邑ノ木内小繁ニ聞ク。小繁其邑八幡輿隣ヲ以故親シク之ヲ觀スルト云」というエピソードまで記述する。

珍藏されていた角は江戸の本草学者に鑑定が依頼された。この本草学者は一角だと言いつたのである。玄沢はこの説を京都の医師から聞き、その医師は江州山田邑の木内小繁から聞いた。小繁の暮らす山田邑は八幡輿の隣に位置する為、発見された角が一角という話を聞いたというわけだ。

これは当時の知が伝搬する様子がよく分かる記述である。それも先に引用した船の走る様子と合わさって非常に時代の手触りを感じる内容となっている。珍しいモノが船底から発見される様子は臨場感に溢れており、まさに「出来事」の活写である。そして得たモノを珍藏するだけでなく鑑定を依頼する探究心と、鑑定者として本草学者が選ばれていることに本草学がいかに市井に広まっていたのかが分かる。そして一角に関する噂と情報が地域を徐々に越えていくことで、寄石蒐集家でもあり本草学者でもある木内小繁こと石亭を経て玄沢にまで至るという、当時の知の波及の様子が交遊の渦と共に連続的に浮き上がってくる。

そしてこのエピソードに玄沢自身の見解が添えられる。

按スルニ蘭書中ニモ而之興相ヒ似タル之ことヲ戴其ノ文長キ故此処ニ載セズ。今我邦内之海ニテ而之ヲ得ル者豈亦異ナラズカ。因テ之記ノ以テ于參校ノ一助ニ備ルノミ（大槻,1980,p55）

蘭書の中にも船底に角が刺さっていたエピソードがあるようだ。玄沢は再び同じような出来事が日本内であった時に、角が一角であると結論付けられる一助となるためにこのエピソードを記述したという。

『六物新志』ではモノを巡る日本の「出来事」が活写されている。それは船の描写や知が波及していく様子が地名と実名も含めて展開されるなど現場の臨場感あふれる記述である。本草学に限らず蘭学でも今を生きる人間の活動によって知を究めようとしている。また「一助ニ備ルノミ」という記述から、『六物新志』の目的は知の修正だけではなく、布教も含まれていたことが分かる。

具体的な人名を伴った交遊の一端が見られるのは人魚の項目である。そこには「近歳秋田藩ノ臣小田野子ナル者、其ノ国人親シク人魚ヲ観ル者ニ就テ而其ノ形状ヲ聴キ輒チ之圖ヲ作り以テ之ヲ江都ノ平賀鳩溪ニ送ル」と源内の名前が出てくる。小田野子とは小田野直武のことであり、源内の手ほどきによって西洋の画法技術を身に着けることで秋田蘭画の創始者となった人物である。そして『六物新志』の図を担当している司馬江漢は直武の弟子である。

『六物新志』からは本草学から出発した知と体験は絵画の方面まで影響を及ぼし、それが蘭学の知にも関わっていた交遊の渦の一端が見える。本草学は蘭学と密接に繋がっており、その関係は互いの知を究めるだけではなく他分野への影響を与えるものでもあった。

3.4 蘭学者と本草の知の関係

『六物新志』は本草学の知に強い影響を受けている。文献から蒐集した知を日本化させること、人間の生活を記述しながら「出来事」を活写すること、そして現場の臨場感と人間に対する手触りがある知を構築していく点に本草学が作り上げてきたモノの見方と記述の手段をみることができる。しかし決して『六物新志』の記述が本草学的であると結論付けるものではない。

『六物新志』とは本草学の記述の内容に疑問を呈し、西洋の知識でもって更に確実な知を構築しようとする試みであったといえる。そして蘭学という新たな学問の布教を目指した活動でもあった。『六物新志』の背後には本草学の知識と手段がその歴史と共に確かに存在している。本草学が「ドドネウスの本草書」に代表される西洋という手段を手に入れたとき、蘭学は本草学以上に西洋の知を利用しようとした。

蘭学とは決して西洋の模倣や究明を目的にする学問ではなく、日本の新たな知の地平を切り開こうとする活動であったといえる。蘭学は本草学に影響を受けながらその知を越えようとしている。本草学は蘭学を活性化させるきっかけである。

そして『六物新志』の記述によって本草学は日本に広く浸透した学問であり、本草学者は未知を究める存在と認識されていることが分かった。本草学は蘭学と繋がると同時に他分野へも影響を及ぼす学問であり、本草学者の活動は更に広範へと開かれていくものとなっている。

本草学とはモノを通じて天道から歴史、人間同士の交友関係に至るまでありとあらゆるものの関係と影響を論じ、究め続けてきた学問である。その本草学自身が他の分野に「影響」を与え、複数の「学問」の関係の中で構築され論じられる学問となりつつあることが、蘭学の啓蒙書でもある『六物新志』からは分かる。

ここまでは『六物新志』という書籍から考察した本草学であり、その知が及ぼした影響であった。最後に兼葭堂と玄沢という生身の人間同士の交遊から本草学の知の波及を考察する。

玄沢が兼葭堂に送った書状²⁶⁹の中に「ド、ネウス之内レーフルコロイト之こと御尋被下候、訳文致シ候。大ニ手間取申候」と書かれた箇所がある。ここから兼葭堂は「ド、ネウスの本草書」の中にある「レーフルコロイト」の箇所について玄沢に翻訳を依頼したことが分かる。

対する玄沢はこの書状の中で「雪割草之由、漢名ハ何に候」とも書いている。玄沢は「レーフルコロイト」を雪割草とあたりをつけているが、その漢名について兼葭堂に質問している。

以上のことから兼葭堂は玄沢に翻訳の力を借り、玄沢は兼葭堂に本草学の知を借りようとしていることが分かる。互いの得意分野を活用し、そして利用しあうことによって学問は活性化され、知は更に複雑になっていった。

以上は蘭学者である玄沢と本草学を得手とする兼葭堂の知と交流からみた、本草学の影響と知の波及の様子である。次節では本草学とは関係のない文人との交流から、本草学の社会への影響を論じる。

4. 『遡遊従之』からみる本草学の知の伝搬

4.1 南畝の疑問点と好奇心

『遡遊従之』²⁷⁰の著者である大田南畝は源内によって見出された文人である。狂歌師として名高く戯作も著し、幕臣でもあった。享和元年（1801年）2月27日に大坂過書町にある銅座に赴任するために江戸に発った。この年の5月29日と6月2日に兼葭堂を訪問していることが『日記』から明らかである。

この時、南畝は多数の質問を記した書き付けを手渡している。その質問の後の空欄に兼葭堂が回答を書きこみ、次の年の正月に今度は兼葭堂のほうから南畝に渡しに行っている。その質疑応答の記録こそ『遡遊従之』である。

まずこの活動の事実から、南畝のように本草学者でも蘭学者でも地理学者でもない人物でも兼葭堂の知に興味があったということが分かる。その好奇心は兼葭堂の書斎のコレクションを見せてもらい、歓談するだけには留まらない。南畝は質問を定め、その回答を要求している。また兼葭堂自身もそれに応えている。南畝は幕臣であると同時に既に文人として名を馳せていた人物であり、当時を代表する文化人であるといえる。本節では『遡遊従之』の具体的な質疑応答の内容を考察することによって、古今東西の知に精通しながら世間をよく知る人物であり〈世間〉そのものでもあるといえる存在が求めた兼葭堂〈本草学〉の知を明らかにする。

『遡遊従之』の序文で南畝は兼葭堂の人柄について「謙虚退然、博学方無シ。最モ地理ニ精シク、能ク物産ヲ弁ズ。其ノ風韻蕭灑、啻ニ一好事家ニアラズ」と記述する。ただの好事家ではなく豊富な知識を弁ずる知恵も備えた人物として兼葭堂は称賛されていることが分かる。その知識者に南畝が求めた知を大別すると以下ようになる。

①本草学の知

モノの実態、和名と漢名の照応、日本の本草学者の書籍の内容、産地の情報、舶来品の詳細、古典の内容の実際、製造手段

②地理の知

大坂の土地の詳細、海外の土地の詳細、銅山の詳細、海路、海上における国境

③歴史の知

歴史的事件の詳細

③社会情勢

海外の貢物

本草学の王道ともいえる知の他に、地理に関する知が多く含まれていることが分かる。それも日本の土地や環境だけではなく、海路や国境など対外諸国との関係を強く

意識したうえでの疑問である。また歴史や外交を含んだ社会情勢にまで質疑応答はいたる。南畝の質問に固定の枠組み〈ジャンル〉はなく、「海外」やそれに対応する「日本」という国についての理解を兼葭堂の知によって深めようとしていることが分かる。次節ではその具体的な内容を考察し、本草学の知と手段が如何に利用されていたのかを論じる。

4.2 南畝が要求する本草学の知

本草学に関する質問はモノの実態や漢名や和名の照合が中心である。それらをいくつか引用していく。その際、南畝の質問に関しては「」をつけることとする。

「金爪槌トハ何ナルヤ」

雑字大全器用部ニ金爪槌ノ名アリ三才図会戴ル所ノ臥爪ノ類。

(大田南畝,1971,p7)

「安産樹ハ何物ゾ」

本草所載含生草是ナリ。是物アラヒヤ国ノ西紅海ノ海濱砂地ニ生スルモノナリ。

大槻氏所撰蘭畹摘芳ニ委蛮説ヲ載タリ。(大田南畝,1971,p29)

「サフランハ何物ゾ」

洎夫藍ハ西洋諸国ニ産ス。サフランハ亜刺比亜国ノ名ナリ。羅甸語ニコロシュスト云フ。花ハ百合ニ似テ花頭六辨其髭葉三篠アリ。花後實ヲ結ブ其根ハ水仙ノ如ク葉ハアマナニ似テ狭長正中ニ白篠文アリ。品類多シ。其有名ノモノ二十余品ニ及フ。大槻氏六物新志ニモ載タリ。(大田南畝,1971,p62)

多くのモノの実態について南畝は問う。それに対する兼葭堂の回答はこれまでの本草学の解説と大きく逸脱するものではない。中国古典を筆頭に古今東西の文献を引用しながら、名とモノを一致させ、産地と環境の情報を交えながら形状や実の有無などを解説する。

南畝のモノの実態に関する質問は中国やアラビヤ、ヨーロッパのモノが殆どであり、当時の人々の疑問と好奇心の対象が中国古典のみならずヨーロッパのモノへも広がっ

ていたことが分かる。

「問龍骨ノ龍ハ美称トシテ。牛馬骨ノ海中ニテ曝タルモノヲ云ト此説如何。唐山ニテモ近来此論アリヤ」

本草彙言ノ説従ヘシ。然トモ牙角ノ類数年土中ニアルモノ墻精固賜鎮驚ノ劑ナリ。舐之黏舌ノモノヲ良トス故小豆嶋象骨ノ類其効ナキニ非ス。全ク石品ニ属シテ佳ナリ。(大田南畝,1971,p43)

「唐山ノ肉荳蔻ト紅毛ノ肉荳蔻ト異ナリ各効能イカガ」

肉荳蔻紅毛ノモノ上品ナルヘシ。唐山齋来南庚二種モノカ形状頗ル異ナリ。味又異ナリ。一種ノモノナルヘシ。紅毛ノモノ木生ナルヲシラス妄ニ草部ニ収ム。唐山ソノ真ヲ見サルニ因ル。蛮譚大槻氏六物新志ニ載タリ。(大田南畝,1971,p52)

龍骨について南畝は尋ねている。『物類品隲』でも龍骨は注目されていたモノであった。南畝は龍骨が牛馬の骨が海中にて曝されたものであるという説の真偽を尋ねる。それに対して兼葭堂は『本草彙言』の龍骨に関する解説を引用し、土中に数年埋まった牙や角が龍骨として薬になるとされている中国の説を回答にする。そして舐めて粘り気があるものが良質な龍骨であるため、小豆嶋の象骨は効果がないとする。これは『物類品隲』の記述と同じ内容である。

次は中国産とオランダ産の肉荳蔻の効果の差についての質問である。回答はオランダ産のもののほうが上質であるということである。そして中国産のものは形状や味が異なることを記述する。それだけでなく、中国はオランダ産の肉荳蔻が木になることを知らず、草の項目に分類してしまっていることを記述したうえで、オランダ産のものに対する正確な知識が『六物新志』が解説していることを示す。

龍骨と肉荳蔻の解説からは、南畝の興味はモノの実態だけではなく中国の文献上の知の成否や、外国産同士の品質の優劣にも及んでいる。日本対外国だけではなく、外国対外国といった諸外国の関心に興味があることが分かる。それに対する兼葭堂の回答は中国古典だけではなく、当代の日本の本草学書や蘭学書を参考にしている。疑問に対する直接的な回答だけではなく日本と結びつけた知が語られている。

「問用藥須知ノ外捷徑ニ和名ヲ戴ルハ何ノ書カ最便ナル」

和名ヲ戴タルモノ多シ。然トモ一家ノ考證ヲ載タルモノ多正名ト云難シ物品目錄ナリ捷徑ト云ベキガ是モ考正ヲヘサレハ用カタシ。和名ニ古名アリ。方言アリ。俗名アリ。新古ヲ考徴シテ其正名ヲ取ルヘシ。(大田南畝,1971,p42)

『用藥須知』のほかに和名が載せられている本で最も有益なものは何かと南畝は尋ねる。『用藥須知』の「名」の知は90年以上経った時代でも評価されていることが分かる。それに対する兼葭堂の回答は、和名を載せているものは多いがそれが「正名」であるということは難しいというものである。つまり兼葭堂は名に関する知で有益な書籍を発見しておらず、また兼葭堂の眼鏡にかなう書籍もなかったということである。そして和名には古名、方言、俗名があり、新古を吟味することで「正名」が決定されるという、「名」に対する兼葭堂の見解が記述される。南畝や兼葭堂の時代でも「名」とは学問にとって重要な課題であったことが分かり、特に「正名」の決定は非常に困難なものであった。その「名」を学ぶための有益な手段や方法を知っている可能性が高い人物として南畝は兼葭堂を頼っている。

「葡萄酒ヲ造ルニハ葡萄ノミニテ製スルヤ。又ハ穀類シモ雜ルヤ」

證類本草云葡萄酒子ヲ以醸酒或藤汁ヲ取り醸酒モノ也。焼酒ニテ造ルハ古法ニ非ズ。草木子焼酒ニテ葡萄酒ヲ造ルコトヲ戴タリ。今紅毛ヨリ来ルモノ皆葡萄汁ヲ以テ製スト云。穀類ヲ用コトヲ聞カス。(大田南畝,1971,p38)

葡萄酒の製造についての質問である。これは本草学の知というよりも兼葭堂が造り酒屋の主人だからだろう。兼葭堂の回答はまず『證類本草』の解説を引用し、中国における葡萄酒の定義と作り方を説明し、焼酒から造るのは古法ではないとする。そのうえでオランダから来る葡萄酒は葡萄汁から作られるものであると回答する。兼葭堂の回答は中国古典から現代のオランダの実際まで至るものであり、中国とオランダの手法の違いを明らかにするものでもある。

「紅毛人ノ持来ルト云樽ノ如キモノ上下窄リ中フクラニシテ穴アリ。上下ニ鐵ノ輪ミツツアリ。是所謂南蛮鉄ニシテ劍ヲ鑄ルニ利ナリト云イカガ。且樽ノ名ヲ

レギゲルト云由イカガ」

紅毛人多ク齋来ルモノ大小アリ。此方ノ桶ノ類ホウトル等ヲ入ルモノ蛮名バーリーバト云長崎ニテキッパト云。鐵輪ニテ劍ヲ鑄ル未詳。(大田南畝,1971,p63)

南畝はオランダ人が持ってきた樽のようなものが、劍を鑄るものではないかという説の真偽を尋ねる。また樽の名についても知りたがっている。兼葭堂はオランダ人が持ってきた樽には大きいものと小さいものがあり、桶のほうはホウトル（water で水の意）を入れるものであり、オランダ名をバーリーとし、長崎ではキッパというものと回答する。だが劍を鑄るものかどうかは分からないとする。

南畝の疑問に対して兼葭堂は明確な回答ができないでいる。しかし兼葭堂は「鉄鐵で劍を鑄るかどうかは分からない」とはっきり回答しており、名称に関してはオランダ名と長崎での呼称の両方を記述している。自分の分かる範囲で回答しようとしている。また兼葭堂の知は長崎でオランダ人が献上品として持ってきたモノにまで及んでいることが分かる。

南畝の求める知とは古典の中で語られる説の真偽や輸入品である珍しいモノの実態である。また「名」に関しても南畝は興味を持っており、和名に対する漢名の質問も多い。『用藥須知』の書名も出てきていることから、「名」については本草学を学んだ人物の知が信頼されていたことが分かる。

そして南畝が求めたのは日本だけではなく外国の国々の実体である。この外国に対する好奇心と知を次節では考察する。

4.3 注目された海外の情報と回答の手段

『遡遊従之』には地理に関する質問が多い。それは大坂の濠に関する疑問など兼葭堂の書齋の周辺の話題だけではなく、日本を取り巻く海域にも至るものであった。

「海舶ノ日本ニ至ル寧波ヨリ出ルト乍浦ヨリ出ルノ二ツアリトキク二浦ヨリ出ルノ海路ノ沿ル所并ニ里数イカガ」

航海ノコト諸書ニ戴ス。彼土更数ヲ考往来スルヨシ。一更ハ唐山ノ六十里。本邦ノ七里有奇ナリ。上海出シ。二百廿五里乍浦出シ。二百六十里寧波出シ。二百九十六里普陀山出シ。二百八十二里コレ皆本邦里数ナリ。風順ナラサレハ二三百

里モ漂流スルコト多シ。準則ヲ考ルコト夥長ノ専務ナリト。此説宜カルヘシ。(大田南畝,1971,p23)

南畝は中国から日本にやってくる船の航路の距離を知りたがっている。兼葭堂は、唐山（中国）の距離の単位を述べた後で、日本での里程単位でそれぞれの港からの距離を述べる。日本（長崎）へは、上海から 225 里、乍浦から 260 里、寧波から 296 里、普陀山から 282 里であると回答する。また風による弊害や規則を考えるのは船長の役割であるということまで回答している。南畝の疑問に対して回答は詳細であり、航海の手触りが感じられるものとなっている。

「薩州ヨリ琉球ニイタル。海上ニアル諸島幾許ゾ。其中ニ薩州ニ属スルト琉球ニ属スルト境知ルベキヤ」

薩州佐多崎ヨリ南、竹島。硫黄島。黒島。クサカキ島。宇治島。馬毛島。種子島。屋久島。口ノ永良部島。口ノ島。中島。小臥蛇。臥蛇島。平島。諏訪瀬。悪名島。シマコ。吐火羅。上ノコ島。下ノコ島。ヨコアシ島。鬼界島ノ名有。古圖ニヨレハ諏訪瀬島ヨリ下ヲ琉求ニ属ス。近代ノ分界ハイカカ薩人ニ問ヘシ。(大田南畝,1971,p32)

薩摩と琉球の境界を南畝は問う。兼葭堂は海上の島の名前を列挙したのちに、古地図によれば諏訪瀬島より南が琉球の領土であるとする。しかし現代の国境は分からないため、薩摩の人々に問うのがよいとする。

兼葭堂は明確な回答を避けている。しかし海上の島々の名前は列挙されており、兼葭堂の地理の知は日本内に留まるものではないことが分かる。

「清朝ヨリ朝鮮ヘノ應對イカガ。朝鮮ヨリ清朝ヘノ貢供イカガ」

朝鮮ヨリ清朝使者ヲ遣シ一年ニ兩度ト云。一ヲ冬至使ト云。一ヲ皇曆使ト云ヨシ。又国王薨去謚ヲ受ル使者ナリ。清朝ヨリモ冊封使トテ国王即位ヲ許レタル使者アリト明朝己来替ルテナシト云。貢獻ノコト大清曾典ニ載タリ。(大田南畝,1971,p41)

「朝鮮ノ書ハ此方ニ渡スヲ禁ズト云。今此方ニ傳ヘテ存スルモノ東国通鑑。懲
毖録、東医宝鑑、東人詩話、金鰲新話、等々外幾クカアル」

朝鮮ノ後後齋来ノモノナシ。彼国撰述ノモノ類苑叢宝郷藥集成方。村家救急方。
故こと撮要兵将説。祥刑要覧。農こと真説。新增類合。牛馬羊猪療。三韓詩。等見
及トコロナリ。其外東涯三韓紀畧ニ戴スルモノ多シ。(大田南畝,1971,p56)

南畝は清王朝と朝鮮との交友について知りたがっている。対して兼葭堂は朝鮮は一
年に二度、清王朝に使者を遣わせ、その使者は時期によって冬至使と皇曆使と呼ばれ
ることをまず記述する。国王が死去した場合にも派遣されるものであり、清王朝から
も朝鮮の国王の即位を認める冊封使が送られると回答し、貢献については『大清曾典』
を参考文献としてあげる。

朝鮮に関する南畝の興味は書籍にも及ぶ。現在日本で閲覧可能な書籍について尋ね
る南畝に対し、兼葭堂は多くの書名を挙げる。「見及トコロナリ」という記述から既に
兼葭堂は自分の目で確かめたものを回答していることが分かる。既に文人として名を
馳せていた南畝よりも兼葭堂は外国の書籍について多く知っており、南畝は兼葭堂の
知見の広さを頼りにしていたことが分かる。

「咬カル（口扁に留）吧曆ヲ持渡ルハ何ノ用ゾ」

往古司天臺ヨリ懇求シ願タルモノナランカ。年々紅毛舶ヨリ齋来シ。官府ニ上ト
ス他ニ見ルテナシ。(大田南畝,1971,p61)

南畝はジャカルタが曆を持ってきた理由について尋ねる。兼葭堂は古来より司天台
が要望していたものであるとする。それはオランダ船によって輸入された。兼葭堂は
日本の省の内情と同時に貿易品の内容まで知っている。

南畝は海外と日本の関係を海里や島、そして歴史を通じて知ろうとしている。そし
て中国と朝鮮の関係やジャカルタの曆の輸入など幕府に関わる人間の活動にまで南畝
は踏み込み、兼葭堂は臆することなく回答する。『遡遊従之』には当時の中国の王朝で
ある清朝を筆頭に朝鮮、琉球、蝦夷、オランダに関する質疑応答が多い。兼葭堂も南
畝も中国を「清」や「唐」といった一個の王朝の塊として認識していない。海路につ
いての問いに対する兼葭堂の回答は中国の複数の都市と日本との隔たりを具体的な数

値として浮かび上がらせており、また海上の島々についても列挙しつくしている。

南畝は本草学の知のみに関心を持っているのではなく、兼葭堂も本草学の知のみで回答しているわけではない。本草学を筆頭に地理学や歴史学など多くの分野から蒐集された知を互いに関連付けることで兼葭堂は南畝の問いに回答している。

狂歌師としての評価も高く、古今の中国と日本の文献を知り尽くしている南畝よりも兼葭堂の知は広い。そして南畝が求める知とは書籍からはなかなか知ることができず、幕臣の立場でもってしても得ることができなかったものである。わざわざ質問の書付を用意した南畝にとって兼葭堂とは交遊を深める相手であると同時に、知識を蒐集する手段の一つであったといえよう。

兼葭堂は古今東西の本草学に関する文献を引用するだけではなく、実際に行われている活動を根拠に回答し、時に嘗ての知の過ちを指摘する。概念だけではなく実際の活動へと考察は移動し、葡萄酒の製法や肉苳蔻の違い、そして使者の派遣の様子などから国の文化の差を思考させるものとなっていく。

兼葭堂の回答はこれまでの本草学の解説から大きく逸脱するものではない。しかし質疑応答ということを考えた場合、その内容は一問一答では成り立っていないことが分かる。『遡遊従之』から分かる兼葭堂の知とは質問者〈南畝〉の枠の中で完結するものではない。「モノ」や「名」となどの問いを軸にしながら思考の幅をグローバルに拡大させていくことで知に膨らみをもたらせる活動こそ兼葭堂の知である。提示された豊富な参考文献は質問者に新たな情報のきっかけを与えるものであり、自らの問いの枠を超えた回答は自身の知を新たな展開へと導いてくれるものである。

モノから名や環境、歴史などを連続して論じ続けていくことにより、影響と関係の網目構造を作り上げていくことはこれまでの本草学が書籍の中で構築していた知である。それを兼葭堂は「対話」の中で実践したといえよう。

5. おわりに

兼葭堂は多くのモノを蒐集し、知を研磨した。そしてそれを惜しみなく外部へと開放し、多くの人々が兼葭堂の知を求めてやってきた。その内容は本草学に関わることから地理、そして歴史にまで及び、外交や海外情勢などの社会問題にまで至るものであった。また兼葭堂自身も翻訳の手段を知る玄沢のような人物と出会うことで自らの知に磨きをかけた。また玄沢も兼葭堂の本草学の知を自らの学問へと取り込んでいっ

た。本草学の知は開放されながら他の学問の知へ影響を及ぼし相互補完されていくものであった。

そして当時の文人代表でもあり多くの交遊関係を持っていた南畝にとって、兼葭堂は求める知識を蓄えている知の集積所の一つとなっていたことも判明した。そして兼葭堂は質問という働きかけを行えば回答が与えられる装置として作用していた。江戸時代には非常に多くの人物が兼葭堂の知を利用していたのである。

知の集積所でありそこから回答を引き出す装置でもある兼葭堂が南畝に行った回答とは、求める知識を単独で提示するものではなかった。兼葭堂の回答の手段とは意味を明らかにするだけの辞書的な働きを持ったものではない。兼葭堂の回答は相手の目的に応えると同時に、それと関連づけられる項目の文献や知見へと思考を更に繋げていくものである。兼葭堂との対話によって知は広がり、そして膨らんでいく。

本草学では常にモノは外部との間に生じる関係と共に解説される構造を持っていた。本草学の知とは、ありとあらゆる現象を相互に関連付け、結び付けることによって構築されていく関係と影響の集合体であり、それを「出来事」として理解するものである。

このような本草学が記述してきた知の強い影響を受けている『六物新志』からは、広範に普及しつつあった本草学が多くの人間を刺激していたことが分かる。その影響は語学や医学、蘭学から絵画まで及び、それらの技術や知識を大きく発展させるにいたった。

本草学は学問でありながら人間同士の交遊を繋ぐものとなり、知という情報を伝達していくシステムそのものとなっていたといえよう。この「システム」とは、蘭学やその他の学問と相互に影響を及ぼしあい、知を補完し合う関係を作り上げたうえで実行する本草学の「仕組み」のことを指す。

この知のシステムを維持し更に発展させる最も巨大な組織こそ兼葭堂でありその書斎であった。ありとあらゆる分野の知を兼葭堂は蒐集し、そして結びつけながら回答することで質問者の思考の幅を広げ、知を活性化させていく。兼葭堂とは関係と影響の網目構造を張り巡らした本草学の知のガイドであった。

知の日本化を目指し、モノを通じてありとあらゆる現象を究め続けてきた本草学は、自らが作り上げてきた「関係」と「影響」の構造を 18 世紀の日本の上に実際に展開させるにいたる。時代そのものが本草学の知の現場となり、その「複雑な」構造のガイ

ドとして本草学者は存在する。そして本草学は蘭学や蘭画など新たな学問領域を進展させるシステムそのものともなったといえよう。

終章

1. 各章の統括と本草学のその後

本論文では 17 世紀から 18 世紀にかけて日本で発展した本草学の知の構造を再構築するために、当時の本草学者たちの活動や本草学書の内容から分析した。まずは各々の章の統括を行う。

第 1 章

第 1 章では徳川家に初めて迎えられた儒者である林羅山による『新刊多識編』を分析した。『新刊多識編』の目的はモノに対する日本語での呼称と名称の蒐集をし、それらを中国古典と照応させることである。

この『新刊多識編』からは本草学が如何にモノを「名づけて」いるかが分かる。たとえば同じ「雨水」であっても梅雨や立春など季節との関係の中で名は変わり、意味も異なるものとして扱われている。そして各々の名の意味を『新刊多識編』は思考し、日本におけるどの季節の雨を指す名かを考察する。また東を流れる川の水と長い距離を流れてきた水はまた異なり、器物や人体に接する水も各々の状態に合わせて個別の名を与えられる。

本草学にとって季節や時期の違いや地域差などの環境の変化はモノの価値を変える情報なのである。そして人体や器物との関係も本草学にとってモノの意味を新たに捉え直す要素となる。よって本草学は科学的性質を基準とした分類を行い、整然とした体系を作り上げる学問ではない。本草学とは吟味の対象となるモノを、天地や人間との関わりの中で考察し、その影響の内容と共に記述する学問である。

また『新刊多識編』では和名を同定する作業だけではなく、モノの呼称を追う中で判明した日本の習俗や物産を記述する。よって日本が目指す本草学とは中国古典の翻訳ではなく、環境の変化の中でモノの実態を究明するだけの学問でもない。日本の本

草学は中国とは異なる日本の環境や日本人の生活を「発見」する学問ともなる。

『新刊多識編』によって明らかとなったのは、本草学ではモノに影響を及ぼす環境との「関係」に基づいて名を定義し、名を持たされたモノはそれらに関わってきた歴史や人の生活などの情報を引き出す要因にもなる。よって本草学は複数の要素と情報がたえず相互に影響を及ぼす関係を思考し、その関係に伴って知識を記述していく学問であるといえる。本草学はありとあらゆる要素の相互作用の「有り様」が記述されるのである。

また『新刊多識編』は古今東西の古典から知を蒐集し、『本草綱目』を筆頭とした中国の本草学の構造を踏襲したうえで、日本の環境や日本人の生活に基づいた本草学を構築しようとしている。以上のことから「知の日本化」という目的意識と手段こそ、江戸時代の本草学を構築する基盤となっていたという可能性が考えられる。

第2章

第2章ではまず『新刊多識編』以降の日本での本草学の発展を考察した。『新刊多識編』の普及によってありとあらゆる事物に対する関心が日本に広まった。その発展は暦や辞書、農業書などの増加を促し、後の『和漢三才図会』の系譜にも繋がる百科事典も登場した。17世紀の日本には天地人にまたがるあらゆる知識を事典として網羅し尽くす知と、実用に徹底した知識と技術を日本のあらゆる環境の中で体系づけた知が展開していた。

このような「事典」と「実用」の手段が模索される時代に本草学も影響を受け、食物本草の分野の活性化が起こった。その嚆矢でもある『庖厨備用倭名本草』は漢語、和語、俗語などを交えて書かれた非常に平易な内容となっている。知識の実用化と啓蒙意識は知識を受容する層の拡大のみならず書籍の記述にも変化を及ぼしていることが分かる。

そして加工品を含む日本産の食物について記述した『本朝食鑑』が登場する。ありとあらゆる事物に目を向けながら、実用的な知識を追究し、普及しやすく受容しやすい記述が模索される時代の流れの中で、本草学は中国からの古典や実際の輸入品を通じて「日本」を再発見し、再確認する学問にいたりつつある。この時代の中で貝原益軒は本草学を研究し、『大和本草』が出版される。

序文で『本草綱目』の分類法に異議を唱える『大和本草』は、物理の究明という哲

理の追究と、民生日用の一助という通俗的な目的意識が融合した末に成立した本草学書である。『新刊多識編』と同様にモノは環境の変化や人間との関係の中で分析され、その相互作用の有り様を記述されている。しかしモノはただ利用手段のみ言及されるのではなく、解説はモノと人間の関係を論じるだけのものではない。『大和本草』の解説とはモノの境界を画定するものではなく、またモノ同士の間を裁断するものでもない。季節などの外部からの影響によって生じる変化や、草木を愛しむ人間によって品種改良が進められた歴史など、常にモノは外部との間に生じる関係と共に解説される。その解説は連続的なものであり、そして集合的なものとなっていく。『大和本草』の考察の対象となるものはモノだけではなく、環境や人間、そして日本という国の歴史や文化、そして日本人の心性である。それらは全て知の対象でありながら影響の実態を究明するための手段ともなる。

『大和本草』の本草学とは、概念ではなく経験を根拠に置くことで人間とモノ、そして自然の関係の渦を活写することで日本の文化や歴史、心性などを分離させることなく同時に解読するものである。『大和本草』で解読されるものは各々のモノの独自性であり、同時に日本という風土と日本人との間に渦巻く関係の構造である。その構造を作り上げる各々の要素は全てお互いを論じるものでありながら、知の全体を構成し、考察するものともなりうる。本草学とはこのような「全体」を考察し、構築させる学問であるといえる。

本草学の知は「生きている」のである。この「生きている」ために全体が一つの要素に還元できない。「生きている」知を持つ本草学は、リンネの分類法のように人間を取り巻く世界を階層的に並べるものではない。本草学は世界を階層に並べることで、下の階層の性質が理解できれば一つ上の階層の性質は自然と理解できるというような「還元主義」の学問ではない。「生きている」本草学の知は個々を要素に個別に分解して分析することによって全体を見渡そうとする学問ではなく、あくまでも「全体」との関係の中で個々を論じ、「全体」を構成するものである。

『大和本草』から分かる本草学の「複雑な」知の構造とは、多くの事物や心性が立体的に複合し、互いに関係づけあう構造を取るものである。またモノが環境から受ける影響と変化を知るとは中国とは異なる日本という国を知ることにも繋がり、日本人の生活と心性を改めて省みるものとなった。この日本へのまなざしこそ江戸本草学を成立させる要因の一つであり、ここでも「日本」と「モノ」は互いに影響関係にあ

る。

江戸本草学にとってありとあらゆるものの蒐集と集合によって構築される全体は、日本の環境や歴史などを含めた個々の構成要素の相互作用によって変化し、また各々の構成要素も全体の変化の中で論じられるものである。この仕組みこそが江戸本草学の知の体系である。

第2章では「全体を構成している各々の要素は各自のルールによって機能しているが、局所的な相互作用によって全体の状態が変化するだけではなく、その全体的な状態によって個々の構成要素の機能や関係が変化していく」本草学の仕組みは、現代の自然科学の分野で注目されている「複雑系」の定義に近いことを明らかにした。

第3章

第3章では益軒とも交流があり、その見識が「珍ラシキこと」と評価された恕庵の本草学を分析した。儒学を基盤とする学者社会の中では本草学を学ぶことは非常に軽んじられていたが、恕名とモノの一致を目指す「正名」という目的意識を掲げた恕庵の本草学は儒教を中心とする学者や文人との知的交流によって育まれ、同時に藩主や幕府といった権力が望む公的な目的にも影響を与えた。

恕庵の生前に唯一出版された『用薬須知』を分析すると、恕庵は薬物として供される部位のみならずモノ全体を詳細に観察し、その形体を詳細に記述していることが分かる。名を初めとするモノをモノたらしめる総体的な情報の記述によってモノの知を提供しようとする試みこそ『用薬須知』であり恕庵本草学であるといえる。恕庵本草学が記述した知とは、他のいかなる存在とも同一ではなく、等質でもない、唯一の存在であるモノの「情報」である。そして形状や味覚といった内的な構成因子のみならず、環境や人間の生活などの外的要因と接する部分まで含めて総体的に解説されたモノの総合の情報である。同時にモノを取り巻く諸現象が呼称を中心に活写され、時に過去の知が修正されることによって、人間の生活や心性を含んだ「現実」が顕現していくのである。

恕庵本草学の特徴は実体験に基づいた活動のみならず、対象に対する詳細な観察力を要求するところにある。そして諸対象の実態をそれらを取り巻く現象と共に記述する。それは歴史や古典、風土や環境、そして人間の心性にまでまたがり、互いの影響を記述しながら全体を分析する知の構造を構築するだけに留まらない。

「名」と「実」の一致を目指した恕庵本草学は、現象の連続的な記述と歴史の修正によって、古典の中にある言葉のような概念や、儒学的な思想と思弁の中で繰り広げられてきた知の構造を現実に顕現させようとする学問であるといえる。恕庵の本草学の「複雑系」はこれまでの江戸本草学よりも遥かに優れた観察力と分析力によって成立する構造であった。

第3章では「珍らしきこと」と評価され、政治にも求められた恕庵の本草学の知の構造と手段を解明した。この恕庵の門下からは後に多くの本草学者が登場する。

第4章

第4章では薬品会という本草学の活動と、会に出品されたモノの解説目録書である『文会録』と『楮鞭余録』の内容を分析した。益軒の登場によって本草学は古典を精査する机上の学問ではなく実物とそれらを取りまく現象でもって現実を構築し、日本を俯瞰するものとなった。恕庵はそこに更に詳細な観察力を要求し、構築される知の構造から現実を顕現させる学問とした。日本全土を視野に入れ、方言や民俗など人間生活に関わる知も蒐集することを目的する本草学は有志の協力が必要な学問であると認識されるにいたる。また享保の改革の影響により、全国各地で「モノ」への関心が高まった。江戸時代の本草学は全国へと拡大し、また多くの人間を繋ぎ合わせる学問となっていく。

薬品会の経験を反映させた『文会録』の記述は出品物の論評や解説にとどまらず、これまでの古典の「言葉」の解釈でもない。また薬品会の会場は身のまわりの多くの事物に関する漠然とした知識の集積でもなければ、『文会録』が記述したのは雑多な知の蒐集でもない。『文会録』は時節や気候などの自然がモノに与える変化という現象や見知らぬ土地や国の環境や文化、民俗へのビジョンが議論によって明らかになっていく様子を「衆評」などの言葉によって記述する。そして『楮鞭余録』の解説は風鳥、帯箭鳥、鯛ムコノ源八、ハギウオ、サカテザメなど動物類が非常に多く、化石類にも及んでいる。『楮鞭余録』からは薬物であることに拘ることなくモノを観察し、知を得ていく学問を本草学とする気運が育ちあがりつつあったことがよく分かる。そしてモノを中心にして移動する記述は日本や外国の文化や歴史を俯瞰するほど拡大する一方で日本のローカルな部分がクローズアップされるほど微細な解像度を持つものでもある。

薬品会の解説目録書は、薬品会という会の「様子」が記述され、「本草学の現場で起こっている出来事」が知の構造に組み込まれたことが、これまでの本草学書と異なる。本草学は「本草学を通じた交友関係」と「その結果起こった出来事」いう新たな要素を知の体系の中に組み込んだことになる。また議論によって古典の知識は修正され、知を常に当代のものへと更新されていく。

薬品会の様子を編集し、モノを中心にして日本を再確認しながら海外の環境や歴史にまで記述を広げた『文会録』と『楮鞭余録』は、薬品会という画期的な催しの様子を知ることができるものである。そして当時の学者たちがモノのどこに注目し、そこから如何なる知を築き上げ、記述しようとしていったのかを知る、本草学の知の編集の系譜の手掛かりとなる本であるといえる。

薬品会の登場と共に、本草学が本草学者自身をも研究対象として取り入れ始めた可能性が指摘できるのである。本草学の「複雑さ」はその構成要素を更に増やしている。

本章では当代を生きる「人」が、全体を論じ、部分に対して影響を与える要素の一つとして、本草学の知の構造に組み込まれ始めたことが明らかになった。

第5章

第5章では平賀源内の『物類品隲』の分析を通じて、薬品会を開催した人々の経験が如何に記述に反映されているのかを考察した。記述の対象となるモノはこれまでの本草学書とは異なり、薔薇露やキヨルコなど舶来品が多い。またそれらの形状だけではなく、西洋の技術や長崎で行われたモノの受け渡しの実態などが記述される。薬品会とは限られた人間達だけに共有されていた知識が「開放」されていく場であった。それまでは長崎でしか得ることのできなかったモノとその知識が、薬品会の会場で大勢の参加者に伝えられていくのである。また日本のローカルな場所の情報や、外国の人間達が培ってきた製造法や採取法など、これまでは特定の間人しか知らなかった経験や知恵も会場では開放され、多くの人々に共有されていくのである。それは実際のモノを目の前にした視覚による経験を通じて伝搬していくものであった。

また『物類品隲』の特徴として具体的な個人名が頻出し、その各々の人物の活動が詳細に記述されていることがあげられる。薬品会の登場によって、これまでの本草学の知は会の様子と同時に記述されるようになった。それに伴い、本草学の興味は本草学者自身にも向けられ、それに影響を与えた具体的な人間たちへの人間性や活動へと

知が求める範囲は広げられていく。本草学は今を生きる人間の現実的な触感を感じさせる学問になっていくのである。本草学を取り巻いている現象はまた「生きて」いる。その実態を『物類品隲』は写し取り、編集の手段によっても明らかにした。

本草学は当代を生きる具体的な活動をしている人間たちが、今、どこで、どのような知を蒐集し、何を実行したのかを知る学問へと至っていく。薬品会の登場と『物類品隲』の出現によって、本草学は人間という現象を記述するものであり、またそれらが織り成す「出来事」を知るものとなっていく。第5章は本草学は更に動的に、そして現実を反映したものとなっていることを明らかにした。

第6章

第6章は、薬品会の参加経験があり本草学を嗜んだ木村兼葭堂を中心におくことで江戸時代の日本での本草学の受容を分析した。兼葭堂は多くのモノを蒐集し、知を研磨した。そしてそれを惜しみなく外部へと開放し、多くの人々が兼葭堂の知を求めてやってきた。その内容は本草学に関わることから地理、そして歴史にまで及び、外交や海外情勢などの社会問題にまで至るものであった。

また兼葭堂自身も蘭学者である大槻玄沢のような人物と出会うことで自らの知に磨きをかけた。また玄沢も兼葭堂の本草学の知を自らの学問へと取り込んでいった。玄沢の著作である『六物新志』を見ると、『用薬須知』や『物類品隲』などの本草学書から知識を得ていることが分かる。よって蘭学とは決して西洋の知の模倣や究明を目的とする学問ではない。また本草学の知を西洋の知識で修正するだけの学問でもない。蘭学とは東洋の知と西洋の知を融合させることによって日本独自の知を構築していく学問である。そしてこの異文化の知を日本化しようとする知的活動には本草学の強い影響があることが『六物新志』からは判明した。本草学の知は他の学問の知へ影響を及ぼし相互補完されていくものであった。

そして当時の文人代表ともいえ、幅広い交友関係を持っていた南畝にとって、兼葭堂とは求める知識を蓄えている知の集積所の一つであった。そして兼葭堂は質問という働きかけを行えば回答が与えられる装置として作用するものであった。

本草学は学問でありながら人間同士の交遊を繋ぐものとなり、知という情報を伝達していくシステムとなっていたことが明らかになった。この知のシステムを維持し更に発展させる最も巨大な組織こそ兼葭堂でありその書斎であった。ありとあらゆる分

野の知を兼葭堂は蒐集し、そして結びつけながら回答することで質問者の思考の幅を広げ、知を活性化させていく。兼葭堂とは関係と影響の網目構造を張り巡らした本草学の知のガイドであった。

知の日本化を目指し、モノを通じてありとあらゆる現象が織り成す関係の構造を究め続けてきた本草学は、自らが作り上げてきた「関係」と「影響」の構造を 18 世紀の日本の上に実際に展開させるにいたる。時代そのものが本草学の知の現場となり、その「複雑な」構造のガイドとして本草学者は存在する。そして本草学は蘭学や蘭画など新たな学問領域を進展させるシステムそのものともなった。

以上が本章のまとめである。この後、江戸時代の本草学は小野蘭山の登場を迎える。蘭山は恕庵の門下生でもあり、京都で私塾を開くなど本草学の講究に専心した人物であった。寛政 11 年に幕命で医学館に赴任し、本草学の講義を行った。蘭山ほど多くの門人を輩出した本草学者はいない。

蘭山門下である山本亡羊が自らの家塾である「読書室」で始めた薬品会は、文化 5 年（1808 年）からほぼ 60 年に渡り、殆ど毎年のように行われた。しかしその内容は前時代の薬品会とは徐々に異なっていき、『詩経』に載っている草木だけをとりあげる「詩経所載草木会」などのような「特集展」が開催されるようになった。また天保 2 年（1831 年）に名古屋で行われた薬品会は一般の観覧も許可し、万を越える観衆が押し寄せた。薬品会はモノを観覧する「展覧会」へと変わり、非常に大衆的なものと変化していったことが分かる。珍しく変わったモノを中心とした薬品会は、医学館や本草学者の手から離れていく。そして見世物業者らが薬品会を名乗る興業を打ち出すようになり、薬品会は娯楽の一環として受け取られるようになった。

また尾張で活動した蘭山門下には水谷豊文がいる。文化 6 年（1809 年）に出版した『物品識名』は和名と漢名を照応を目的にしたものだが、従来の本草学書と異なるのは和名を先に掲げていることである。イロハ順に並んでいるが、「イ子」の項目の後に一段下げて「ウルシ子」「モチゴ子」などを続ける。属や種などの段階を区別する配列を試みているのである。またオランダ語やラテン語などの書きこみもあり、蘭学からの影響を著しく受けていることが分かる。この試みは、文政 12 年（1829 年）に日本産の植物の和名と学名を照応させ、リンネの分類法を紹介した伊藤圭介の『泰西本草名琉』へと受け継がれていく。本草学は徐々に西洋の体系を取り入れた植物学へと転

身を遂げ、奇妙なモノへの好奇心と知的興奮は娯楽として消化されていくようになる。本草学は植物学や娯楽などへと分解されていったのである。

2. 本草学とは何か

本草学に対して西村は「個物に対するなみなみならぬ関心であり、名と物とをめぐり旺盛な枚挙と緻密な考証の精神」²⁷¹があることを指摘すると同時に「個物に関する知識を総合してひとつの理論や学説をつくりあげる。そしてその知識を秩序付けて体系化していくという姿勢においてはなほだ弱い」²⁷²とする。そのうえで「個々の事物に対する強い関心・好奇心とはうらはらに、事物全体を見通してそれを統括し、ある理論なり体系なりをみずから構築しようという意識の低さないし欠如」²⁷³が本草学を近代科学として成立させることがなかった原因とする。

しかし本論文で江戸時代の本草学が「個物」のみを重視したわけではなく、知識の相互関係を蔑ろにしていたわけではないことを明らかにした。しかし本草学の手段と目的は近代科学とは異なり、相容れないものである。

近代科学とは実証と論証によって対象となる事物（それはモノや自然だけでなく物理現象も含む）の解明を求めるものである。対象を可能なまでに単純な状態にまで還元することで結果を処理し、検証するものだ。このような事物や現象を階層構造で分類した末の還元主義に基づいた探究は、本草学が求め、構築してきた知の構造とは全く異なる。本草学の学問観は近代科学とは異なる価値観のうえに成立している。

階層構造による分類と還元主義は、リンネが生殖器官に注目して全ての植物を網と目に整理した手段に近い価値観である。この価値観は明治以降の日本の学校教育で取り入れられた「多節動物」や「多肢動物」など動物の基本構造の異同に基づく分類法や、双子葉、単子葉などの形状による植物の分類法にも受け継がれる。階層構造に基づく分類と思考は非常に整頓されているがゆえに機械的である。機械的であるがゆえに、分解しても個々の要素の意味は変わらない。単子葉の植物は単子葉のままであり、全体の秩序が瓦解することもない。

しかし本草学は要素に分解できない。本草学は分解可能な要素の単純な組み合わせで成立する学問ではない。本草学は「ありとあらゆるモノ、自然現象、人間の生活や歴史、心性、活動などが常に相互に影響を及ぼしあっている」その状態を見究め、複数の要素が組み合わさることによって変動を続ける世界を構築する学問である。よっ

て一つの要素に還元しようとする、学問としての本質が抜け落ちてしまう。

本草学は決して「個物」を重視する学問ではない。12月の雪は「蠟雪」と呼称されるように自然全体の振舞いの中で雪という要素の意味は変わり、「芒硝」の文脈は形状や性質だけではなく人間の交流を交えることで本草学の世界の出来事を知るものへと変化する。本草学の知とは決して分節化されることがない。本草学の知は複雑なものであり、構成要素の機能・振舞いは全体の文脈の中で決定されるからである。²⁷⁴そしてその複雑な構造を構築していくことこそ本草学の目的であり、知そのものなのである。

個物に分解されることなく、記述が分節化されることもない本草学は、「ありとあらゆるものの関係」を追究し、分析する学問である。これは「関係の学問」ということができる。しかし本草学は徐々に西洋の体系を取り入れた植物学へと分化し、薬品会に代表されるような奇妙なモノへの好奇心と知的興奮は見世物に近い娯楽として消費されていくようになる。本草学は植物学や娯楽などへと分解されていったのである。

ならばこの「関係の学問」は現代には残っていないのだろうか。本草学とは終わった学問であり、ありとあらゆる現象やモノが常に相互に影響を及ぼしあいながら変動を続ける世界を、その関係と影響のまま理解し、追究しようとする学問は残っていないのだろうか。

現代では「生物と環境の相互作用」を研究する生態学があり、「人間と環境の相互作用」を追究する人類生態学も存在する。

鈴木継美は『人類生態学の方法』の中で次のように述べる。

内在化された環境は個体の遺伝的、生理的、行動的特性に関与する。そこで、生きているということは、形成された内在環境と外在環境の絶え間ない調整であると言える。……（中略）……代を重ねて、生きてきた環境の記憶が遺伝子によって伝えられる仕組みは生物学的機構である。個体の中に情報を分散させ、新しい環境に対応するにあたって個体水準で扱うのがこの機構の特色である。それに対して、文化的機構は個体群水準のものである。人間がどのような環境に生きてきたか、それに対してどのように対応してきたかを伝える機構として、社会的伝承を図るという特色がある。人間の行動の形成は、個体の生まれ落ちた社会の中

で進行する。この社会に特有の思考と行動の様式をとりあげ、それを文化と呼ぶと、行動は固有の文化の中で形成されるということになる。……（中略）……人類の長い歴史の中で多くの場合近似的にそうであったように、先祖の生きてきた環境が変化することなく新しい個体にとっての環境として働き続けるなら、生物学的機構と文化的機構との協同の下に伝えられる情報は、生存にとって有意義なものとなる。しかし、環境が急変し、文化的機構が有効に働かなくなると、われわれは生物学的機構に強く依存する結果となる。文化的機構を作っているいくつかの機作のそれぞれについて、その個々が環境の変化の下でどのように機能するか問題となる。（鈴木,1980年,p22）

また人間が作り上げてきた生活技術と環境についても、

人間の行動を問題にすると、直ちに組織・制度、その運営・管理が、そしてまた人々の信念・信仰とその制度化された状態としての儀礼・宗教などが考慮すべきこと項として意識に上ってくる。これらもまた文化のそれぞれの部分であるが、大きな規模の生活集団（たとえば国家）になるほど、その仕組みは複雑さを増してくる。技術がどのようにして複雑な仕組みを通して環境を作り出すかを研究することが今後の人類生態学の重要な研究課題となる。（鈴木,1980年,p23）

人類生態学は自然のみならず文化や遺伝などの相互作用からも人間を追究し、全体の関係を究める学問である。それは人間が生きる環境を俯瞰し、文化を見出すものともなる。この手法と目的は本草学と非常に近いものである。

また人類生態学だけではなく、科学そのものが条件によって起きる変化を前提とし、変化そのものを分析する学問である。たとえば岩石は地表と地中では構造が全く異なり、圧力や温度変化でも組織や鉱物組成が変化する。原子の結合は条件が変われば変換し、別のものと結合する。そして新たな物質を作り上げるのだ。科学とはまさに「関係」を論じ、究明する学問である。よって本草学も「関係」と「変化」を重視する科学的精神によって成立する合理的な科学である。そして現代以上に本草学は「人間」の介入を重要視しているのである。

近代化によって学問は知識を分類し、整然と体系づけることには成功したが、人間が引き起こした大きな干渉を無視するものであった。本草学を植物学や分類学の系譜の中で考えると近代化の過程で消滅した学問として捉えられ、「関係」を論ずる学問は実際に中断されている。しかし人類生態学²⁷⁵によって再び、「関係」を論じながら「人間」を究明する科学が登場する。

環境とモノの相互作用を究明すると同時に人間の歴史と文化を知り、人間同士の関わり合いを追究する本草学もまた「科学」である。この「科学」とはきわめて合理的な「関係の科学」であり、決して江戸時代で消滅した学問ではなく現代にも受け継がれている知であり手段である。

本論文の目的は従来の研究で独創的な発展を遂げたとされる本草学の知の実態を究明することにあつた。その為、17 世紀から 18 世紀にかけて出版された名だたる本草学書を分析することで本草学の知の構造を歴史的に見つめ再構築していった。その結果、江戸時代の本草学は「生きている」知を持つ「関係の科学」であつたことが明らかとなった。しかし益軒や恕庵、源内などの各々の本草学者がどうしてそのような知を作り上げることができたのかといった点については未だ不十分である。たとえば「源内がどうして「出来事」を本草学に取り入れることができたのか」というような人物論には切り込んでおらず、また「本草学者らが日本をどうとらえていたのか」という本草学者の日本意識も論じきれていないと言ひ難い。また同時に、「江戸時代にとって本草学は何故必要だったのか」という、本草学が時代に果たした機能についても研究の余地は多く残されている。そしてこのような知の構造を持った学問をどうして江戸時代が作り上げることができたのか、すなわち時代論としては更なる検討が必要である。

本草学が時代に与えた影響と役割については飢饉のような天災や享保の改革に代表される政治からの側面から論じることができる。また第 6 章で触れたとおり、蘭学や蘭画などとの関係も深い。「関係の科学」であり「複雑系」の仕組みを持つ本草学は江戸時代において非常に多くの分野に影響を与えた。

「複雑系」の分野では多数の要素がそれぞれ相互作用をすることによって全体が変化し、新たな性質を生み出す仕組みのことは「創発」とされる。「複雑系」の世界では必ずこの「創発現象」が起こっている。²⁷⁶時代の影響を受けながら蘭学や蘭画など新たな学問（性質）を生みだし、発展させるシステムそのものともなった本草学は時代

の「創発」を促す学問であるといえる。「複雑系」としての本草学が起こす「創発」現象として江戸時代を論じることは今後の課題としたい。

時代に「創発」をもたらす江戸時代の本草学は「生きている」学問である。社会の中で生きる人間の役割が状況の中で絶えず変化し、脳ニューロンの機能が脳全体の構成に依存しているように、常にあらゆる相互作用と影響の構造を記述しながら全体を理解する。そして本草学者の目的は、互いに相互作用を繰り返し、影響を及ぼしあう「生きた」世界の構造を究明し、関係と影響の有り様そのものを記述することで構成することである。本草学者が論じたのはモノという「個物」ではない。本草学者が常に見ていたのはモノの形状や薬性と同時に、モノに影響を与える自然の状態や環境の変化であり人間の歴史や活動や心性までが巡る世界全体であった。

「生きている」学問である江戸時代の本草学が見つめ、構築した知とは、モノの形状から人間の活動までありとあらゆる事物と現象が関係と影響を繰り返しては新たな展開を生み出していく時代および世界のかたちそのものであったといえよう。

本草学は現代の科学と同じく「関係」と「変化」を究明しようとする科学的精神の上に成立している。そして現代以上に情熱的な視線を「人間」へとそそぐものであった。そしてこの人間への眼差しは現代の人類生態学へと繋がるものでもある。

本草学とは決して終わった学問ではない。そしてその知の精神は未だ失われていないのである。

脚注

-
- ¹ 西村三郎はこの薬材・薬物という意味での〈本草〉が制度的に定着し、その後中国をはじめとする東アジアの漢字文化圏で広く使われるようにいったとする。そしてもともと植物を意味していた「本草」の語が何故薬物を意味するようになったのかについては「当時の薬物は草を本にしていたから、植物が薬材の主体を占めていたからと説明されるのが普通である。しかし、このあたりの具体的ないきさつに関してはなお不明というのが、実情らしい」とする。西村三郎 1999 年『文明のなかの博物学 西欧と日本^④』東京：紀伊国屋書店 p101
- ² 西村 前掲書 p101
- ³ 西村 前掲書 p101
- ⁴ 西村 前掲書 p101
- ⁵ 西村 前掲書 p4
- ⁶ 西村 前掲書 p5
- ⁷ 西村 前掲書 p5
- ⁸ 白井光太郎 1908 年『増訂日本博物学年表』東京：丸善 p220
- ⁹ 上野益三 1972 年『日本博物学史』東京：平凡社 p3
- ¹⁰ 上野 前掲書 p5
- ¹¹ 上野 前掲書 p6
- ¹² 上野 前掲書 p6
- ¹³ 杉本つとむ 2006 年『江戸の博物学者たち』東京：講談社 p13
- ¹⁴ 杉本 前掲書 p21
- ¹⁵ 杉本 前掲書 p22
- ¹⁶ 白井光太郎「博物学者トシテノ貝原益軒」1992 年『大和本草』
- ¹⁷ 杉本つとむ 2006 年『江戸の博物学者たち』東京：講談社 p51
- ¹⁸ 西村三郎 1999 年『文明のなかの博物学 西洋と日本^④』東京：紀伊国屋 p110
- ¹⁹ 西村 前掲書 p110
- ²⁰ 西村 前掲書 p112
- ²¹ 西村 前掲書 p112
- ²² 上野益三 1972 年『日本博物学史』、東京：平凡社 p43
- ²³ 西村三郎 1999 年『文明のなかの博物学 西洋と日本^④』東京：紀伊国屋 p122
- ²⁴ 西村 前掲書 p126
- ²⁵ 西村 前掲書 p127
- ²⁶ 杉本つとむ 2006 年『江戸の博物学者たち』東京：講談社 p70
- ²⁷ 杉本 前掲書 p71
- ²⁸ 上野 前掲書 p52
- ²⁹ 上野 前掲書 p52
- ³⁰ 太田由佳 2012 年『松岡恕庵本草学の研究』、京都：思文閣出版
- ³¹ 加賀藩の第 4 代藩主であり、恕庵の本草学の師である稲生若水が仕えた。
- ³² 「白石先生紳書」『日本随筆大成』第 3 期 13 巻 p432
- ³³ 磯野直秀 2001 年「薬品会・物産会年表(増訂版)」『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』、神奈川：慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、29 号、p55-p65
- ³⁴ 上野利三 2001 年「天保三年八月射和延命寺における読書室物産会と竹川竹斎」『松阪大学地域社会研究所報』、三重：松阪大学地域社会研究所、13 号、p 346-319
- 吉野俊哉 2002 年「幕末期の「物産会」に見る物と人の交流 京都・大坂の「物産会」に
出展された越中・立山での採取品から」『研究紀要』、富山：富山県立山博物館、9 号、p15-p45
- 吉野俊哉「嘉永 6 年の「富山藩薬品会」開催とその出展品―越中での博物的本草学受容

の視点から一」『研究紀要』、富山：富山県立山博物館、8号、p61-p92

35 西村 前掲書 p135

36 「社」および「連」とは同好という共通項のみだけで結びついた緩やかな集団のことと定義する。

37 西村 前掲書 p136

38 杉本 前掲書 p83

39 中村真一郎 2000年『木村兼葭堂のサロン』、東京：新潮社

40 井庭崇 福原義久 2010年『複雑系入門』、東京：NTT出版、p6

41 『羅山先生年譜』の慶長9年(1604年)の条には、それまで羅山が呼んだ和漢の書物の一つとして『本草綱目』が既に挙げられている。よって『本草綱目』が最初に舶来したのは慶長9年以前である。

42 慶長13年(1608年)に曲直瀬玄朔が『能毒』を増訂したさい、『本草綱目』を参照している。『本草綱目』は医家にも利用される書物であった。また『羅山先生年譜』に「或ハ御薬調和ノ席ニ陪シ、和剂方等ヲ読ミ、之レヲ解説シテ以テ医者等ヲ諭ス」とあることから、羅山自身も中国の医書や本草学書を読む人物に役立てようとして『多識編』を著した。

43 『本草綱目』と羅山の『多識編』の版と展開については西村三郎『文明のなかの博物学 西洋と日本④』p108~p109が詳しい。

44 本稿で利用する『新刊多識編』は寛永8年(1631年)板のものであり、その中でも早稲田大学図書館で所蔵されている版である。『新刊多識編』を含める『多識編』の諸本については、林羅山著 杉本つとむ解説『新刊多識編』1972年、文化書房博文社の解説が詳しい。

45 林羅山著 杉本つとむ解説『新刊多識編』1972年、文化書房博文社。解説p二四

46 これについて杉本つとむは「結局、羅山は中国書と日本書とを適当にミックスさせて編集したということになる。しかし『本草綱目』にみえる〈序列・百病主治薬〉など本草学の概説や時珍の主張するところはまったく削除して、いわば骨組みをほぼそのまま借用したことになるのである」と『新刊多識編』の骨組みを中国の知の「借用」という言葉で表現する。そのうえで「だいたい日本人の外国文化や学術の摂取や受容にあっては、一つのパターンがあってそのまままろごと模倣する方法はとらない。直接に必要なと認めたところ、さらに補うべきところをうまく他の資料からもぬきだして、編集しなおすのである」と日本人の外国文化の受容のパターンを杉本は論じる。(杉本つとむ 2006年『江戸の博物学者たち』東京：講談社 p42-p43)。このパターンから『新刊多識編』は逸脱するものではない。本章はこのような評価を受けた『新刊多識編』の具体的な記述内容から、『新刊多識編』が作り上げようとした知の構造を見出そうとするものでもある。それは江戸時代の本草学が構築しようとした知の基盤を知るものともなる。

47 林羅山著 杉本つとむ解説 1972年『新刊多識編』文化書房博文社 p6

48 林 前掲書 p27

49 林 前掲書 p207

50 これを杉本つとむは「日本に古くからみえる〈名寄せ〉というのに近いものである」と考察している。(杉本つとむ『江戸の博物学者たち』2006年、講談社 p44)。

51 林 前掲書 p5

52 林 前掲書 p5

53 林 前掲書 p6

54 林 前掲書 p7~p8

55 林 前掲書 p10~p12

56 林 前掲書 p40

57 林 前掲書 p40

58 林 前掲書 p215

- 59 西村は朱子学の盛行と結びつけ「朱子学の「格物致知」を単にお題目としてではなく、実際に人間界・自然界に存在するさまざまな事物に人々の眼を向けさせるうえで、なにがしかの貢献をしたことは疑いない」とする（西村 前掲書 p112）。また上野は朱子学に体系化された陰陽五行説が科学思想とは相容れないとしたうえで古義学の精神がのちの学問の中に生きているとする（上野『日本博物学史』p45）。
- 60 向井元升 1978 年『庖厨備用倭名本草』難波恒雄編集、大坂：漢方文献刊行会、p10
- 61 向井 前掲書 p10
- 62 籾米 向井 前掲書 p30
- 63 向井 前掲書 p188
- 64 貝原益軒『大和本草』白井光太郎考証、有明書房、1992 年 p5
- 65 原田信男は「日本の本草学が、中国本草学から自立して、本格的な博物学へと展開する方法と成果が提示されたことになる」とし（原田信男『江戸の食生活』岩波書店、2009 年、p178）、杉本つとむは「本草学の発展はやがて日本本草学ともいべき貝原益軒の『大和本草』によって旗があげられる」（杉本つとむ『江戸の博物学者たち』講談社、2006 年、p58）としている。
- 66 横山秀夫 1995 年『貝原益軒 天地和楽の文明学』東京：平凡社
- 67 井上忠「貝原益軒の科学」1・2『科学史研究』13・14 1949 年・1950 年
- 68 横山俊夫 1995 年「達人への道——『楽訓』を読む」『貝原益軒 天地和楽の文明学』平凡社、p44
- 69 杉本つとむ 2006 年『江戸時代の博物学者たち』東京：講談社、p58
- 70 『大和本草』は現在、国立国会図書館に宝永 6 年（1709 年）に出版されたものが保存されている。本論文で参照するものは全て平成 4 年に有明書房から発行された白井光太郎考証の『大和本草』である。
- 71 貝原益軒「大和本草自序」『大和本草』白井光太郎考証、有明書房、1992 年
- 72 貝原 前掲書
- 73 貝原 前掲書
- 74 益軒自身の宇宙観については牧克己「貝原益軒の宇宙観について」『支那学研究』32 号、1966 年、p42-p49 が詳しい。ここでは益軒の『慎思録』の「天地万物、皆是道中之物」という一文を「益軒によれば一気は宇宙を流れる生命力であるが、同時にそれが宇宙の道（理）そのものである」と解釈している。
- 75 西村三郎は『大和本草』における益軒の眼は、タイトルに本草と名乗っているにもかかわらず、本草家のそれではなかった。彼は明らかに博物学者の眼で天地の万物を見、そしてその性（性質）と理（道理）とを知ろうとした。益軒のそういう姿勢が、まずもって朱子学者としての彼の自覚からきていることは、疑いない。生涯おのれを朱子学者の徒として持してきた益軒にとって、「格物到知」、そして「窮理」はなににも増して、守り、かつ実行すべき命題であった。しかも、彼にとっては、そのさいの〈物〉とはなによりも具体的な自然物だったようである」と記述する。西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本 ④』紀伊國屋書店、1999 年、p125。また本草学と朱子学の関係についても西村三郎、前掲書 p103-p105 が詳しい
- 76 貝原益軒 前掲書
- 77 益軒の手段の模索に関しては「術」という概念のもとで研究されている分野でもある。辻本雅史は「益軒は『宇宙内のこと』すべてを自らの儒学の対象とし、人の万物への適切な関わり方を『術』と把握した。しかも『術』は学習することによって『知る』べきものであった。かれにとって、この『術を知る』とは、結局適切に『物を愛する』方法、つまり仁を实践する方法にほかならなかった。その場合、『物』の『性』を知らなければ、適切などとする。辻本雅史「学術の成立——益軒の道德論と学問観」『貝原益軒 天地和楽の文明学』平凡社、1995 年、p166

-
- 78 貝原益軒 前掲書
- 79 貝原益軒「慎思録」『貝原益軒資料集』ペリカン社、1989年
- 80 この一文の解釈について辻本雅史は益軒の『慎思録』を分析することで、「聖人の道は自ら是れ易簡、愚夫愚婦と雖も知り易く行ひ易き者」であるから、「平実切近」なる「易簡」の学が「下学」（手近な学）、そして「高深を極め」た段階の「上達」とは、「下学」をこえた抽象的な学にあるのではなく、こうした「下学の功積むこと久しくして自然にして得る者」つまり平実切近なる具体的事実即ち「下学」を積み重ねていった結果、その延長上におのずから達しうるものである。とする。ここからも益軒が具体的事実から窮理を模索しようとしていたことが明らかとなる。辻本雅史「學術の成立——益軒の道德論と學問觀」『貝原益軒 天地和樂の文明学』平凡社、1995年、p160
- 81 辻本雅史 前掲書 p180
- 82 貝原益軒「本草ノ書ヲ論ス」『大和本草』白井光太郎考証、有明書房、1992年、p7
- 83 益軒の「博学」について松村宏二は益軒の「博学」は「大和、衆知、広智、多識、聡明」といった言葉とよくいっしょに使われることを指摘する。松村宏二「君子の知」『貝原益軒 天地和樂の文明学』平凡社、1995年、p179-p198
- 84 貝原益軒『大和本草 上巻』白井光太郎考証、有明書房、1992年 p7
- 85 貝原 前掲書 p12
- 86 貝原 前掲書 p13
- 87 貝原 前掲書 p16
- 88 貝原 前掲書 p16-p17
- 89 貝原 前掲書 p22
- 90 水 貝原 前掲書 p71-p72
- 91 貝原 前掲書 p71
- 92 貝原 前掲書 p71
- 93 貝原 前掲書 p71
- 94 貝原 前掲書 p71
- 95 貝原 前掲書 p72
- 96 貝原 前掲書 p72
- 97 熱湯の解説は貝原 前掲書 p72-p73
- 98 浴湯 貝原 前掲書 p73
- 99 白饀 貝原 前掲書 p98
- 100 大麻 貝原 前掲書 p226
- 101 貝原 前掲書 p98
- 102 葱 貝原 前掲書 p152-p153
- 103 小葱 貝原 前掲書 p152-p153
- 104 温泉 貝原 前掲書 p74-p76
- 105 大豆 貝原 前掲書 p112-p113
- 106 小麦 貝原 前掲書 p119
- 107 粳飯 貝原 前掲書 p124-p126
- 108 陳倉米 貝原 前掲書 p127
- 109 貝原 前掲書 p126
- 110 殮飯 貝原 前掲書 p126
- 111 湯 貝原 前掲書 p73
- 112 貝原 前掲書 p73
- 113 貝原 前掲書 p74
- 114 貝原 前掲書 p5
- 115 石腦油 貝原 前掲書 p78

-
- 116 塩胆水 貝原 前掲書 p79
117 黒土 貝原 前掲書 p90
118 番椒 貝原 前掲書 p157-p158
119 南瓜 貝原 前掲書 p161
120 蕃薯 貝原 前掲書 p167
121 硫黄 貝原 前掲書 p91-p92
122 砒石 貝原 前掲書 p93
123 貝原 前掲書 p233
124 牡丹 貝原 前掲書 p233-p234
125 益軒の「楽しみ」については『楽訓』などから考察されている。また横山秀夫は「益軒は陶淵明の読山海経詩に親しんでいた。その詩は『山海経』とその付図の前で「俛仰（首を上下するだけで）宇宙を終える。楽しまざる復如何」とうたう。益軒はその意を、「天下之地異物を坐して歴観」できることが「君子」の「楽と為す所」と解している（『自娛集』2=247）。彼の本草学も、多分にこの「知知理乃楽」とならぶ「知知理乃楽」の延長上にあった」としている。横山秀夫 1995 年「達人への道—『楽訓』を読む」『貝原益軒 天地和楽の文明学』、東京：平凡社、p48
126 芍薬 貝原 前掲書 p234-p235
127 菊 貝原 前掲書 p235-p236
128 藤天蓼 貝原 前掲書 p297
129 エビネ 貝原 前掲書 p261
130 蘭 貝原 前掲書 p297
131 夜有光物ノ類 貝原 前掲書 p84
132 鬼火 貝原 前掲書 p84-p85
133 狐 貝原益軒『大和本草 下巻』白井光太郎考証、有明書房、1992 年 p268
134 野叉落利 貝原 前掲書 p276-p277
135 鬼奴 貝原 前掲書 p277
136 ここでのシステムとは日本語における「系」または「体系」のことをさす。
137 井庭崇 福原義久 『複雑系入門』1998 年 東京：NTT 出版 p6
138 『複雑系入門』では「複雑」という言葉と「システム」という言葉の両方が多義的である以上、『複雑系』の定義もまた多義的にならざるをえないとしたうえで、一般に考えられている『複雑系』のイメージの中で最も適切であると思われるものを採用している。
139 井原 前掲書 p6
140 本論文で参照する『【新校正】本草綱目』は全て、国立国会図書館に保存されている唐本屋八郎兵衛発行の正徳 4 年版である。稻生若水 1714 年『本草綱目 52 巻圖 1 卷附結髮居別集 4 卷本草圖 4 卷』請求番号：特一 1970
141 稻生若水 1714 年『本草綱目 52 巻圖 1 卷附結髮居別集 4 卷本草圖 4 卷』p10
142 稻生 前掲書 p12
143 稻生 前掲書 p12
144 稻生 前掲書 p12
145 南川 1777 年『閑散余禄』P21
146 本論文で参照する『用薬須知』は全て『近世漢方医学書集成 55』に収載されているものである。
147 百合 松岡 前掲書 p98
148 鶏冠花 松岡 前掲書 p112
149 白頭翁 松岡 前掲書 p44
150 胡蘆巴 松岡 前掲書 p113-p114
151 欵冬 松岡 前掲書 p98-p99

-
- 152 天麻 松岡 前掲書 p60-p61
153 松岡 前掲書 p60
154 松岡 前掲書 p61
155 人参 松岡 前掲書 p31-p34
156 玄参 松岡 前掲書 p36
157 蒺藜 松岡 前掲書 p67
158 甘草 松岡 前掲書 p37
159 白芷 松岡 前掲書 p51
160 肉桂 松岡 前掲書 p135-p136
161 胡黄連 松岡 前掲書 p42-p43
162 松岡 前掲書 p9
163 莪朮 松岡 前掲書 p72
164 連翹 松岡 前掲書 p127
165 滑石 松岡 前掲書 p162
166 黄栢 松岡 前掲書 p125
167 柴胡 松岡 前掲書 p43-p44
168 阿魏 松岡 前掲書 p67
169 葛根 松岡 前掲書 p56
170 蜜陀僧 松岡 前掲書 p158
171 菖蒲 松岡 前掲書 p52
172 生地黄 松岡 前掲書 p54-p55
173 この書簡は多治比郁夫による校注を経た全文が『杏雨書屋所蔵書簡集一』の p174～p176 に収録されている
174 吉宗が諸国産物調査を始めたのは若水の死去により未完に終わった『庶物類纂』の完成を求めたからだとも言われている。西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本④』1999 年 紀伊國屋書店 p130
175 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本④』1999 年 紀伊國屋書店 p133
176 木村兼葭堂が遺した「巽翁遺筆」である
177 本稿では恒和出版から出版された『博物学短編集下』に収載された「文会録」の記述を参照している。原本は国立国会図書館に保存されている。
178 戸田旭山 1982 年「文会録」上野益三解説『博物学短編集下』、東京：恒和出版、p28
179 『文会録』の「会例」は上野益三解説『博物学短編集下』、東京：恒和出版、p29-p32
180 『文会録』の「薬物会請啓」は上野益三解説『博物学短編集下』、東京：恒和出版、p27-p28
181 戸田旭山 1982 年「文会録」上野益三解説『博物学短編集下』、東京：恒和出版、p9
182 戸田 前掲書 p9
183 戸田 前掲書 p11
184 戸田 前掲書 p11
185 天茄 戸田 前掲書 p42
186 赤箭天麻 戸田 前掲書 p33-p34
187 李時珍『本草綱目』人民卫生出版社、1979 年、p730
188 戸田 前掲書 p37
189 戸田 前掲書 p37
190 薬舗紫苑 戸田 前掲書 p35
191 蝉花 戸田 前掲書 p37
192 矮菊 戸田 前掲書 p61
193 早藕 戸田 前掲書 p36
194 獨根大薊 戸田 前掲書 p66

-
- 195 白玉 戸田 前掲書 p38
196 濾水石 戸田 前掲書 p46
197 熊館芝 戸田 前掲書 p58
198 芟草 戸田 前掲書 p50
199 天竺黄 戸田 前掲書 p53
200 陽起石 戸田 前掲書 p53
201 檀香梅 戸田 前掲書 p43
202 磁石 戸田 前掲書 p39
203 藜蘆 戸田 前掲書 p40
204 不灰木 戸田 前掲書 p56
205 無名石草 戸田 前掲書 p57
206 麦門冬 戸田 前掲書 p59
207 馬檳榔 戸田 前掲書 p53
208 無名枯木 戸田 前掲書 p51
209 木綿并実 戸田 前掲書 p40
210 本稿では恒和出版から出版された『博物学短編集下』に収載された「赭鞭余録」の記述を引用している。原本は国立国会図書館に保存されている。
211 豊田 前掲書 p78
212 豊田 前掲書 p79
213 豊田 前掲書 p77
214 豊田 前掲書 p79
215 豊田 前掲書 p74
216 豊田 前掲書 p74
217 豊田 前掲書 p83
218 豊田 前掲書 p83
219 磁石 豊田 前掲書 p95
220 海鶏頭 豊田 前掲書 p97
221 羚羊角 豊田 前掲書 p98
222 山椒貝 豊田 前掲書 p105
223 豊田 前掲書 p101
224 海膽殻 豊田 前掲書 p103
225 石弩 豊田 前掲書 p111
226 阿勃参 豊田 前掲書 p108
227 釣藤鈎 豊田 前掲書 p119
228 真何首烏 豊田 前掲書 p101
229 朝鮮種人参 豊田 前掲書 p121
230 未定葉 豊田 前掲書 p123
231 夷果 豊田 前掲書 p124
232 平賀源内『平賀源内全集』入田整三編、香川：平賀源内先生顕彰会、1932 年 p1501
233 平賀 前掲書 p1503
234 本稿での『物類品隲』の引用は全て、1972 年に八坂書房から翻刻され出版された『物類品隲』の記述である。一次資料は宝暦 13 年に発行された『物類品隲』であり、原本は国立国会図書館で確認できる。平賀源内『物類品隲』杉本つとむ解説、八坂書房、1972 年
235 平賀源内『物類品隲』杉本つとむ解説 1972 年 東京：八坂書房 p167
236 松田泰代「史料から見た『物類品隲』出版経緯に関する一考察」『書物・出版と社会変容』5 号 2008 年 p63-p78

-
- 237 平賀 前掲書 凡例
238 平賀 前掲書 物類品隲序
239 平賀 前掲書 物類品隲序
240 平賀 前掲書 物類品隲序
241 平賀 前掲書 物類品隲序
242 金 平賀 前掲書 p5
243 沙参 平賀 前掲書 p38-p39
244 エブリコ 平賀 前掲書 p82
245 薔薇露 平賀 前掲書 p1-p2
246 礪砂 平賀 前掲書 p29-p30
247 キヨルコ 平賀 前掲書 p82.
248 雲母 平賀 前掲書 p12
249 粉霜 平賀 前掲書 p13-p14
250 金剛石 平賀 前掲書 p23
251 食塩 平賀 前掲書 p24
252 光明塩 平賀 前掲書 p25
253 崖塩 平賀 前掲書 p24
254 自然白塩 平賀 前掲書 p25
255 石髓 平賀 前掲書 p18-p19
256 戎塩 平賀 前掲書 p25
257 篤耨香 平賀 前掲書 p72-p73
258 石油腦 平賀 前掲書 p19
259 胆八香 平賀 前掲書 p73
260 胆八樹 平賀 前掲書 p73
261 龍骨 平賀 前掲書 p84
262 芒硝 平賀 前掲書 p27-p28
263 葦山代官の江川太郎左衛門のことである。
264 墨 平賀 前掲書 p3
265 「巽斎翁遺筆」は『兼葭堂雜録』に収録されている。『兼葭堂雜録』とは本稿で取り上げる初代木村兼葭堂の子孫である四代目兼葭堂の依頼によって、暁鐘成（寛政5年（1793年）～万延元年（1861年））が、初代兼葭堂自身が書き残した書画や器物についての情報や見聞した珍しい動植物についての考証に関する原稿を纏めたものである。安政6年（1859年）出版。本稿で参照する『兼葭堂雜録』は『日本随筆大成』第一期14巻に収載されたものである。
266 木村兼葭堂 1975年「兼葭堂雜録」『日本随筆大成』第一期14巻 吉川圭三発行、p18
267 本稿で参照する『兼葭堂日記』は全て藝華書院から出版された『兼葭堂日記 完本』である。
268 本稿で参照する『六物新志』は全て1980年に恒和出版から出版された『江戸科学古典叢書』32巻に収載されたものである。
269 混沌会、木村兼葭堂顕彰会編 2004年『先人旧交書牘—木村兼葭堂来翰集』、大阪:和泉書院
270 本稿で参照する『遡遊従之』は全て1971年に大阪府立図書館より出版されたものである。
271 西村 前掲書 p470
272 同上
273 西村 前掲書 p457

²⁷⁴ 井庭 前掲書 p7

²⁷⁵ 1965年に東京大学医学部の中に保健学科が作られた時に「人類生態学」という名称の講座が創設された。

²⁷⁶ 「創発」の概念については井庭 前掲書 p8～p9を参照した。

参考文献

一次文献

中島中良 1800 年『万国新話』早稲田大学所蔵、請求番号：文庫 08 B0078

稻生若水 1714 年『本草綱目 52 卷圖 1 卷附結髮居別集 4 卷本草圖 4 卷』国立国会図書館所蔵、請求記号：特 1-970

稻生若水『庶物類纂』国立国会図書館所蔵、請求番号：ふ-2

南川金溪 1782 年『閑散余録』大洲市立図書館、マイクロフィルム請求番号：3640032003

翻刻・校注

新井白石 1977 年「白石先生紳書」『日本随筆大成』第 3 期 12 所収、東京：吉川弘文館

大田南畝 1971 年『遡遊従之』、大阪：大阪府立図書館

大槻玄沢 1980 年「六物新志」『江戸科学古典叢書』32 卷、東京：恒和出版

貝原益軒 1992 年『大和本草』白井光太郎考証、東京：有明書房

貝原益軒 1973 年「楽訓」『貝原益軒全集』3 卷、東京：国書刊行会

木村兼葭堂 2004 年『先人旧交書牘 木村兼葭堂来翰集』混沌会編、大阪：中尾松泉堂書店

木村兼葭堂 2009 年『兼葭堂日記 完本』水田紀久編、東京：藝華書院

木村兼葭堂 1975 年「兼葭堂雑録」『日本随筆大成』第一期 14 卷、東京：吉川弘文館

木村兼葭堂 1980 年「一角纂考」『江戸科学古典叢書』32 卷、東京：恒和出版

杉田玄白 2000 年『蘭学事始』片桐一男翻訳、東京：講談社

戸田旭山 1982 年「文会録」『博物学短編集下』上野益三解説、東京：恒和出版

豊田養慶 1982 年「楮鞭余録」『博物学短篇集下』上野益三解説、東京：恒和出版

並河誠所 1978 年「五畿内志」上巻・下巻『覆刻日本古典全集』正宗敦夫編集、東京：現代思潮新社

平賀源内 1972 年『物類品隲』杉本つとむ解説、東京：八坂書房

平賀源内 1932 年『平賀源内全集』入田整三編、香川：平賀源内先生顕彰会

松岡恕庵 1980 年『近世漢方医学書集成』55 大塚敬節ほか責任編集、東京：名著出版

向井元升 1978 年『庖厨備用倭名本草』難波恒雄編集、大坂：漢方文献刊行会
李時珍 1979 年『本草綱目』郑金生 王咪咪 杨梅香 等編、中国：人民卫生出版社

雑誌文献・書籍・論文集

磯野直秀 2001 年「薬品会・物産会年表(増訂版)」『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』、
神奈川：慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、29 号、p55-p65
井上忠 1950 年「貝原益軒の科学」1・2 『科学史研究』13 号・14 号、東京：岩波書
店、p35-p40・p26-p32
上野益三 1991 年『博物学者列伝』、東京：八坂書房
上野益三 1972 年『日本博物学史』、東京：平凡社
足立卷一 1978 年「木村兼葭堂の博物標本」『博物館研究』13 卷、東京：日本博物館
協会、p11-p13
有坂道子 2004 年「木村兼葭堂の交友と知識情報」『国立歴史民俗博物館研究報告』116
号、千葉：歴史民俗博物館振興会、p111-p125
太田由佳 2012 年『松岡恕庵本草学の研究』、京都：思文閣出版
岡田武彦 1974 年「貝原益軒の儒学と実学」『西南学院大学文理論集』15 号、福岡：
西南学院大学学術研究所、p53-p87
片桐一男 1985 年『阿蘭陀通詞の研究』、東京：吉川弘文館
木村陽二郎 1988 年『江戸期のナチュラリスト』、東京：朝日新聞社
栗野麻子 2010 年「平賀源内と東都薬品会--本草学のネットワーク」『史泉』112 号、
大阪：関西大学、p10-p19
白井光太郎 1908 年『増訂日本博物学年表』東京：丸善
城福勇 1976 年『平賀源内の研究』東京：創元社
白澤恵一 2010 年「貝原益軒と宮崎安貞の『農業全書』との関係について」『日本産業
経済学会産業経済研究』10 号、p69-p78
鈴木継美 1980 年『人類生態学の方法』東京：東京大学出版会
杉本つとむ 2006 年『江戸の博物学者たち』東京：講談社
辻哲夫 1974 年「貝原益軒の学問と方法--「大和本草」における儒学と科学」『思想』
605 号、東京：岩波書店、p57-p70
滝川義一 1985 年『木村兼葭堂の蘭学志向（語学・本草学を中心に）』、東京：科学書院

筑波常治 2001 年「江戸時代における植物研究の三方向--貝原益軒を中心に」『生活文化史』40 号、p23-p30

西村三郎 1999 年『文明のなかの博物学 西欧と日本』上巻・下巻、東京：紀伊国屋書店

平野満 2001 年「薬品会・物産会の基礎的研究--富山藩の盆栽月次品評会「日新会」と富山藩薬品会--補論。『奇草小図』の印刷--金属活字」『明治大学人文科学研究所紀要』48 号、東京：明治大学、p413-p428

牧克己 1966 年「貝原益軒の宇宙観について」『支那学研究』32 号、広島：広島大学、p42-p49

松田泰代 2008 年「史料から見た『物類品隲』出版経緯に関する一考察」『書物・出版と社会変容』5 号、東京：「書物・出版と社会変容」研究会 p63-p78

水田紀久 2002 年『木村蒹葭堂研究 水の中央に在り』東京：岩波書店

山田慶兒編 1995 年『東アジアの本草と博物学の世界』上巻・下巻 京都：思文閣出版

横山秀夫編 1995 年『貝原益軒 天地和楽の文明学』東京：平凡社

吉見俊哉 2010 年『博覧会の政治学 まなざしの近代』東京：講談社